

偉大なる背徳者

エリック・メレマ 作

英日翻訳 ラリス 資子

[translator English Japanese](#): Motoko Rallis

© 2006 Eric Mellema
all rights reserved
www.nostredame.info

以下の方々に感謝いたします：

Motoko Rallis
Maria-Bonita Kapitany
Jack van Mildert
Liesbeth Gijsbers
Moene Seuntjens
Marleen van Haeren
Ria Adriaensen
Els Pellis
Guus Janssens
Ronald Mengerink
Arthur Hendriks

以下の方のご協力に深く感謝いたします：
Trudi Koning

第1章

「うう寒い。なんたる寒さだ」
「水星よ、愚痴を言うなかれ。あと 30 日で方向転換になる」
「誰だ？」
「私はヘルメス。お前の高次元の自己意識だ」
「ヘルメスか。よいところに来てくれた。軌道を回るのに飽き飽きして、気が狂いそうになっていたところだ」
「お前により知らせがある。ゼウスがお前の役目を終わりにしようとしたのだ。苦行もあとわずのこと。まもなく光り輝けるようになるであろう」
「なぜ、そんなことがわかるのか？」
「私は、天の川の中で最も早く動き、地上のいたるところで聞き耳を立てている。そして、メッセージを伝えることこそが仕事だからだ」
「では、あとどれくらいこれが続くのか教えてくれ」
「太陽と地球が並ぶときまで。もう間もなくだ」
「そうか。ちょっとした変化が期待できるわけだな。目下のところ、気晴しといえば、衝撃波（ショックウェーブ）を起こすことと太陽に当たることぐらいなのだから」
「俗人のお前は、今の単純な存在を懐かしく思う時が来るしれない。まあ、もう少しの辛抱だ」

比類なき予知能力を持つ生命が地球に誕生したのは、この1ヶ月後のことであった。ルネサンスの黎明期、フランスのサン・レミ・ド・プロヴァンスで将来の偉大なる占星術師が産声を上げたのである。商人で賑わう市場を背にした大邸宅。ここで彼は生まれた。

母、レニエール・ド・ノートルダムは、慎重に出産日を計算していたが、思いがけないときに陣痛が始まった。小さな

生命は、惑星が最適な位置に並ぶ時を狙って、少しばかり早めに生まれることにしたのかもしれない。

妊娠中に子宮頸部を塞いでいた大きな粘液質の塊が押し出された。出産の前兆である。出血に気付いたレニエールは、プロヴァンス宮廷の前の王、善良王ルネの侍医であった父、ジャン・ド・サン・レミを呼んだ。

公証人に昇進したばかりの夫ジャックと父ジャンが産室に駆け込んできた。レニエールは、汗にまみれベッドに横たわっていた。定期的な陣痛に襲われ、痛みがその頂点に達したかと思われたまさにそのとき、突然、陣痛が止まった。ジャンは、心配しながらも慣れた手つきでお腹を触り、胎児が動いていること、羊水の分泌が正常であることを確かめて安堵した。

ややあって、ふたたび規則的な陣痛が始まり、羊膜が破れていよいよ出産が始まった。ゆっくり、しかし確実にレニエールの身体は胎児を押し出すために開いていった。妊娠中、硬く閉ざされていた子宮頸部が、徐々に開いていく。風変わりな胎児は生まれることを拒むかのように抵抗し、分娩は困難を極めていた。分娩に10時間はかかるだろう。

やがて小さな頭が現れた。赤ん坊の目は世の中を批判しているかのように、大きく見開かれていた。赤子の頭を見たジャンとジャックは、驚嘆し、喜びに顔を見合わせた。次に肩が現れ、そして、小さな身体全体が苦も無く滑り出た。

「ミシェル！」

母親は、この小さな湿っぽい塊を誇らしげに歓迎した。ジャンは、まだ臍の緒の繋がった血まみれの赤ん坊をそっと取り上げ、母親のお腹の上に置いた。

赤ん坊は羊膜を被っていた[□]。この赤ん坊、すなわちミシェル・ド・ノートルダムは、1503年12月14日の正午ちょうど、聖レミ教会の鐘の音が響き渡る中、この世に生を受けたのである。

□ 羊膜を被って生まれた子供は、予知能力があるとされていた。

両親は、最初の子供の誕生に歓喜した。この子はカソリック信者として安全な将来が保証されている。ジャックとレニエールは共に由緒あるユダヤ教徒の一族の生まれであったが、数年前、ユダヤ教を信じるものは処刑されるという弾圧があったことから、余儀なくカソリックに改宗していた。

しかし、毎年12月には、ユダヤ教の光の祭り、ハヌカーを象徴する9本足の燭台をテーブルに飾り、この特別なお祭りに密かに敬意を払い、ジャックはタルムード[□]を詠んでいる。

その年のハヌカーは、生まれたばかりのミシェルを囲んで祝った。ジャックはおごそかに、タムラードこそハヌカーの驚異を伝えるものであると我が子に説いたが、産着にしっかりくるまったミシェルにとっては、単に父親の声にすぎなかった。

ミシェルは、はいはいからヨチヨチ歩きに成長し、日に日に新しい世界を発見していった。だれから見てもミシェルは好奇心の強い子供であった。目に入るものはなんでも興味を持ち、調べなければ気がすまない。家を訪れる客にはことに気を惹かれ、その髪をいじりまわすこともあった。

時をおかず、ミシェルは自分の領分を家の外へと広げていた。ただ、そこで出会った同じ年頃の子供たちには目もくれなかった。ミシェルにとって他の子供たちはただ同じ遊びを繰り返しているだけであった。ミシェルは、暖炉の前に座り、水をかけてその火を消しては、水蒸気があがる様子を飽きることなく見入っているような子であった。

世間の人々が彼の才能の片鱗を目にしたのは、ミシェルが初めて市場を訪れたときであった。一家そろって商品が並んだ店先を巡り歩いていた。まだ陳列台に背のとかぬミシェルは、その台の下の世界を眺めていた。魚の残がい、腐った果物、捨てられた内臓、それをかじるねずみ。破れた麻袋も

□ ユダヤ教の律法を記した聖典

あったり、辺りを行きかう無数の疲れ切った足も見えた。母親はそんなミシェルから目が離せなかった。

ド・ノートルダム一家は、祭日に備え、なにか綺麗なものを買おうと、ガラス食器を扱う店に足を止めた。一昔前までは、ガラス器はとても高価で王侯貴族のみの贅沢であったが、近頃は、ガラス器の生産もさかんになり、庶民にも手が届くようになった。商売熱心な商人は、一家を見るや、若い母親の歓心をかおうと最も繊細なボウルに唇をつけて見せた。

「奥様もご存知のように、磁器や木器、錫の食器は実用的ですが、見た目はガラス器にかないません。今やガラス器は大流行でございます」

レニエールは、ミシェルを引き寄せたまま、商人の語り口を楽しげに聞いていた。

「ガラスのコップにも、いろいろ種類がございます」彼は続けた。

「これを御覧なさい。豪華な朝顔形をした空洞の脚を持つグラスです。こちらは、気品ある脚長の聖盃タイプのグラスです。その後ろには、水玉模様の筒型のコップもございます」

「これは、なんと言う型なの？」レニエールが尋ねた。

「ベーケンメイヤーという型で、尻つぼみで脚がないのが特徴です。こちらには、底に細かい畝がついております。」

商人は、この一家は金持ちに違いないとにらみ、すべての商品を棚から取り出して見せた。ジャックは、畝模様のついたグラスが気に入ったようである。

「畝模様は、人気がございます」商人はすぐに繰り返した。

「もちろん、背の低いボウル型のグラス、ショットグラスとベーケンメイヤーも人気がございます」

「畝模様は、なんのためなの？」レニエールが訊いた。

「畝模様や水玉には滑り止め効果がございます」

「何が一番売れているんだい？」

「グラス類はどれも良く売れております。水差し類は、まだお値段が張りますが」このあたりで、ガラス器の幅広い在庫を持っているのは、彼だけのようである。自慢げに、手持ちのガラス器の中でも最も美しい水差しを取り出した。

この水差しにノートルダム一家は完全に魅了され、ジャックは、手にとって見せてくれるように頼んだ。その間、テー

ブルの下では、小さなミシェルは、おとなしく、商品で半分埋まった箱を眺めていた。テーブルの上では、ジャックがこの美しい水差しを取り上げたが、その瞬間、彼の手から水差しが滑り落ちた。

だれもが息をのみ、水差しが床に砕け散るのを覚悟したが、なんと、皆が見守る中、ミシェルがこの高価な水差しをなんなく受け止めたのだ。

この天から落ちてきたものにミシェルが唇をつけた瞬間、商人は小さな手から水差しを取り上げた。

商人に何度も謝ったあげく、気をそがれた一家は何も買わずに家路を急いだ。家に帰り着き、危うく難を逃れた父親は、息子をほめちぎった。

ミシエルのしつけは祖父ジャンにまかされていた。かつて、宮廷侍医を勤め、占星術者でもある博識なジャンはこの役目はまさにうってつけであった。ジャンは、ミシエルに、数学だけではなく、古代ギリシャ語、ラテン語、ヘブライ語をはじめ、占星術の基礎をも教えた。

ジャンは、夜になるとよくミシエルを村の外へと誘った。野原に寝転び星を眺めることができるからだ。そこで、ミシエルは、冬には北の星空が夏の南の星空より良く見えることや、オリオン座を目印にして簡単に大犬座や子犬座を見つけられることなど、冬の星座について学んだ。

「大きくなったら、お星様になりたいな」ミシエルが言った。「お前がそう言うとは偶然だな。ちょうど、犯した罪の償いに、星にされ空に昇った男の話の思い出していたところだ。自分の7人の姉妹であるスバルを追いかけまわした、オリオンのことだ。姉妹は恐れをなし、神に助けを求めた。神は、姉妹を救うために狩猟の女神を地上に送り、女神は一矢で、オリオンを仕留めたのさ。そしてオリオンは星になって空に昇った。だが、血と肉からなる人間に同じことができるか、私にはわからん。いや、たった今、思い出したが、古い聖典にもそんな記述があるから、何とも言えんな」

「ところで、スバルは肉眼でも見えるんだよ。ごらん、あそこだ」ジャンは、暗い星空を指さした。

「スバルはくっついているように見えるね」 ミシェルが指摘した。

「そうだね、くっついているように見えるが、それぞれ遠く離れているんだよ」

春が来て、ジャンはミシェルに、夜空に最も明るく光を放つ、アルクトゥルス、レグルス、そして、光り輝くスピカの春の大三角を描いて見せた。

その夏、星はよく見えなかったので、秋になってようやく、ジャンはミシェルに、羽の生えた馬、ペガサスを見せることができた。ペガサスは上下逆さなので、見つけるのは難しい。

この夜空の散策を通して、ミシェルは星座についての知識を深めていった。両親は、ミシェルとジャンが毎晩のように夜遅く帰宅することをぼやいてはいたが。

ある晴れた夜、いつものようにジャンはミシェルを連れ出したが、にわかに空がかき曇り、星一つ見えなくなった。ミシェルは、立ち込める暗雲を呪った。

その夜、きかんきな子は、長いカーテンで仕切られたベッドに横になっていたが、まだ、さっきの出来事にがっかりし、イラついて眠れず寝返りばかり打っていた。その時突然、窓の鎧戸が風に吹き開けられ、激しい竜巻が彼をベッドからさらおうとした。ミシェルは辛うじて窓枠にしがみつき、吹き飛ばされずにいたが、彼の身体は窓の外に吹き出された。

まさにその瞬間、母親の本能でレニエールが目を覚まし、夫をたたき起こし、危機一髪の我が子を助けに飛んできた。2人は力をあわせて、息子を部屋の中へ引きずり込み、鎧戸を固くしめた。

実際に何が起こったのかよく分からぬまま、親子は眠りについたが、しばらくすると、鎧戸が再び吹き開けられ、渦巻く風が怒涛のごとく、ミシェルに襲いかかった。今度は、ミシェルが部屋から吸い出される前に、即座に両親は彼を救い出し、鎧戸に釘を打ち永久に閉ざした。ミシェルは、2度とだれも何も呪わないこと、という忘れ難い教訓を得た。

ある日、グラスに住むミシエルの父方の祖父、ピエール・ド・ノートルダムとその妻から、一家を彼らの家へ招待したいという伝言が届いた。

ピエールは、善良王ルネの息子、ジャン2世の宮廷侍医であったが、ジャン2世がバルセロナで殺されたことを機に、香水の町として栄えるグラスに居を移していた。

ジャックとレニエールは、この招待に応じることにした。

グラスを訪問するのは、隣家を訪れるようなわけにはいかないし、ジャックとレニエールは、ミシエルの下に、男の子ばかり4人の子供を授かっていたので、旅のしたくには手間がかかった。忙しい家族である。

数週間後、したくは整い、父、母、3人の息子たちは、一団の馬に引かれた貸し馬車に乗り込んだ。ジャンは、下の2人の息子と家に残ることにした。

一家は、数日でカンヌに到着した。グラスへの道は、ここから内陸に入っていく。青々とした森に覆われた頂きの景観に誘われ、ノートルダム一家はここで休憩をとったが、それは誤りであった。すぐさま、ミシエルの小さな弟、エクトールが行方知れずとなり、岩の割れ目で彼を見つけるまで3時間かかったのである。エクトールを見つけたのは、もちろんミシエールである。エクトールは拳固をくらい、一家は旅を続けた。

彼らの背後には、まだ時折、地中海を垣間見ることができたが、夏の終わりが近づいた香水の産地には、花はわずかしは見られず、ミツバチが最後の蜜を求めて飛び交っていた。ついに、山の斜面にグラスの町が見えてきた。春になればグラスの町はまた花に覆われるだろう。

この豊かな商業の町の様子に、少年たちは心を奪われた。大小様々な皮をなめす工場があった。父親の話によると、最近まで、なめし工場は悪臭を撒き散らしていたが、悪臭が皮に染み付くのを防ぐために、グラスっ子は、獣脂と花の混合物を皮に染込ませることを考え出したのである。必要は発明の母とはこのことだ。香りの付いたハンドバック、手袋、ベルトは大流行になった。

馬車はガタガタ揺れながら、革製品を扱うたぐさんの店を通り過ぎ、ようやく、ピエールの住むエール広場にたどり着いた。浮かれきったミシエルの弟ベルトランは、馬車から飛び降りしやぎまわったが、すぐに父親に引き止められた。「まず、お祖父さんに挨拶をしてからだ」彼は言った。その間にもピエールは馬車に歩み寄り、すぐさま、荷物を運び始めた。その老齢にしては、ピエールはかくしゃくとして、未だに、医師ギルドで働いていた。ピエールにキスをした後、3人の兄弟は、まったく未知の、だが魅惑に満ちた町に夢中になって練り出した。

「しばらくの間、遊ばせておきましょう」レニエールは疲れた様子で夫に言った。「そうすれば、落ち着いて荷物が片付けられるわ」

子供たちは、香水商、石鹼職人、香水を蒸留している職人やその他の商人の間を歩き回っていた。

グラスは目もくらむよう町ではあるが、同時に下水道には蓋もなく、山のようなごみをかろうじて処理しているような、非常に汚い町でもあった。それにもかかわらず、街路には、芳しい匂いが立ち込め、そこかしこに、箱、麻袋、花の水を入れた風船、オイル、ワイン、ラベンダー石鹼、ハーブ、匂いのついた皮などがあふれている。

11歳になったミシエルは、この町に香りの楽園を見い出していたが、とある不思議な香りに惹かれ、その香りを追って、路地に入り込んだ。

「どこに行くんだい？」ベルトランとエクトールは驚いて尋ねた。ミシエルはそれに答えず、町の外に続くアーチ道に向かって狭い道を歩いていった。ミシエルは、石のアーチの下で、一瞬立ち止まり、目を閉じ匂いを嗅いだ。匂いはここが一番強かった。彼は、甘くもあり、闇の匂いもする奇妙な香りを深く吸い込んだ。匂いを堪能し、数分後、ミシエルは、弟たちが遊ぶ広場に戻ってきた。

この夢のようなグラスの町での休日は飛ぶように過ぎていったが、明日はとりわけ素晴らしい日になるだろう。有名な香水工場を見学するのだ。工場の持ち主であり、ピエール

の友人でもあるマダム・アマルフィが自ら工場を案内してくれる。

その朝、各地から集まった香水のバイヤーに混ざって、一家は工場見学に参加した。品の良いバイヤーたちの間で鼻をほじっていたエクトールは、父親にひどくしかられた。

アマルフィは、著名な香りの数々について説明していた。「青いフラスコ瓶は、女性向けのオー・ド・トワレとソリフロールです」アマルフィが一通りの香りの紹介を終えると、一行は隣のテーブルに移ったが、今度は、ノートルダム家の別の息子がいたずらを始めた。ベルトランがこっそり、フラスコ瓶を開けようとしたのだ。

「触っちゃいかん、ベルトラン」と父親が注意した。幸い、マダムはそれには気付かず、話を続けた。「ソリフロールは、たった一種類の花、植物、または、果物で香りをつけた水です」いろいろな香りの念入りな説明を聞いた後、一行は、精巧な器械が置かれた別室に案内された。

「これは、私どもの蒸留装置です。蒸留の技術はアラブ人によって発明されました」ミシェルとピエールは説明に聞き入っていたが、エクトールは母親におしっこがしたいと泣きついた。これにはアマルフィも気が散り、イライラと咳払いをした。

「いいわ、急いでおもてに行きなさい、でも静かにね」レニエールは子供に命じた。

「ジャスミンはもとはインド産ですが、最近、スペインの船員によって、北アフリカを経由して、グラスに紹介されました。メートル・ガンティエが、ジャスミンの独占権を得ています」気を取り直して、マダムは続けた。

「香水を買う良い機会だわね。」レニエールは夫に囁いたが、小さな子供たちの世話に気を取られ、ジャックは上の空で返事をした。幸い今のところ、子供たちはピエールのそばでおとなしくしている。ジャックは、ようやく話の最後の部分を聞くことができた。

「外国産のジャスミンと比べると、グラス産のジャスミン香りは、より深く濃いように思います。香水のお話をするときりがないので、この辺で終わりにしたいと思います、何か、ご質問がありましたらどうぞ。」

だれも予期せぬことであつたが、ミシェルが堂々と進み出て、少し話をしてよいかマダムに尋ねた。父親は、子供たちの突飛な行動に頭が痛くなっていたが、マダム・アマルフィは、ミシエルの礼儀正しい申し出に気をよくしたようであつた。小さな予言者は、せいっぱい胸を張って、数々の有名な予言に先立つ、まさに初めての予言を述べたのである。「将来、この香水工場は、モンテスキューという名の非常によく鼻の利く一人の学生によって大変有名になります。モンテスキューは3つの素晴らしい芳香を持つ香水を作り出します。そして、生涯の頂点で、自分のために、殺されたばかりの若い女の子の死体の匂いを持つ奇妙な香水を作ることになります。彼が亡くなったあと、工場はすたれていくでしょう。」演説を終えた少年は、堂々と両親の元へと戻つた。

その場にいた人たちは、驚きで言葉もなく、アマルフィですらなんと答えてよいかわからず途方にくれていた。少年の行動は礼儀にかなつており、ジャックは息子をしかることはできなかった。内容を理解できず、人々はこの暗い予言を2度と口にすることはなかった。風変わりな孫の行動に少しばかり戸惑つたピエールは、マダム・アマルフィに、興味深い工場見学のお礼を述べ、一家は家路についた。

またたく間にグラスでの休日も終わりを迎えた。

ジャンは、一家の帰宅を、ことに深い絆で結ばれつつあるミシエルの帰宅を大喜びで迎えた。馬車が、家があるレムパート通りに入ると、ジャンとミシエルは、お互いの姿を捜し求めた。長旅で疲れきつたエクトールとベルトランはすぐさまベッドに潜り込んだが、ミシエルはグラスでの自分の行動に興奮して寝るどころではなかった。

ミシエルは、祖父に話したくて仕方がなかった自分の奇妙な予言のことを夢中で語つた。ミシエルがグラスの不思議な匂いが彼の中で何かを呼び起こしたことを告げると、ジャンはまじめにそれを受け止め、自分の占星術に関する知識をすべて孫にさずけることを約束した。しかし、今日のところは、ミシエルの就寝時間は過ぎている。ミシエルは、ベッド

に入ったものの、興奮して頭が冴えわたり、しばしらく眠りにつくことができなかった。

数ヶ月後、ジャンがミシェルに占星術を教えるときが来た。ジャンは、ミシェルに占星術のすべてを教えるつもりで、ミシェルを屋根裏部屋へと伴った。そこは、ジャンの個人的な領域で、こそこそ嗅ぎ回ることはだれにも許されていない。ジャンは、繊細な装置が壊されることや、書類をなくされることを恐れて、特に子供の立ち入りを禁じていた。

安楽椅子に身をゆだね、ジャンは、その昔パリから精巧な装置を持ち帰ったことを明かした。それは、筒の両端に2つの磨かれたレンズが入った、遠くにあるものを見ることができる装置である。

「この発明のおかげで、私にこれまでは見られなかった世界が開けたのだ。私が思うところ、今やお前もこの世界を知るのに、十分な歳になった。私には、お前の素晴らしい未来が見える。お前は並はずれた知的能力に恵まれている。よってお前に私が知っている占星術のすべてをさずけよう。これまで、私がない時に、だれもこの部屋へ入ることは許さなかったが、お前は別だ。お前には、好きな時にこの部屋にある器械を使い、この部屋にある本を読むことを許す」ジャンは、立ち上がって、埃っぽい布カバーの下から大きな装置を取り出した。

「この望遠鏡を使えば、惑星をまるでその場にいるように、すぐ近くに見ることができる。だが、天空を観察する前に、少し理論を教えよう」ミシェルは、目を皿のようにしてこの心躍る装置を見つめた。

「占星術とは、宇宙の動きと地球上の人類に起こる出来事との関係を探すことだ。前にこの話をしたかな？」

「いいえ」ミシェルは首を振った。

「私の記憶も昔のようではなくなったよ。この研究を通して、我々は、一瞬の情報を使ってその後起こる一連の出来事を追うことができる。つまり、将来を予言することができるのだ。これは、みかけより難しい。大昔から、太陽、月、惑星が、地球上の我々の生活に影響を与えることは周知の事実だ」

ジャンは、再び立ち上り、屋根裏部屋の鏡戸を開けて、望遠鏡を台座に据えた。

「こっちに来てごらん。太陽がちょうど沈んだところだから、きっと、惑星がいくつか見えるだろう。どれどれ、、見えた。ミシェル、見てごらん。太陽の残光の真上に水星が見える。水星は、知性と知的能力を象徴する惑星だ」ミシェルが器械をのぞくと、そこにはピンク色の惑星がきらめいていた。

ジャンは言葉を続けた。

「お前も知っているように、地球は太陽の周りを回っている。教会は、その逆を言っているがね。その上、教会は、未だに地球は平らで、人間が地球の端から墜落することもあると主張しているんだ。まったく、戯言だ。彼らにとっては、信者が無知であるほうが都合がいいんだよ」

「でも、太陽も1年で一周しているんでしょう？」

「そうだ。でも地球の周りではなく、いろいろな星に沿ってだ。その星の一団は十二宮と呼ばれる。例えば、双子座、牡羊座、牡牛座などだ」

「僕は、射手座だよ」

「その通り。でも、今は射手座の時代ではない。太陽がそのそばを通るまでには、まだしばらく時がかかる。」

ジャンは望遠鏡をのぞきながら話を続けた。

「水星は太陽に近すぎて、いつもは良く見えないのだが、今日は運がいい」ジャンは、ミシェルに望遠鏡をのぞかせた。

「水星は、あんまりおもしろくないよ」ミシェルはレンズをのぞきながら言った。

「それなら、月を見てごらん」ジャンは雲のない夜空の天体をながめた。

祖父と孫の間には、真の愛情がつちかわれつつあった。それは、多分、二人が似たもの同士であるからだろう。二人は、同じような華奢な体つきで、同じものに興味を持っている。ただ、孫にはこれからの人生が待ち受けているが、祖父の人生はもう残り少ない。

「これなら、お前も気に入るだろう。」ジャンは、脇によった。

「すごいや」巨大な月と数多くのクレーター、山々と谷間を見つめて、ミシェルは叫んだ。

「お祖父ちゃん、月の上を誰かが歩いているよ。」

「ハハハ。そりゃ変だよ。もしそれが本当でも、遠すぎて見えるはずがない。」

「本当に見えるんだって」ミシェルは固執した。「その人は、赤と白の縞模様と星のついた旗を立てているよ。」

ジャンは信じられないといった面持ちで、望遠鏡を取り返した。そこには見慣れた月があった。遠すぎて人がいても見えないだろう。

「ミシェル、私には、お前が見たものが見えないよ」

「たぶん、それは、未来に起きることかもしれないね？」

「不可能なことは何もない。ミシェル。だが、私は自分が知っていることしか教えてやれない。それでも、どうやって星を占うかお前に教えてやりたい。」彼らは、星空を後に、ベッドの上に腰を下した。

「星を占うには、いくつかの事柄、すなわち、生まれた日、時間、場所を知らなければならない。だが、一番大事なものは、誕生日だ。例として、お前の星占いを見せてやろう」

ジャンは、机の引き出しから、奇妙な記号で埋められた一枚の紙を取り出した。

「それは僕の？」

「どれどれ、1503年12月12日、サン・レミ生まれ。そうだ、お前のだ」

「僕の誕生日は14日だよ」

「14日だって？最初に間違っ書いてしまったに違いない。

いつも、3回はチェックするんだが、歳のせいだろう」ジャンが謝った。

「ともかく、お前は、外周の惑星、火星と木星と土星に強く影響を受けている。このし烈な配置のせいで、お前には、自分の創造力をコントロールする強い自制心が必要になる。さもなければ、その力はまわりを破壊するだろう」

「つまり、寺院を全壊させたサムソンみたいに？」

「フム。あまりいいたとえではないが、いずれせよ、お前は自分のエネルギーをうまくコントロールする方法を学ばなけ

ればいけない。すべての人間は善人であると同時に悪人でもあることを忘れないように」ジャンは、再び、十二宮図に注意を向けた。

「この図は、12の宮を示している、そして、」しかし、ジャンの声は弱々しく途切れた。

「疲れたよ」彼はあえいでいた。

「でも、もっと勉強したいなら、あそこの厚い本にすべて書かれている」彼は本棚を指差した。このとき、もはやジャンはミシェルに答えることもできなかった。

日増しに、ジャンとミシェルは絆を深めていった。彼らはしばしば、サント・レミから数マイル南に密かに建つ古い修道院[□]で、丸一日過ごした。そこで、聖書の原作を読み数時間を費やすこともあった。

ミシェルは、とりわけ、祖先がユダヤ教徒であったという生い立ちにもかかわらず、キリスト教の神に祈ることを学び、カソリックの教義に苦も無く従った。結局のところ、キリスト教もユダヤ教も、旧約聖書に書かれた同じ神を信仰しているのだ。ジャンは祈りを捧げるときに鼻歌を歌っていた、少なくとも2人だけの時は。

天気の良い日には、修道院からラベンダー畑に囲まれた野原に散策に出た。そこで、彼らは、陥没しかかったピラミッドのような不思議な建造物を見つけた。

「古代ギリシャの時代のものだ」博識なジャンに説明できないものはない。そこでジャンは一休みした。一方、元気いっぱいミシェルは、ジャンが日課の昼寝をする間、周りを探索していた。

ある日、ミシェルが息せき切って戻ってきた。

「この先の崖に、いろいろな穴が開いているんだ。来て見てよ」しかし、ジャンはその場を離れず静かに説明した。「昔、山羊飼いが、山羊を他の動物から守るために掘った穴だよ」ジャンはこの穴をすでに見つけていたに違いない。

□ 1890年、ヴィンセント・ヴァン・ゴッホがここに滞在した。

ある時は、ジャンは起き上がることができず、ミシェルは、ジャンを家へ、文字通り、引きずって帰らなければならなかった。

青年期に入ったミシェルは、次第に女の子を意識するようになった。彼の師にとっては、2つの魂の結婚について語る良い機会であった。ジャンは、いかにして、男と女の魂が合体するか、男と女が概念が世界中のいたるところで表現されているかを説明した。

「つまり、男の惑星と女の惑星があるってということ？」ミシェルは訊いた。

「原則として、惑星はすべて女性だ。だから、地球を母なる地球と呼ぶんだよ」

「じゃあ、宇宙で、僕たち男は何の意味もないわけ？」

「いや、星は男性だ。一方、塵と闇は女性だ。永遠なる両極性は、錬金術の基本だよ」

ミシェルは、子供時代の大半をジャンと共に、家の外で過ごし、この急速に成長する息子と両親が顔をあわせる機会、食事の時くらいしかなかった。それは、ミシェルとジャンのせいばかりではない。ジャックは、公証人として一日中働いていたし、レニエールは、家事で忙しいばかりではなく、ミシェルの弟の子育てで手が一杯であった。特に、7歳になったアントニーは強情で手がかった。ミシェルは、ほかの弟たちとは仲良くしていたが、一緒に遊ぼうなどということは考えもしなかった。

時は平和に過ぎていった。そして、とうとう一家に深い悲しみの朝が訪れた。その朝、ジャンが老衰でなくなったのだ。祖父が衰弱していくようすを見守ってきたミシェルは、この日がくることを覚悟していたものの、やはり衝撃を受けた。

埋葬のために運び出すまで、一家は代わる代わる、夜通し遺骸のそばに付き添っていた。ジャン・ド・サン・レミの葬儀の日は小雨が降っていた。葬儀には、家族全員が参列した。年老いたピエールとその妻はグラスから、ジャンの3人の姉妹といとはマルセイユから駆けつけた。

スロンジェ教会で、カソリックの葬儀が行われた。棺が安置された教会まで、一家は、年老いた祖父母の歩みに合わせて、ゆっくりと歩いていった。その間、ミシェルはアール広場に集まる塔のある邸宅を慎重に観察していた。

ようやく、一家が教会に到着すると、そこには、すでにたくさんの方や知人が一家を待っていた。入り口で、ミシェルは、ペンキで汚れた靴をはいた赤毛の大きな男にぶつかった。見るからに招待された弔問客ではないその男は、葬儀に参列しようとしていたが、ミシェルは気に止めなかった。

葬儀の行列は、円形の扉を持つ門をしめやかに進んでいった。最初にジャックとレニエールが教会の柱の間を進み、その後ミシェルと4人の弟たちが、歳の順に続いた。悲しみに打ちひしがれたレニエールは、時折、涙をこぼしていた。

棺が手礼拝堂の中央に安置され、参列者は木製のベンチに腰を下した。

スロンジェ教会には、血のように赤い枠で仕切られた窓を持つ数々の礼拝室がある。天井高くには、使徒の聖画が描かれていた。

最後の参列者が席につき、色あせた赤いストラをまとった、ベルジェ神父が説教を始めた。だれもが知るように、葬儀は死者の魂の浄化と永遠の安らぎを願うものである。

「人の死とは、その肉体がこの世を去り、その魂が神の元へ召されるということです。これは、終わりではなく始まりです。この世で善行を施した人は天国へ昇り、悪行を行った人は地獄へ落ちるのです。生から死へは簡単な道のりではありませんが、我々は神のご加護の下にあります。神は、人間のさまざまな行いを理解し、その人のあるがままを受け入れてくれるのです」

説教台を前に神父は聖書をめくり、長々としたラテン語の福音を読み始めた。

ミシェルはあたりを見回し、脚のついた洗礼盤に目を留めた。彼の友だちは、この洗礼盤で溺れかけたことがある。そこかしこに、キャンドルが灯されていた。前方の礼拝室にあるこの教会の創設者の墓標にも明かりが灯され、その彫像が浮かび上がっていた。

ジャンの影響で、ミシェルも芸術と文化に興味を抱き、スロンジェの教会には何度も足を運び、教会の内部を良く知っていた。

ミシェルは、ベルジェ神父の単調な声を聞いているより、壁画をながめたり、地下にある聖具の保管庫を調べたりしたかった。ジャンもその方が喜ぶであろうとは思ったが、行動には移せなかった。

「生は、死に先んずる」とジャンは、しばしば口にしていたものだ。

ようやく、神父は今度はフランス語で死者の善行をたたえ、参列者も姿勢を正した。耳の遠いカリヨン奏者は、48の鐘を鳴らすことを待ちきれず、すでに塔楼を登り始めていた。

神父は、乳香のする聖水を亡骸に振りかけた。これにより、死者が神の御前で神聖なものとなる。侍祭がジャンの現世での罪の許しを乞う祈りを捧げた。

賛美歌の斉唱の後、神父と侍祭に続いて、棺が教会から担ぎだされた。参列者は、その後ろから、鳴り響く鐘の中、沈黙のまま、墓地へと向かった。

家族、友人とその他の関係者に見守られ、棺は静かに墓の中に降ろされた。レニエールは、数本の花を墓に投げ入れた。

神父は、「我らの父よ」とだけ言葉にし黙禱を捧げた。祈りを終えた神父は、「土は土に、灰は灰に、塵は塵に」と少しばかりの土を墓の中に投げ入れた。

参列者は棺の上に土をすくい入れ、陽気だったジャンに永遠の別れを告げた。ミシェルは、かけがえのない親友であったジャンがゆっくりと見えなくなっていくのを見守っていた。

ジャックが参列者のお悔やみに感謝を述べ、葬儀を終えた家族は悲しみの内に帰途についた。

喪が明けたある日、ミシェルとレニエールは、屋根裏のジャンの神聖な書斎へと上がった。まだ、悲しみに沈んでいるレニエールは、錠戸を開け部屋に光を入れた。2人は、ジャンの持ち物を調べていたが、ミシェルは、ジャンの思い出がこみ上げ悲しみに打ちひしがれ、ぼんやり屋根裏の窓から外を眺めていた。

「屋根裏も、お祖父さんがいなくちゃ、もぬけの殻だ。」ミシェルはつぶやいた。息子の一人が階下からレニエールを呼んでいる。

「ミシェル、すぐ戻るわ。」レニエールはミシェルを残し、階下へ降りていった。

屋根裏の窓からは、サン・レミの町並みが良く見える。ミシェルは、彼の知らぬうちに、半マイル離れたあたりに新しい家が建っているのに気づいた。ガラスの入った窓の一つが開いている。今までにガラス窓など見たことがなかった。

そうだ、お祖父さんの望遠鏡を使ってみよう。ミシェルは、望遠鏡を取り出した。家の隅から隅まで良く見えた。ミシェルは、家の中をのぞいてみたいという衝動を抑えることができなかった。

家の中では、長身で短い黒髪の男が、熱心に画架に向かい、絵を描いていた。

どうしてひまわりなんか写生しているんだろう？ミシェルは驚いた。見知らぬ人は、キャンバスの前に立ち、繰り返し筆を絵の具に浸していた。彼は、別の絵筆を取り上げ、細かいところを描き加え、また、テーブルの上に無造作に置かれたひまわりに目をやった。

突然、画家は、誰かに見られていることに気付いたかのように、ハッと振り返った。ミシェルは、こちらが見えるはずはないことを知っていても、のぞき見が見つかったように驚いた。それでも、その男は、ミシェルを親しげに見つめているようであった。

ようやく、ミシェルは、自分が未来をのぞき見みしていることに気付いた。別世界は、すぐに消えてなくなり、その家もまた姿を消した。

もう僕の白昼夢を語り合える友はいない、ミシェルは悲しかった。

第2章

ジャンの死から数ヶ月が過ぎ、16歳になったミシェルは占星術を学ぶためにアヴィニョンへと旅立った。大学で占星術を専攻するというミシエルの変った選択を両親は不承不承ながらも許したのだ。アヴィニョンは、サン・レミからたった20マイルしか離れていないので、頻繁に両親や兄弟を訪問することもできるであろう。アヴィニョンは法皇邸がある重要な都市である。1304年以来、ローマでは生命の危険を感じたフランス人の歴代法皇とカソリック指導者はアヴィニョンに居を移していた。以来、この町とその周辺は法皇領となっている。

ジャックは、彼の顧客の一人であり6ヶ月前にペストで夫を亡くした、プロンベール未亡人が娘とともに、親類を頼ってアヴィニョンへ引越すことを聞きつけた。ミシェルは、未亡人の引越しの手伝いをする代わりにアヴィニョンまで馬車に乗せて貰うことができる。ミシェルはこの取り決めに同意し夫人と日取りを決めた。プロンベール夫人は、先週すでに家の整理を終え、すべての荷物をまとめて若き旅の同行者、ミシエルを待っていた。

出立の朝、ミシェルは、プロンベール家を訪れ、夫人の指示に従い、年代物の壊れかかった馬車に夫人の荷物を積み込んだ。思いがけず隣人も手を貸してくれたので、すべての荷物はすぐに積み込まれた。

夫人は、2人の娘と共に御者台に着き、ミシェルが家族に別れを告げられるようにレムパート通りへ馬車を進めた。

ミシエルの家族は、馬車に慣れない夫人が馬を止めるのを待ち構えていた。ミシェルは馬車を飛び降り、父親と母親を抱擁した。母親は別離の寂しさに隠せずにはいた。

「これから先、お別れを言う機会が増えそうだが」レニエールはその美しい顔を涙で曇らせ嘆き悲しんだ。

「すぐに戻ってくるよ」息子は約束した。

「そう願うよ」父親は、息子を固く抱きしめた。大学生になりたてのミシェルが兄弟に別れを告げると出立の時が来た。一家は、馬車が視界から消えるまで手を振りミシェルを見送った。

サン・レミからいくらかも離れぬうちに、雨が降り出した。雨は土砂降りとなり、あたりにもわかにかんじ暗くなり一行を脅かした。幸いにも、夫人は雨に備えていたので、ミシエルの助けをかりて荷台をキャンバスで覆った。天を裂く稲妻に馬は落ち着きを失い、夫人は馬車の制御に苦心していた。5歳と7歳になる子供たちは、キャンバスの下で身を縮めていた。道にあふれる雨水で、馬車を進めることは困難を極めた。彼らは窮地にたたされたようである。

旅も半ばに差しかかった頃、道の両側に気味の悪い炎が燃え上がっているのが見えた。死体を燃やしているのだ。ペスト、この人類史上最悪の疫病が、再び猛威をふるい、ヨーロッパ全体を恐怖に陥れていた。夫人は、誰よりもこの炎の意味を知っていた。ペストの感染を防ぐために彼女の夫が茶毘に臥されたのは、最近のことだ。しかし、彼女は果敢にも恐怖に耐え馬車を進めた。

突然、離れたところから悲鳴があがった。だれが助けを求めているに違いない。だが、一行はそれを無視して旅を続けることにした。いつになく雨は激しく降りしきり、それに追い討ちをかけるように突風に見舞われた。馬はぬかるみに脚をとられながらも、かろうじて馬車を引いていた。馬は疲れきり、1メートル先に進むことが、あたかも大勝利であるかのようだった。嵐はさらに荒れ狂い、あたり一面に枯れ木や枯れ草が舞い上がった。

「この世の地獄とはこのことだわ」時折、夫人は怒りをもらしていた。幾度も瓦礫に道を阻まれ、その都度、ミシエルは瓦礫をどかした。何時間にも及ぶ嵐との苦闘の末、疲れきって濡れぬずみとなった一行はようやく法皇領に達したが、苦難の旅はまだ終わったわけではない。ローヌ川を越えねばならない。向かい風に行く手をはばまれながらも、一行は有名なアヴィニオン橋に到達した。ここまで、夫人とミシエルは、交互に手綱をとっていたが、風が吹きすさぶ橋を前に、

夫人は自ら馬車を御して橋を渡ることにかたくなに主張した。夫人が荒れ狂う川を渡ろうと馬に鞭を入れたその瞬間、ミシェルがいきなり叫んだ。「止まれ」夫人はすぐさま手綱を引いた。馬がいなき、馬車は急停止した。末娘が泣き出し、姉は懸命に幼い妹を慰めた。

「いったいどうしたわけなの」母親は驚いて尋ねた。ド・ノートルダムは、何も言わずに泥の中に飛び降りると、恐れを知らぬかのように、嵐の中を外套をなびかせ確固たる足取りで橋に向かった。そして石の橋脚のもとで立ち止まり道に見つめた。増水した川の流れを感じ取るとミシェルは馬車へ戻った。

「何をしているの？」プロムベール夫人は叫んだ。

「荷物を馬車から降ろしなさい」彼は答えたが、激しい風に彼の声はかき消された。

「気でも狂ったの？」

「今にも橋が崩壊しそうです」ミシェルは御者台に乗り込み説明した。

「何をバカなことを。何十年と荷馬車が橋を往来しているのよ」夫人は怒りもあらわに反論した。夫人に抵抗するためにミシェルは荷馬車から飛び降り、腕組みをして泥の中に座りこんだ。しばし思いあぐねた後、夫人は、彼の言うなりになることにした。

「しょうがないわ、その代わりあなたが働くのよ」夫人が命じるとすぐにミシェルは、荷物を対岸へ運び始めた。母親は、キャンパスの下から子供たちを抱き上げ、手をとって、彼らの奇妙な同行者の後を追った。対岸に着くと、夫人と娘たちは、岸壁の脇に避難場所を探し、その間にミシェルは馬と荷馬車のもとへ戻った。

ミシェルは、橋を何度も往復し家財道具一切を運び終えると、長いロープに馬をつなぎ橋に向かって歩き出した。彼らの頭上には暗雲が流れ、馬は動こうとはしなかった。ミシェルは、強く馬を引き、拍車をかけた。馬は嵐に怯えながらも恐る恐る歩きだし、それにつれて馬車もゆっくり動き出した。彼らは橋に近づいた。古い橋は堅固で壊れる気配などない。ミシェルは馬と馬車を引いて橋を渡った。

何事もなく橋を渡り終えると、渋い顔の夫人は、その後一

切ミシェルと口をきかなかった。荷馬車に荷物を積み込み一行は旅を続けた。ようやく、大都市、アヴィニオンに近づいた。

ちょうど日暮れ時に彼らは目的地に到着し、時をおかずミシェルはプロンベール家族と暖炉にはげる炎の前で暖をとり一息ついた。食事を取りしばしの休息をとれば、彼らの道は別れていく。ミシェルは、夫人の親切と荷物を運んでもらったことにお礼を言い、大学に向かって歩き出した。

町の中心では、市長が最新ニュースを告げていた。ミシェルは集まってきた群衆に連なった。市長はもったいぶった様子で、巻紙を開いた。

「今晚、アヴィニオン橋が崩壊し7名の死者がでた」市長が話し始めた。「橋は、1226年にも崩壊している。皆もわかったであろう。あの橋は神の思し召しにかなわんのだ。かつて、橋を建築したベネゼを聖人としたのは間違いであった」

群がる聴衆にミシェルの視界は阻まれたが、もう十分話を聞いたミシェルはその場を立ち去った。

川にそびえる断崖の上に歴史をたどるアヴィニオンは、辛らつな気風を持つ町であった。かつては、ケルト族の中心地であった町は、ケルン、リヨン、アルルを結ぶ、有名なアグリッパ街道に位置しているにもかかわらず、よそ者を受け入れない。昔、お祖父さんは、アヴィニオンっ子の無慈悲さを「パリでは人は議論する、アヴィニオンでは人に刀を突き刺す」と評したものであった。

ミシェルは気持ちを落ち着けようと法皇公園のベンチに腰を下ろした。大学の門をくぐる前にその門の前にある樫の木を一心に眺めていた。最近、ミシェルはよく夢を見るが、もはや夢と現実の区別を付け難いときすらある。これを明確に区別する方法を見つけなければならない。占星術を学ぶことはその助けとなるかもしれない。

ひとしきり物思いにふけた後、ミシェルは、教官に会い、その助言に従い、大学に程近い小道、アグリコル通りの小部屋に居を定めた。その日から毎日、市街を通り大学に通った。

町の上に張り出した崖の上にある岸壁公園からは町の概観をつぶさに見ることができる。ここから町を探索するのは容易であった。ミシエルは大通りを散策することを好んだ。歩きながら学んだことを熟考することができるからだ。彼は学生の大半と調子を合せていたが、学生たちはすぐに、ミシエルの並外れた知能に嫉妬を覚えるようになった。

占星術の奥義を教える大学に入学して最初の数ヶ月の間に、ミシエルは有益な知識を体得した。ミシエルは、人間が合計7種の様々な形態を持っていることを学んだ。実態、存在維持、幽体、精神、そしてより高次元の形態であるカウザル、ブディ、アトマである。この7つの形態は、意識の7つの状態を表しており、惑星と星もまた、この7つの形態から成り立っていることを教わった。すべての形態は、互いに繋がりをもち、少なくとも催眠状態では、すべての人間に存在する。人間の実体は目に見える肉体であり、最も未熟な状態である。存在維持は、肉体を維持し肉体が必要とするエネルギーを与える。感情と繋がる幽体は主として夢の世界に現れる。精神は人間の思考を表す。カウザルは、思考が原因と結果の因果関係の境地に達した時のみに到達できる状態である。ブディは真に目覚めた状態、アトマは生命の呼吸であり、人間がこの7つの状態を会得し、自我を消失したときに達する境地である。興味深い理論であるが、残念なことに実例がない。

ある日、ミシエルは運動をしようと、早朝5時に時計広場を訪れた。この時刻の時計広場は、まだ人に汚されておらず清浄で、だれに邪魔されることもなかった。運動を終えて爽快な気分で、街路を抜け町の城壁の外側へ出た。するとどこからともなく、衛兵に守られた数台の馬車が現れ、奇妙な場面が繰り広げられた。大柄な男たちが大急ぎで、疲弊した馬を新しい馬に交換している。その上、一台の馬車の中には短軀だが太った男が2人の強面の衛兵に挟まれ座っていた。男の胸はたくさんの勲章で飾られていた。

男は何か罪を犯したに違いない、ミシエルは確信した。この護送隊は、市民のいらぬ関心を惹かないように早朝に到着したのだ。馬の交換と、蓄えの積み込みには時間がかかっ

た。その間、ミシェルは、興味深く囚人を見ていた。この男は誇大妄想癖があるらしい、皇帝の貫禄を備えている。

いきなり、あたりは大騒ぎになった。サン・ラザール広場から、大勢のアヴィニョンっ子が「コルシカ生まれのちんちくりんの伍長」に復讐しようと駆け寄ってきたのだ。衛兵は暴動を抑えようとしたが、逆上した市民を取り抑えることはできず、暴徒は馬車を囲み、着飾った囚人をあらゆる名において罵った。また別の一団は、男に向かって石を投げつけたり、刀で脅したりしていた。ともするうちに数名が馬車に飛び乗り、囚人の名誉勲章を引き剥がし始めた。そこへ、急を聞いて駆けつけた将校が現れ、かろうじて暴動を鎮静した。最後の馬が大急ぎで繋がれ、衛兵が馬車から暴徒を引き離し、ようやく、「ちんちくりんの伍長」を乗せた馬車は、包囲を逃れることができた。他の馬車も次々と後に続いた。

ミシェルはこの出来事について考え込んでいた。

「おいお前、そこに根でもはやしちゃったか？」いきなり職人が悪態をついた。

「たった今の暴動を見なかったのか？」

「うんにゃ、俺にはよそ者しか見えん。よそ者がわしらの縄張りに入るのは気に入らん」職人は荷車を引いて立ち去った。昔ながらのアヴィニョン気質だ。

たった今見た奇妙な暴動*は、ミシェルの幻覚以外のなにものではなかった。

最初の学期の終わりには、教師たちはこぞって、若きド・ノートルダムをほめちぎった。それは素晴らしいことであったが、すでに祖父から占星術について深い教えを受けていたミシェルには教師が教えることはあまり残っておらず、ミシェルも彼らがさらに自分の知識を広げられるものとは期待していなかった。

幸い、大学にはミシェルがこれまで想像したことすらないような素晴らしい3階建ての図書館があり、ミシェルはここ

* 1814年失脚した皇帝ナポレオンはアヴィニョンで石を投げつけられるところであった。

で古文書を調べて時を過ごすことを好んだ。教師たちもミシエルに関連分野について独自の研究することを薦めた。教師たちの指示で、グリムベルト氏一司書である彼は持病のために震えが止まらない一は、図書館の離れた一面に一連の書物を集め、ミシエルがだれにも妨げられず研究ができるようにはかった。すぐにミシエルは積み上げられた書物に没頭した。これまで、祖父が書いた書物の他には聖書しか深く勉強したことがなかったミシエルには願ってもないことであった。

しかし、結局のところミシエルが本当に興味を持ったのは錬金術についてのある書付のみであった。錬金術と聞いて、陳腐な発想ではあるが、だれもが年老いた髯の魔術師が埃だらけの古い実験室で奇異な実験をしている姿を思い浮かべるであろう。しかし、その書付は彼のそんな錬金術への先入観をくつがえしミシエルの研究心をかきたてた。

その書付によると、錬金術は十字軍遠征ののち、アラビア人によってスペインに紹介された。そこで、ミシエルは何日も費やし、スペインに関する書物を徹底的に調べた。調査を進めるうちに、12世紀にアルティフィウスによって書かれた「人間の寿命を延ばす術」というタイトルの文書に目を奪われた。この興味深い文書はラテン語で書かれていたが、ラテン語には慣れ親しんでいたミシエルはすぐに読み始めた。

「余、アルティフィウスは、これらの術すべてをヘルメスの魔術の書によって学んだ。これまでの長い人生で、完璧なる錬金術を欲する民に行き会ったが、余は多くの民がこの術を手にするようにこの術について書き残すことを望まない。なぜならば、錬金術は、神または、マスターにのみ明かされるべきものであるからだ。よって、博識で自由な精神をもったもののみが読むときに限り余の書は有益である。余もかつては他の者と同じように嫉妬を覚えたものである。余は千年に渡る年を神の情けのみによって生きてながらえている。」

この男はメトセラと同じくらい老齢だ、ミシエルは興奮した。彼は、この2冊の本を読むことを心に決めたが、根気よく探したにもかかわらず、これらの本を見つけることはできなかった。

ヘルメスが書いた本は、おそらく存在すらしないのであろうと考え、代わりに見つけ得るすべての錬金術に関する文書を読むことで我慢した。

ある文書では、「賢者の石」と呼ばれる神秘の物体を使うことにより、金属を金に変えることができると記されていた。何世紀にも及ぶ探索にもかかわらず、この石はいまだに見つかっていない。13世紀には、ほとんどの錬金術者はこの石の発見を諦めていた。

他の文書では、錬金術は医学的効果があると記されていた。塩、硫黄、水銀を正しい配合で摂取すれば、人間の健康に良い効果があるというのだ。

ギリシャ哲学者のタレスとアリストテレスは、地球、水、空気、火が基本要素であるとし、すべての物質はこれらから創造されると述べているし、他の文書では、5つ目の要素、エッセンスを言及している。今日のところは十分に読んだ。ミシェルは本を閉じた。

「グリムベルトさん、ありがとうございます。また明日」また一日が過ぎ、疲れを感じたミシェルは、サン・アグリコル通りの質素な部屋に帰り、温かい粥を作って食べた。

彼は、ヘルメスの書物を思い瞑想してみたが何も起こらず、次に「賢者の石」を試してみたが、思わず居眠りしてしまっただけであった。

その夜、彼の望みはかなえられた。ミシェルの迷える魂は、崇高で力強い何かに触れ、彼は身震いしベッドに起き上がった。

「ミシェル・ド・ノートルダムよ。我こそがそなたが探し求めている者である。余はヘルメス。ゼウスとタイタンの一人であるアトラスの娘マイアの息子である」ミシェルの目の前には、羽のついた帽子を被り、蛇の巻きつく杖を手に、筋骨逞しく光輝く人物が座っていた。ヘルメスは続けた。「余は3つの世界の主導者である。アルカディアの洞窟に生まれ、神々の中では最速であり、泥棒の神でもある。エジプト人は余をトート、ローマ人は余を火星と呼ぶ。余は、創世記によるところのヘルメス・トリスメギトスである。余は、「石への望み」、「賢者の石」そして、「エメラルド・タブレット

ト」である。現世における我が弟よ、お前の運命は定められた。お前には、来るべき次世紀に地上で再現される宇宙のドラマの役が与えられた。しかし、月が満ちるまでの間は別の方向へと進みたまえ、黒死病によってお前の眠っている知能が目覚めるまで」ヘルメスは出現した時と同様にいきなり姿を消した。後には巨大な虚無が残った。ミシェルは、この強力で超自然的な対面に耐え切れず、その場に倒れこみ、翌日の昼過ぎまで目覚めなかった。気分がすぐれなかった。それでも、つまずきながら立ち上がり、かばんを手にし、大学へ行き勉強にしようとしたが、もうすでに大学に行くには遅すぎるし気持が混乱しているので、再びベッドに腰を下した。「ひどく気分が悪い」彼はうめいた。苦勞して、昨夜のヘルメスからのメッセージを思い出したが、その意味は理解できなかった。

その頃サン・レミでは、高次元の力に動かされ、父親は息子があまり実用的ではない学問を学んでいることを気に病んでいた。占星術は科学として認められつつあったが、実際に役に立つものではない。彼は、レニエールに相談した。初めは、レニエールはミシエルの選択を支持していたが、ジャックが占星術を学んでも将来は覚束ないという事実を繰り返すと、ついに彼女も占星術の不利な点はその利点を上回ることを認めた。

彼らは、息子に手紙をしたためた。その中で、彼らの心配を述べ、医学を勉強することを薦めた。結局のところ、両親は医者であったのだから。

翌日ミシェルは手紙を受け取り、両親の学問の道を変えたらどうかという提案を読んだ。彼は、ヘルメスが進路を変更するように語ったことを思い起こしその偶然に驚いた。

医学こそ我が道である、彼は結論を出した。翌日、彼らの信用を傷つけないよう気を使いつつ、教師に相談した。教師たちもミシエルの両親の説に理解を示し、ミシェルは和やかにアヴィニヨンの学び舎を後にした。

短期間、家族のもとに滞在した後、すぐにミシェルは、次の大学があるモンペリエへと旅立った。

「ようこそ、ド・ノートルダムさん」ミシェルが入っていくと、大学の職員は親しげに挨拶した。

「すぐに教室にご案内します。あなたが最後ですから」ふくよかな彼女は、やっとのことで椅子から立ち上がり彼を案内した。彼らは主廊下のつきあたりを曲がった。

「講義はすぐに始まります。ハシェ教授が講義します」彼女は告げた。彼女はミシェルを後方の教室に連れて行き、非常に生き生きとした目の青年の脇に座るよう空席を指差した。

職員とは異なり、ハシェ教授は生徒に挨拶するでもなく、すぐさま授業を始めた。

「数千年前、人類最初の医者は、患者の頭蓋に穴を開けることにより病気の治療を試みた」彼は言った。ミシエルの隣のフランソワは、わざとらしく彼の額を指した。

「その通り、このことがその身振りの所以だ」フランソワの行動に気付いたハシェが言った。

「しかし、まったく的が外れているわけではない。病気の元と考えていた悪霊を身体から追い出そうとしたのだ。これを穿頭と呼ぶ」トゥルーズから来た学生が手を挙げた。

「質問は、講義の後で聞く」教授は言った。

「古代ギリシャ時代においては、病人は寺院へ行き、医学の神アスクレピオスに生贄を捧げ、治癒の水を飲み、その水で身を清め、厳しい食事制限に従った」同じ学生が手を挙げた。

「私がたった今言ったことが聞こえなかったのか？」教授は言った。

「私は、悪霊を腕から追い出そうとしているだけです」学生はおどけて言った。

「すぐに出て行きなさい」ハシェは予想以上に厳格であった。学生は、青ざめて立ち上がり教室を後にした。

「くだらん冗談は私の授業では許さん」教授は講義を続けた。

「紀元前400年には、ギリシャの医師、ヒポクラテスが科学的医学の基礎を築いた。彼は、病は悪霊によるものではなく、自然の摂理であり、自然の力においてのみ治癒が可能であると説いた」学生たちは一団となり沈黙を守っていた。

「紀元 200 年ごろ、やはり、ギリシャの医師、ガレノスは、四体液説を説いた。これは、人体が血液、粘液、黒胆汁、黄胆汁の 4 つの液体、つまり体液から成り、これらのバランスを保つ必要があるという説である。これで、医学史の序説を締めくくる。ここで質問を受け付けるが、簡潔に述べるように」学生たちは一瞬躊躇した。

「女性も、男性と同じ量の、血液、粘液、胆汁を持っているのでしょうか？」学生の一人が質問した。

「我々にもそのことについては確信がない。しかし、これらの体液のバランスが崩れると男女ともに病気になる」彼は答えた。

「僕の母親は、胆汁をたくさん吐き出しますが」バスクからきた学生が言った。

「病気にかかっているに違いない」ハシェが言った。

「そんなことはありません。すこぶる元気です」

「いずれにせよ、患者を診なければ診断できん。幸い、我々の医術はガレノスの時代より進んでいる。我々は、人体を切開するなど、科学的研究を重ねておる。もし、君の母親が近くにいるなら、」教授のまんざら冗談でもなさそうな勧めを聞いてバスクの学生は青ざめた。

「生きている人間も切開するということですか？」彼は尋ねた。

「その通り。だが、生体解剖はめったに行われない。主として死体を解剖し詳細な人体解剖図を描いておる。人体解剖により、我々は、新たな知識を得て、それは今日の医療に役立っておる」

「現在どのような治療法がありますか？」今度はミシェルが聞いた。

「例えば、薬事療法だ。薬は、液体、粉末、錠剤に精製されておる」教授は答えた。「だが、残念なことに、偽医者、薬草家、魔女が薬を調合していることもある。その他の効果的な治療法には瀉血によって病を身体から流し出す方法もある。瀉血は私の専門だ」

質問の後には昼の休憩があった。休憩後、ハシェ教授の講

義は日没まで休まず続いた。夕方、ミシェルと学生たちは、カフェテリアで質素な食事をとり大学を後にした。「町を通っていかないか？」ノートルダム・デ・タブレ教会で追いついてきた学生がミシェルを誘った。教室で隣に座っていた生き生きとした目をした学生フランソワ・ラブレーである。ミシェルもその気になり一緒に町を歩き回った。彼らはすぐに意気投合した。

フランソワは、開けっ広げで、話し上手であった。行くところそこかしこで、見るものすべてに普通の人なら聞くだけで顔を赤らめるようなあからさまで珍妙な名前をつける。反抗心の強いフランソワが語るに良心のとがめを感じるものはない。彼は、異端のこと、つらい感情、身体のことなど常人は口に出せぬことも平気で語った。また、ミシェルの受け答えがあまりにまじめだと、突然、子供っぽく振舞ったり、猥らにふるまったりもした。

フランソワ自身もミシェルの知識の量に深く感心していた。サン・レミから来た学生は生き字引のようだ。

彼らは居酒屋には入り、そこで、ミシェルは、両親がかつてはユダヤ教徒であったこと、祖父から受けた教育そして、アヴィニオンで中断した占星術の勉強のことを語った。「じゃあ、ぼくらは似たような境遇だね」フランソワは言った。

「境遇？」ミシェルが驚いて尋ねた。

「それは、ユダヤ教とカタリ教は、両方とも、カソリックから見れば脅威だ。君はユダヤ教徒、僕はカタリ教徒だ」

「君がカタリ教徒だって？カタリといえば、最後のグノーシスだろ」

「もちろん、神のみぞ知る、だ」フランソワは、にやっと笑った。「我々は、表立ってはカタリを信仰していないが、真のクリスチャンとして、影では信仰を続けている。実のところ、モンペリエには、かなりの数の信者がいる。僕の父親は、モンペリエで食堂を営んでいるが、そこで、時々集会を開いている。もちろん隠れてだけど。もし興味があるなら、一度連れて行ってやるよ」

「おもしろそうだね。僕は、君たちがどのような説を唱えているのか興味があるよ。ラテン語の聖書などの研究を通して、グノーシスの教えは常に十分な根拠に基づいている」

「その通り、だから、カソリックの指導者に嫌われているのさ」フランソワは付け加えた。

「君たちの信仰が禁止されている理由はそれだけかい？」

「いや、我々は個人主義者だ。そして、我々の聖典は福音書から直接翻訳されている。一方、教会は、力を基にして成り立ち、彼らは原罪について教えている」

「そうだね。法皇、司教、神父は、聖書を彼らの都合の良いように解釈している。だが、基本的に、我々は同じものを信じている」これは、ミシエルの宗教観であったが、ラブレールはミシエルの考えに疑問を持った。

「我々には独自の規律があり、我々は、カソリックが信じるように全霊の神がすべての善悪を創造したとは信じていない。その上、我々は、個人の自由、女性平等を求め、あらゆる暴力に反対している。カソリックは違う！」

「僕は、もともとのギリシャの聖書のことを言っているんだよ」ミシエルは正した。「ギリシャの聖書ではそのことに異議を唱えていないよ」

「フム、そうかもしれない。僕は君ほど勉強していないんだ」

1年間、医学の基礎を学んだミシエルとフランソワは、難なく、次の課程に進んだが、2年生のクラスは30人に減っていた。今日は、彼らの初の実習である。ハシエ教授は、教壇に立ち、てぐすねを引いていた。

「諸君、2年生の課程は、瀉血の実習で始めることになっておる。実際に不治の病を宣告された患者を私自身が執刀する。心配するな、黒死病の恐れはない」

「黒死病とはなんですか？」ミシエルが聞いた。

「それは、君、ペストの呼び名だよ。だが、これ以上、講義を中断せんでくれ。大量の出血を伴うが、諸君が気を失わないよう願うよ。私は慣れているがね」助手が、黄疸の症状が著しく、衰弱して座っていることもできない女を椅子に縛り

付けて運びこんだ。患者は、目もうつろで焦点が定まらず、まっすぐに前を見ることもできない。周囲のことなど気にすることもなく、うめき声を洩らしていた。彼女の胸の痛むような症状に教室には動揺が走った。

「君たちは、彼女に同情して、私のことを残酷だと思っているだろう」教授は言った。「しかし、実験は科学に貢献する。結果を考えればその手段も許されることだ。その上、この女性には経済的な補償が与えられることを約束する」ハシェ教授は尊大な態度で被験者に近づき、後を続けた。

「瀉血には2つの方法がある。1つは、血管を切る方法だ」教授は、患者の腕の適切な位置を示した。「2つ目の方法には、ヒルを使う」彼は、ポケットから、様々な生体標本の入ったビンを取り出した。

「今日は、1つ目の方法のみを実習する。いずれにせよ、こいつらはすでに満腹しているからな。1つ目の方法では、患者は棒を握り締めなければならない。血管を膨張させ、瀉血処理を早めるためだ。残念ながら、この女性は衰弱して棒を握ることができないので深く切開しなければならない」彼は、医療鞆からメスを取り出した。

「この実演を私と一緒にやる志願者はおらんか？」彼は聞いたが、その勇気を持つものはいなかった。そこで教授が指名した。

「ド・ノートルダム君、手伝ってくれるかね」ミシェルは従順に立ち上がり教授に近づいた。

「ここを縦に切開してくれ」教授は、ミシェルにメスを渡しながら命じた。

「まず手を洗うべきではありませんか」ミシェルは聞いた。

「手を洗うって、何のために？もし君が怯えているのなら、私が自分でするよ」

「教授」フランソワが果敢に割り込んだ。「私の学友が意図したのは、もし、僧がなまけて土地を耕さなければ、農民はその土地を守ろうとしないでしょう。もし医者が民に病を治すことを教えなければ、民は病を癒すことはありません。お分かりですか？」ハシェは一言も理解していなかった。

「ウム、その通りだ」教授は嘘をつき、自分自身で、乱暴に前腕部に深い切り込みを入れた。予想通り、そこから血が噴出したが、教授は、慣れた手つきでガラス容器にそれを集めた。ミシェルは教授のなすがままにまかせ、席に戻った。

教授は、止血をした後も、すぐに傷口を縫合するべきであるにもかかわらず、生徒に動脈を観察させた。その後、ようやく、病人は部屋から連れ去られた。実習を終わって、教授は満足げに生徒を見回し、医学の将来を推測する者がいるか尋ねた。ミシェルが手を挙げた。

「詮索好きだが臆病者の君か、続ける」ハシエは皮肉った。「将来、身体の一部を人体移植するようになるでしょう」ミシェルは提案した。

「君はまじめな学生だと思ったのだが」

「僕はまじめです」

「明らかにふざけとる」教授は否定した。

「僕はまじめに言っています」ミシェルは主張した。

「だれも、そんな根拠がないくだらない話に興味を持たんよ」

「もちろん、科学的な根拠を申し上げられませんが、教授は、推測をお尋ねになったのですよね」

「もう十分だ。今後、私の授業に下らん考えを持ち出さぬよう」教授は、ばかにされたかのように憤慨して言った。授業の後、ミシェルは、フランソワに、怠け者の僧の話は何の意図があったのか尋ねた。

「いや、別に意味はないよ。ただ、あの鬼教授の思考能力をテストしてみただけだよ」彼は気軽に言った。

「君はまったく意地悪だね」

「もちろん」ラブレーは恥ずかしさなど微塵も見せず笑った。帰り道、彼らは衛生の必要性について語り合った。

ある晩、2人の友人は、フランソワの父親の食堂で、カラス貝の料理をご馳走になっていた。食堂は、熱心に会話をかわすカタリ信者であふれていた。今晚は、食堂の裏の部屋で礼拝があるのだ。元ユダヤ教徒であるミシェルも招待されて

いた。礼拝を待つ間に、フランソワは最近、イタリア語の医学書を翻訳していて忙しいことをミシェルに打ち明けた。

「意欲的だね」ミシェルは答えた。

「それだけじゃない。デビュー作となる小説も書いているよ。「偉大な巨人ガルガンチュワの息子、高名なるディブソードのパンタグリユエル王の世にも恐るべき言動」というタイトルだ」

「すごいタイトルだけど、ちょっと長すぎないかい？」友人は意見を述べた。

「たぶん、単に「パタングリユエル物語」とした方がいいかもしれない。ところで、話は変わるけど、君は、自分自身で満足を得られるかい？」

「何だって？」

「マスターベーションをするかい？」

ド・ノートルダムは、こっそりまわりをうかがい、彼らの会話を耳にしている者がいないことを確かめた。

「フランソワ、その質問は行き過ぎだ。君の知ったことじゃない」ミシェルは怒って答えた。

「おい、僕はただ、これから始まる秘教の教えに備えて聞いているだけだよ」

「何を言っているんだい？」ミシェルは混乱して尋ねた。

「礼拝では、お祈りをするだけでなく、グノーシスの教え、つまり聖なる知識が明かされる。今晚は性行為についてだ」

彼らの会話は、集まった人々が裏の部屋へ移動する音で妨げられた。集会の時間になったのであろう、2人の青年も彼らについて個室に入った。室内では、人々が厚い絨毯の上に座っていた。短い祈祷の後、信者の一人が一重ねの書き物を手に立ち上がり、説教を始めた。

「今夜は、ヘルメスの杯について話をする」彼は信者に告げた。

なんてこった、ミシェルはつぶやいた。ヘルメスはゼウスとマイアの息子、神の使いだ。

男はこれから話す内容を示すために、人体を描いた神秘的な絵を見せた。その頭には象徴的な溢れる2つの杯が描かれ

ていた。そして、2匹の蛇が仙骨から背骨をつたって、心臓の高さに広げた羽まで這い上がっていた。

「皆も知っているように、古い経典では、我々に性力を細心の注意を持って扱うよう教えている、しかし、なぜ、我々は長年にわたり貞節を持つように教えられているのであろうか？その答えは、教会が信者に信じ込ませている説とは異なる。教会は、生殖に励むよう命じている。信者の子孫を新たな信者として取り込むのは容易だからだ。権力への渴望から、教会の指導者は福音書を曖昧に曲解し真の理由を隠しているのだ。古い経典では、「種を失うな」とのみ説いている。言い換えれば、種を失うことを許していない、愛の行為の間にあっては」ミシェルは驚いてフランソワを見た。

さっき言っていたのはこのことか。

「グノーシスにおける聖なる目的は、個人主義の啓蒙と魂を聖なる自然に戻すことである」神秘主義者は続けた。「この図は性行為中の精子の転移を示している。この繊細な知識は、モンペリエにある学校のような神秘宗教の神学校でのみ教えている。古代エジプトのファラオもこの教を学んだ。この術には、男女の性行為中に性力をコントロールすること、特に男性の自己コントロールが必要だ。2つの魂が溶け合っている間にも射精を抑制することにより、聖なる閃きが生まれる。この閃きは、ラテン語でいうところの「イグナティス」そして、「グノーシス」という言葉の起源である点火のことである。この閃きは、男女性器間で誘導されて超自然的なエネルギーを生み出す。この2匹の蛇行する蛇に象徴される、このエネルギーは脊柱を通して上昇する。再生されたエネルギーは、この経路を通して、いわゆるマーキュリーの杖の天辺まで上昇し魂の翼を広げるのだ。このエネルギー、クンダリーニとも呼ばれるが、はさらに上昇し、ヘルメスの杯まで昇る。ただし、真の愛が存在する時にのみだ。真の愛が存在するなら、やがて杯は満たされ杯はあふれる。そしてエネルギーはゆっくりと心臓の前まで下っていく。これを7回繰り返すことにより、男は完全に開花するのだ」神秘主義者は、描画をしまった。

「ご起立願います」信者が立ち上がり、ごく普通の祈りを捧げた。フランソワは心から祈りを捧げていた。さらに15の神秘が語られ、礼拝は終わり茶が供された。

その夜ふけ、信者が立ち去った後の部屋で、2人の学生はその夜の教義について話し合っていた。

「礼拝の前には、君が猥褻に身を落としたのかと思ったよ」ミシェルは詫びた。「でも、カタリの教義にはすっかり心を奪われたよ」

「君が興味を持つと確信していたよ」フランソワが答えた。「もちろんだ。でも、カタリの教義では、人生は人に与えられた罰であるかのようだね」

「もちろん、一生の間には収穫もできる。この術を正しく使えば、特別な力を培うことができるんだ。自然は君の言うことに耳をかたむけるだろう」

「馬とも話しができるっていうこと？」ミシェルはおどけた。

「例えばね」

「まじめに言っているのかい？それともぼくをからかっているのかい？」

「僕はまじめだよ。紅海は、モーゼのために道を開いたじゃないか？」ラブレーは指摘した。

「それじゃあ、すぐにも全人類はこの術を実行に移すべきだ」

「それはしない方がいいよ、この世に、この術に値するほど清廉な人間はほとんどいない。誤った意図でこの術を使えば、混乱が起きるだけだ。この世は闇の人間ばかりだ。気をつけるよ」ミシェルは、しばらくの間考えこんだ。

「この術の術者にも子供ができるのかい？」彼はたずねた。

「このとりが運んでくるさ」

「よかったよ。君のくだらない冗談が戻ってきた」仏頂面をして、ミシェルが帰ろうと立ち上がった。

「ごめんよ。まじめに答えるよ。普通の人たちが人口を維持するために十分な子供を生んでくれているよ。その上、優れた子供は新しい信者から生まれてくるものなのだ」

「欲望を超越することがこの術の基本だと思うよ」ミシェルは考えた。

「実際のところ、イブが禁断の実を口にして以来、楽園から男が消え去ったのだ。我々は、山を動かしてでもイブの罪を償わなければならぬ」

「禁断の実？」

「禁断の実は男の精子の象徴さ」フランソワは最後の一杯のお茶を飲みながら説明した。「で、君はマスターベーションするかい？」

彼の友人は、悲しげに首を振り部屋を出た。まったくラブレーは困ったものだ。

数年に渡って集中的に医学を学んだミシェルに医師として治療にあたる許可を得た。大学での課程は終わっていなかったが、彼は大学を離れ、実際にペスト患者の治療にあたることを望んだ。黒死病が彼の眠っている洞察力を呼び覚ます、とヘルメスが言ったことが常に頭から離れなかったのだ。

19歳の若き医師、ミシェルは、フランソワにこの計画を話した。フランソワは、ミシェルと別れることは残念ではあったが、ミシェルは実際の治療にあたる力をつけていることを認めていた。

「で、自分のことをなんて呼ぶつもりだい？」フランソワは尋ねた。

「ただ、ド・ノートルダム医師だ」

「科学者が自分の名前の語尾をラテン風に変えているは知っているだろう？」

「うん、でも…」ミシェルは、虚栄を張ることを嫌い躊躇した。

「第一印象が大事なんだ。ノストラダムスはどうだい？」

「なかなかいいね」

アイデアを出したフランソワは笑った。数日後、ミシェルとフランソワは再会を誓って別れを告げた。

ミシェルは、自分の医学知識をサン・レミの近隣で役立てたいと思い、両親の家へ帰った。両親は息子の帰宅を喜ん

だ。父親は、ミシェルが祖父の屋根裏部屋を使うように提案した。

「ジュリアンに最初に相談したほうが良くはななくて？」レニエールは夫に注意した。

「ジュリアンは、屋根裏部屋で勉強しているだけだが、ミシェルは、家のために稼ぐようになるんだ」父親は言い返した。

「あの子をあっちこっちに移してばっかりよ」母親は譲らなかった。

「わかったよ、ジュリアンに聞いてみるよ」屋根裏部屋で、法律を勉強していたジュリアンは、長兄のために場所を空けることに異存なく、本をまとめて階下の自分の部屋へ戻ることになった。ジュリアンにとってもミシェルの帰宅は歓迎すべきことであった。教科書の翻訳を手伝ってもらえる。

終わりよければ、すべてよし。一年ぶりに帰宅したミシェルは、寛容な心を持つ家族に再会して幸せであった。彼の弟たちは、体格も良く育ち、まさに巣を離れ広い世界へ飛び立ちようとしていた。ベルトランは大工を志しており、家のほとんどの家具は彼の作であった。

彼には父親の跡継いで公証人になる意志はまったくなかった。彼いわく「頭脳労働のせいで、お父さんの額は変形してしまったから」だ。たしかに、父親は、平らで高く突き出た奇妙な額をしていたが、華奢できれいな手をしている。その上、ジャックは少し頑固で、いつも取るに足らない細部にまでこだわる。

母親はもっと勸に頼る性格であった。ミシェルは、初めて、いかに母親が魅力的な女性であるかに気付いた。均整のとれた体つき、美しい顔立ちと優しい目を持ち、長く輝く茶色の髪をいつも結い上げている。見知らぬ人でもすぐ信用してしまうことが、唯一の欠点であった。何度か、彼女の目の前でお金を盗まれてしまっている。

一方、父親は、見知らぬ人には適度に疑いを持って接している。両者は互いにうまく補い合っている。

エクトルとアントワヌは、まだ進路を決めかねていた。

「私が何をするかは決めたわ。マッツアを作る」将来の計画を語り合う重い雰囲気吹き飛ばすように、レニエールが軽快に言った。「ミシェル、手伝ってくれる？その間にモンペリエのことを聞きたいし」ミシェルは喜んで、母親の後について台所へ行き、粉と水を混ぜ始めた。

「で、学校はどうだったの？」母は促し、息子は、学生時代の出来事を語り始めた。

「あら、裏庭で火を燃やしていたのを忘れていたわ」彼女がさえぎった。「すぐ戻ってくるから、パンを捏ね始めていてちょうだい」数分後、母親は煤にまみれて戻ってきた。ミシェルは、それに気付かぬふりで話を続けた。

大学での話をしているうちに、家中に種なしパンの焼ける香りが漂った。父親がテーブルでカリカリに焼きあがったマッツアを切り分け、学業を成就した息子の帰宅を祝った。「病気の知人がいるんだが、見てやってくれないか？」食後にジャックが頼んだ。

「それは、市の医者の仕事でしょう？」ミシェルが聞いた。「その医者をあまり信用しておらんのだ。デルブロンドさんの容態は悪くなる一方だ」

「それじゃ、様子を見てみます」息子は約束した。

「ところで、アルル市で医者を探しているようよ」レニエールが思い出した。「応募してみたら？」

「そうしてみるよ。ありがとう。おかあさん」

翌日、ミシェルは病の床についているデブロンドを訪れた。これまで、デブロンドは市の医師ヴィリアンの治療を受けていた。ヴィリアンは、市民の傷の治療し、腫瘍を切開し、瀉血を行い、歯を抜き、ハーブ薬を調合し、髪を切り、鬚も剃る。

デブロンドは市の無料診療の恩恵を受けられずにいた。病が長びいた彼は、治療費を払うために家室の木の根を使ったタンスすら売らなければならなかった。本当に極貧の者ためにしか市はその治療費用を負担していなかった。

彼を一目見るやいなや、ミシエルの懸念は確信に変わった。ヴィリアンの治療は旧式だ。デルブロンドは、緩下剤と各種の切開によって衰弱していた。患者の容態は致命的であった。ベッドに横たわるデルブロンドの脇には彼の妹がつ

きそっていた。ミシェルが自己紹介をすると、半分錯乱状態ではあったが、デブロンド老人はミシェルを覚えていて昔話を始めた。しかしすぐに妹に引き止められた。

「先生、すぐに診察してください」彼女は言い、切開した皮膚が化膿して兄の容態がより悪化したことをミシェルに告げた。ヴィリアンは切開により余分な体液を取り除こうとしたのだ。ミシェルは患者を診断しその結果を教えた。

「病気自体は致命的ではなかったのに、これまでの治療法によってお兄さんは致命的な状態になっている。もし、お兄さんに殺したくなければ、切開したところを縫合しなければならぬ。そして、下剤はすぐ捨てなさい」彼は厳しく指摘した。妹はショックを受けたが、治療法が間違っていたことに気づきミシェルに同意した。

ミシェルはすぐに鉄のチューブを切開口から取り除き傷口を洗浄した。

「お兄さんに、新鮮な果物と野菜を毎日あげてください」帰りがけにミシェルは妹に言った。「少し回復したら、また来ます」

この「不法診療」の話を耳にした市の役人は激怒し、警察にこの偽医者をつまえるよう命令した。しかし、ミシェルは、医者の認可証を見せ、フランス内のいかなる患者を治療する権利があることを証明した。役人たちは、乱暴にもサン・レミには、一人しか医者が必要ないと主張したが、ノストラダムスは一步も引かず、彼らはなすすべもなかった。

1週間も経たぬうちに、デルブロンドは体力を取り戻し、一躍注目をあびたミシェルが少し散歩をするように勧めると、数ヶ月ぶりに町の中を歩き回った。市民が見守るなか、彼の健康は飛躍的に回復し、ヴィリアンと役人は面目丸つぶれであった。

一方ミシェルは医師としての名を上げ、数日のうちに、病人がド・ノートルダム邸を訪れるようになった。ミシエルの治療を受けた病人はすべて治癒した。その後もヴィリアンは、大きな失敗を重ね、ついにミシェルは、公式にサン・レミ市の医師に任命された。

ミシエルの宣誓式がすむやいなや、突然、カマルグでパス

トが大流行した。郡役場の報告のよるとその地域の犠牲者は数千に及んでいる。新米の医師ミシェルは大きな挑戦に直面した。

この疫病は非常に伝染性が高く、家族の一人がペストに罹れば、その家族もまた2日から6日の間に死に至り埋葬される運命を逃れることができない。犬、猫、鶏、馬でさえ犠牲者であった。しかし、ミシェルは、その恐怖を撥ね返し、あたかも自分は免疫があるかのように治療にあたった。

幸運にも、サン・レミでは、まだペストが発生していなかったが、近くのサン・ドフェでは、ペストが発生し市民生活は止まっていた。死体は、疲れ切った家族によって掘られた急造の墓に投げ入れられるならまだしも、通りにも放置され腐敗していた。空気中に漂う耐え難い腐臭を消そうと香木が燃やされていた。人々は、自分の命を守るためであれば、ペスト患者は家族であっても家から閉め出している。町から逃げ出す市民もあった。

ミシェルは、彼にとって初めてのペスト患者を診療しにこのペストが蔓延する村を訪れ、泥で作られた小屋で死の床にある少年のもとに案内された。幼い少年は血を吐き、身体中が大きな黒斑点と卵大の腫瘍に覆われていた。母親は空気を清浄しようと床に酢を撒いていた。果敢な医師ミシェルは少年を診察したが、実のところ、彼にもなす術はなかった。ペストの治療法はまだ発見されていない。大学では、瀉血を施すよう教えられていたが、ミシェルは症状を悪化させるような治療を行うことを潔しとしなかった。家族に少しでも安らぎを与えようと、子供の首に悪霊払いに使うハーブのお守りをかけた。彼は、この非常に伝染性の高い疫病の症状の記録をとり、なんら実質的な治療も施せず、少年を後にせねばならなかった。

その後、ミシェルは数人のペスト患者を訪問したが、彼らは、まず神のもとでの魂の安らぎに救いを求めていた。彼の訪問先どこにでも、患者を案じる神父が懺悔を聞き、死後の安らぎの地を保証しようとしており、残念ながら、ミシエルの治療は二の次であった。

ミシェルは以前にもまして、無知とは大罪であると身にし

みた。しかし、迷信の蔓延、教会の勢力の濫用、無知は、常識的に病気の原因を解明しその治療方法を発見しようと、ミシェルを奮い立たせた。

彼は、身体の外側に腫瘍できるものと肺を犯すもの、2種類のペストを識別した。症状を検討した結果、衛生の重要性を確認した。衛生は、ユダヤ教では、何世紀にも渡って教えてきたことだ。

ミラノにおける興味深い病例は彼の発見を裏付けた。大司教の命令でペストに犯された最初の3軒の家を住人も含めてレンガで囲ってしまったのだ。この結果、ミラノはさらなるペスト感染を免れた。この厳しい処置は、ペストは目に見えず感染することを証明した。

そこで、ノストラダムスは、隔離期間を導入した。隔離期間の間、患者には、食料と水は与えられるが、健康な市民は患者と接することは禁じられた。この方法はある程度の効果をあげた。

ミシェルは、病気が風によって運ばれているのではないかという疑いを持ち、ペストに侵されていない近隣の村の住民にマスクを配った。その住民たちは疫病を免れ、ミシェルはバクテリアの存在を考え始めた。そして、可能であれば、1週間に1度は温水の風呂に入ること、食事の前に石鹼で手を洗うことを指示した。また、定期的に、リコリスの根を噛む、蜂蜜水または酢で口をゆすぐなどして歯を清潔に保つこと、爪を切ること、髪や鬚を切ったり洗ったりすることを勧めた。また、服を着替え、できれば温水や沸騰したお湯で洗濯し、常に清潔な服を身に着けることも説いた。

効果的なペストの予防法を見出したににもかかわらず、ミシェルの意見は外野に止まっていた。法皇クレメンス7世が、堅固な意思を持ちペストと戦う医師の噂を聞き、ミシェルをアヴィニョンの私邸に招くまでは。法皇は、いかにして来るべくペストの感染から自分の身を守ることができるか、ミシェルに尋ねた。ミシェルは、少なくとも私邸を離れるよう助言した。

その1ヶ月後、実際に法皇邸の近在でペストが発生した際には、法皇は数週間自分自信を隔離した。この隔離により法

皇は生き延び、ミシェルは名声を博した。

その間もペストは国中に蔓延し、ヨーロッパ全体で多大な犠牲者を出した。ことに人口密集地の被害は大きかった。疫病に侵されると、訓練の行き届いた強固な兵を持つ軍隊も数日で倒れ、戦う以前に戦争に負けてしまう。偽医者らは、このパニック状態を利用して、富を築こうとしていた。ミシェルは、夜昼なく、何千という患者の診療にあたった。

4年後ようやく、ペストは下火になり、ノストラダムスは、医学課程を修了するためにモンペリエに戻った。

フランソワは、すでに卒業してフランスを離れていた。大学職員は、改革派、ユマニストなど反体制派に対して厳しい処置がとられ、もはや、鋭利な科学者ですら歓迎されなくなっていることを告げた。しかしそんな風当たりにもかかわらず、運良くフランソワは、ピエモンテ総督の医師として採用されていた。

ミシェルは再び、学業に取り組んだが、彼の先進的アイデアは教授たちの理解を得ることができず、反感を買った。しかし、彼の理論と実際の知識は優れたものであり、一年後、教授陣は彼に博士号を授与しないわけにはいかなかった。型破りの医師ノストラダムスは、短期間、大学で講義を行ったが、その治療方法は周囲を狼狽させ、ついに、学部長から警告を受けミシェルは大学を退いた。

「十分に試行した」ミシェルは、サン・レミの家に帰り診療を再開することにした。

第3章

「我が家にまさるものはなし」いくども行ったり来たりを繰り返したあとで、家に帰ってきたミシェルに父親ジャックは言った。しかしミシェルはそのつきなみ言葉に返事をしなかった。

「おまえは変わったね。ずいぶんと静かじゃないか」

「ぼくも年をとったのですよ、お父さん」ミシェルは短く答えた。ミシェルはすでに両親のレベルを超えていたのだが、それ以上何かを言って両親を傷つけたくはなかったのだ。

ジュリアンはエックス・アン・プロヴァンスで法律を学んでいるし、ベルトランとその妻は町のはずれに自ら建てた家に移り住み、家を出ていたので部屋は空いていた。ミシェルは、今は使われていない屋根裏部屋に戻ることにした。

エクトールとアントワーヌはこの家にまだ住んでいて、経験豊かな兄から新しい話を聞くことを楽しみにしていた。しかし、ミシェルは彼らと話をする気分ではないようだった。

いろいろな経験を経て、おしゃべりをして時を無駄に過ごすにはミシエルの心は、あまりに重くかたくなになっていたのだ。その心には雲がたれこめているようであった。神秘のベールが、高次元の自己意識の成長を守るかのようにミシエルをおおい、人を寄せつけなかった。もしだれかがこのベールを取り除いたら、ミシエルの視線で焼きつくされるかもしれない。ミシエルは自分の性格の変化をあきらめていた。これまで学問に没頭してきた彼には今、なによりも休息が必要であった。

ある日、この毅然とした医師ミシエルは近くのアールの町に患者を訪ねた。天候にも恵まれ、美しい景色を眺めながらの道中は心地よかった。アールに入ると、馬車は町の中心近くの黄色い家の前に止まった。ミシエルは扉をたたいて返事を待ったが返事はない。鎧戸があいていたので、中をのぞいてみた。

「往診です」ミシェルがはっきりした声でよびかけても、人の気配はない。ミシェルは、窓をよじ登ろうかと思ったが、その前にもう一度、表の扉を強くたたいてみることにした。その時突然、背後から、赤毛のやせこけた男が近づいてきた。男はペンキにまみれた靴をはいていた。男は、乱暴にミシェルを押しつけ家に入っていった。

「おい、待てよ、ここに往診にきたのだ」ミシェルは男を呼びとめた。男には左耳がなかった。耳がきこえず口もきけないようである。男は、ミシエルの目の前で乱暴にピシヤリとドアを閉めた。

なんてこった、いままでこんな扱いを受けたことはない、ふだんは医師として尊敬を集めているミシエルは、プライドを傷つけられ腹を立てた。ここではくずのような扱いだ。

ミシエルは怒りをしずめることができぬまま、アルルの町を歩いた。アルルはフランスで最も美しい町の一つだ。

この奇妙な事件のおかげでひまになったミシエルは、カフェが集まるフォーラム広場に出て、テラスの籐椅子に座り、冷たい飲み物を注文し、喉のかわきをいやしながら、周囲を観察した。

アルルは田舎町だが、文化振興で名をあげ、裕福なイタリア人やスペイン人が数多く訪れる。外国人は、高価な服を身にまとい、外見もフランス人とは違うので一目でわかる。その姿には心躍るものがあり、人目を集めている。

しばらくして、一人のイタリア人の女性が、店が立ち並ぶ通りからこちらに向かって歩いてきた。ミシエルは、すぐさま、その姿に心を奪われた。その女性は二十歳ぐらい、ミシエルよりは何歳か若いだろう。こぢんまりとした美しい顔に輝く目、長い首そして優雅な物腰。ミシエルはこの魅力的な女性を見つめた。高貴な生まれに違いない。ミシエルは彼女から目をそらすことができなかつた。こんなに美しい女性に、生まれてこのかた会ったことがない。キューピッドの矢がミシエルの心を射貫いた。

フランス人のほとんどは自分の美しさを誇示しないものだが、イタリア人は違う、その女性も非常に人目をひく服装をしていた。彼女はパフ・スリーブと白い開いた衿のついた紫のベルベットのドレスを身にまとっていた。ベネチアン・ス

タイトルのスカートはウェストから広がって床にとどく長さだ。それを何段ものフープで持ち上げている。その上、黒髪を頭のでっぺんに結びあげ宝石で飾りたて、高そうな真珠のネックレスをしている。

この目を見張るほど美しい女性は、威風堂々とドレスのすそをひいてミシェルに向かって歩いてきた。見れば見るほど、この世のものとも思えぬ美しさだ。二人の紳士とおつきの女性とおしゃべりに興じながら、ミシエルの脇を通りかかったとき、思いがけず、彼女は、まっすぐにミシエルを見つめた。ミシエルに恋の魔法がかけられた。ミシエルは、予期せぬそのまなざしにとろけ、自分の人生がまさに今始まったかのように感じた。

「なんてこった」ミシエルは、完全にうろたえて口ごもった。ミシエルは彼女を見つめながら、木の葉のように震えていた。突然、これまで考えたこともなかったほど自分がちっぽけで傷つきやすい存在に思えた。長い間、患者の診察だけに没頭してきたミシエルは愛というものをすっかり忘れていたのだ。今、まさにその魂のすきまに陽の光が差し込んだ。心臓が高鳴るなか、二人の目があつた。彼女もまた愛の矢に射貫かれた。そして、ほおを赤らめながらも、連れとともに立ち去りつつあつた。ミシエルの心は燃え上がり、この女性に求愛しなければと心に決めた。のぼせるあがつたミシエルは、あわてて立ち上がり、テーブルにお金を投げ置くとイタリア人の女性のあとを追った。ミシエルは少し間をあけて一行のあとを追いながら、彼女に話しかける方法を必死に考えていた。その女性も背後にミシエルの気配を感じていたが、振り返る勇気がなく、やがてある屋敷の中へ入っていった。落ち着きを失ったミシエルは、ほとんどパニック状態におちいった。どうしたらいいのだ、ミシエルは途方にくれていた。その時たまたま屋敷の中から女中が現れ、それに気づいたミシエルは声をかけた。

「すみませんが、今入っていった一行はいつまで滞在しているのか教えてもらえませんか？ 彼らに話があるのですが」
女中はミシエルのきちんとした身なりを見て、期待どおり答えてくれた。「ド・バーデumontさんのお知り合いですか？」

「まあ、そんなところですよ」ミシェルは、事実を曲げて答えた。女中は、急に口が軽くなり、一家は次の土曜日にロッド・エン・ガロンヌに帰る予定であることを告げた。必要な情報を得たミシェルは、女中に礼を言い、至福の境地でサン・レミに帰った。そして、夢の女性に会うための作戦をたて始めた。

昼食の席についたミ歇尔の様子はこれまでと違っていた。「おまえ、ごきげんだな」父親が言った。「それに、いつになく、ハンサムに見えるわよ」母親がつけ加えた。「絶対、輝いているわ」

ミ歇尔は、きまり悪そうに微笑んだが、何も言わず、その想いを心のうちに秘めていた。しかしレニエールには思い当たるふしがあった。

「わたしには、何があったかわかるわ」レニエールはいたずらっぽく言った。翌日、ミ歇尔が鏡を借りにきたので、それは確信となった。ミ歇尔は恋しているに違いない。

「落ち着かないのは、女の人のせい？」

「うん」ミ歇尔は認めた。

「そういうことなら、わたしが知恵を貸してあげるわ。あなたは、よく勉強してなんでも知っているかもしれないけど、こと女の人のについては、わたしの意見を聞きなさい」母親は、ミ歇尔の秘密を見ぬいていた。うぶなミ歇尔は、子どものように頼りきって母親を見つめた。

「女はほめられると喜ぶものよ」レニエールが言った。「その人はこのあたりの人？」

「イタリア人だよ」

「まあ、流行先端の国ね。それなら、あなたもおしゃれしなくちゃ」そして、レニエールは、その日のうちに、流行の服を買い求め、自らミ歇尔の身体に合わせて仕立て直した。エクトールとアントワヌも、何事かと興味津々で居間にやってきた。

「お母さんがミ歇尔を飾り立てているよ」二人は頭をかいた。レニエールは、新しい赤いベストを取り出し、首元までボタンがあるフリルのついたシャツの上に重ね、その上にさらに黒のフロックコートでミ歇尔に着せた。

「ぼくも、そんなの欲しいなあ」高価なスリットの入った長いベルベットのコートを見たとき、エクトールは興奮して叫んだ。そこへ父親が仕事から帰ってきた。「ミシェル、おまえに手紙が来ているぞ」ジャックは驚いてミシェルを見つめていた。

「今、手が離せないんだ、お父さん」
「じゃあ、おまえの机の上に置いておくよ」ジャックが言った。その間もレニエールは、ミシエルの着付けに余念がない。「おまえはやせているけど、この上着を着るとがっしりして見えるわ」レニエールは上着を直しながら言った。「お母さんのいうことには間違いがないよ」ミシエルは銅像のように身動きもせずに答えた。そして、片足からもう一方の足に飛びはねはじめた。レニエールがファスナーのついたニッカボッカ、白いストッキングと幅広の革靴をミシエルにはかせようとしていたからだ。

「その靴はきれいだね」アントワーヌが言った。
「そうだね」着飾ったミシエルが靴を見おろしていった。
最後に、レニエールが羽のついた帽子をミシエルの頭にかぶせるといっそう見栄えがした。ミシエルが際立っておしゃれに見えるのは家族全員が認めるところだ。恋するミシエルは居間の中を歩きまわってみせた。
「なんてこった、おまえ、王様のように見えるよ」居間に戻ってきたジャックがうなずきながら言った。

翌日、ミシエルは仕事を休み、新しい服を着て、胸をはずませてアルルにでかけた。アルルにつくと、あの美しい女性が入っていった屋敷のまわりを一時間近くもぶらぶらと歩きまわり、彼女の姿を一目でも見る事ができないかと、その建物のすべての窓を繰り返しのぞきこんだが、その姿はどこにも見あたらなかった。

ひどく下世話な闘牛の呼び込みをしているせむしがとなり立ち止まった。それに気分を害したミシエルはその場を退散し、二日前と同じテラスに腰をおろした。気持ちを落ち着けようと飲み物を注文したまさにその時、あの美しい女性がたった一人でどこからともなく現れ、ミシエルの脇を通り過

ぎた。ミシエルの落胆は陽をあびた雪のように溶けていった。ミシエルは勇気をふりしぼって、あたふたとその女性を追いかけた。ミシエルの思い違いではなかった、その女性は、ほんとうに優雅で繊細で美しい。非常に魅力的だ！ ミシエルが急ぎ足で近づいてくるのを見たイタリア人の女性も落ち着きを失い、どうしてよいのかわからずとまどっていた。そして、ミシエルの寸分の隙もないしやれた服装を見て顔を赤らめた。

わたしのためにおしゃれをしたに違いないわ、緊張もしたが、また誇らしくもあった。

「マドモワゼル ド・バーデモン」ミシエルはやっとのことで話しかけた。「医師として、あなたのドレスのウエストは締めすぎだにご忠告せずにはいられません。血液の循環が悪くなります」

ぼくはなんてバカなのだ。彼女をほめるつもりだったのに。「わたしが言いたかったのは、あなたの美しさをそこねかねないということです」

しかし、返事はなかった。イタリア人の女性は答えに困っていたのだ。自分の気持ちを素直に伝えるべきだ、ミシエルは決心した。

「正直に申しますと、あなたに心から感銘を受けて、またお会いせずにはいられなかったのです」ミシエルは言った。このミシエルの率直な言葉に緊張もほぐれ、その女性は微笑んだ。

「アルルで診療なさっているの？」彼女は、まだ硬さが少し残るが、なまりのない流暢なフランス語でたずねた。

「いや、でも時々、ぼくはサン・レミから来ていて、そこで診療もしているのです」ミシエルは、しどろもどろに自己紹介をし、テラスでお茶を飲もうと彼女を誘った。二人はミシエルの飲み物が置かれたテラスの席に向かって歩いていった。フープ・スカートを身につけてテーブルの間を通りぬけることは至難のわざであったが、ようやく二人は腰をおろした。

「ヨランダ、あなたはほんとうに素晴らしい」ミシエルはほめた。「でも、そのすてきだけど重いドレスを着て、どうやって一日過ごせるのかい？」

「町にでかけるときだけ、このドレスを着ているのよ。家に帰ったらすぐに脱いじゃうの」ヨランダはソワソワした様子で、アニスの飲み物を運んできたウェイターに礼を言った。まわりの人たちは、このすてきなカップルをおおっぴらに見つめていた。二人は周囲の注目を集めていることをはっきり意識していたが、ミシェルは会話の糸口をつかもうと必死で、それどころではなかった。

「一人でそのドレスを脱ぎ着するのは無理じゃないの？」
「侍女が手伝ってくれるのよ」ヨランダが答えたが、そのあとは、また意味深長な沈黙が続いた。ミシェルは、懸命に言葉を探したが、うまい言葉が浮かばず、しかたなしに飲み物のおかわりを注文した。

「医師になるための勉強はとっても大変だと聞いているけど」ヨランダが言った。

「大学に五年間通ったよ」
「とっても頭がいいのね。なかなかできることではないわ」ヨランダがミシェルをほめた。ゆっくりではあるが確実に、二人の間にはなにか美しいものが通いはじめていた。

「なぜアルルに来たの？ どこかへ行く途中みたいだけど」ミシェルがきいた。ヨランダは、ロット・エ・ガロンヌに家族が所有する城に行く旅の途中であること、自分が貴族の出であることを話した。

「ご両親がお城を持っているのだね？」ミシェルはきいた。それにうなずいたヨランダは、だんだんうちとけて、父親のフェリ四世 ド・バーデモン伯爵のこと、母親のナポリ女王のこと、両親には自分を含めて九人の子供がいることを語った。よそよそしさはまったくなくなり、二人の間には親愛の情が芽生え、炎が燃え上がった。それは真の愛だった。

これほど時がたつのが早いことはなかった。二人は天にものぼる心地であったが、やがて別れをつけるときがきた。ヨランダはロット・エ・ガロンヌに着いたらすぐに、ミシェルに手紙を書くことを約束した。そして、二人の姿に微笑むまわりの人たちを残して、広場をあとにした。

ミシェルがサン・レミに帰ると、すぐさま、レニエールはことこの次第をたずねた。

「肯定的だ」ミシェルはきどって答えた。

「肯定的？ それだけなの？ あなた、輝いているわよ」
「OK、わかったよ、話すけど」ミシェルは大声で笑った。
「まずはこの道化服を着替えてからだ」
そして、屋根裏部屋にかけあがりながら、ミシェルは叫んだ。「あの人はぼくの妻になる！」
一週間後、ミシェルは愛するヨランダから、その思いがつけられた最初の手紙を受け取った。その後も何通もの手紙が届いたが、二人の愛の炎は燃え続けていること、ミシェルとヨランダはお互いのために生まれてきたことは確かだった。最近届いた手紙では、ヨランダはミシェルに、すぐにもロット・エ・ガロンヌを訪問してくれるように頼んでいた。
ミシェルにようやく恋人ができ、おまけに、その恋人は裕福で高貴な家の出身ときている、ジャックとレニエールは大喜びだった。
「ミシェル、大物を捕まえたね。おまえの遺言状で、わたしたちにも財産を残してくれるよね」公証人であるジャックは、ミシェルをからかった。
「公証バカだね」ミシェルはめずらしく軽口をたたいた。
「おまえはりっぱなお城に住むことになるのかしら」レニエールが想像をめぐらせた。
「お母さん、気が早いよ。まず、この訪問がうまくいくかだ」しかし、レニエールには、息子はサン・レミの町を永遠に離れることになるという予感があった。

それから間もなく、ミシェルはヨランダに再会するために、プリンセスを救いに行くような意気込みで旅立った。彼の頭の中には、美しいドラマが繰り広げられていたのだ。ツールーズに向かう馬車の長旅のあいだも、幸せもののミシェルは、ヨランダへの思い、それは永遠に燃え続けると思われた、に自分がとらわれていることを自覚していた。恋は盲目とはよくいったものだ。

アリエージュで、馬車は歴史的に有名なマウント・モンツェガーを通りすぎた。ここは何世紀も前に、最後のカタリ教徒が集団虐殺されたところであり、ミシェルは、大学時代の親友フランソワ・ラヴレーのことを思い出した。

アリエージュからは、景色はますます緑におおわれ、いたるところにぶどう園があった。

ブドウつみ、ブドウ園を見てすぐさまミシェルは夢を描いた。ただヨランダといっしょにブドウがつめれば他に何もいらない。水平線に広がる花盛りのブドウ園をながめて、ミシェルはヨランダへの愛に酔いしれていた。

日が暮れかかったころ、ピュイベール城が遠くに姿をあらわした。ピュイベール城は、ド・バーデモン家所有する城だ。城は丘の上に壮麗にそびえ立ち、その上空には、城を象徴するかのようにオリオンが輝いていた。御者はこの旅をうまく計画していた。午後七時に城に到着し、たそがれどきに馬車を停めたのだから。愛に酔いしれるミシェルは馬車を降り、人の姿をさがした。ふいに、巨大な門の落とし戸があげられた。ミシェルは息を深くはき、荷物を手に門に向かって歩いていった。ミシェルがあたりを見回すと、開いた窓の内に最愛のヨランダの姿をかいま見ることができた。ミシェルは、緊張の面持ちで、門をくぐり広大な中庭を屋敷に向かって歩きはじめた。その背後で落とし戸が音を立てておろされた。侵入者を防ぐためだ。

「こんばんは、ノストラダムスさん」ヨランダの父親、ド・バーデモン伯爵はあごひげをなでながらミシェルを出迎えた。ド・バーデモン伯爵はミシェルと距離をおいていた。召使いがミシェルにかけ寄りその荷物を受け取った。

「きみが、わたしの娘が夢中になっている若いお医者さんだね。旅はどうだったかね？」

「おかげさまでいい旅ができました、閣下。でも今は身体を動かしたくてなりません」ミシェルは答えて、手足を伸ばしてみせた。そこへ上機嫌のヨランダが現れたが、伯爵のいいつけでミシェルはすぐに部屋へ連れ去られ、二人は言葉を交わすこともできなかった。

「今夜の食事のあいだに、話す機会はいくらでもあるよ」伯爵はヨランダにささやいた。城主としては、娘が息せききって新参者を追いかけてまわすのを見るのは不愉快だったのだ。まったくはしたない。批難の表情を浮かべて伯爵は部屋の一つに姿を消した。

ミシェルは、高さ二十メートルの楼閣に案内された。

「最上階にお泊りいただきます」オイルランプをかかげて、ゆっくりと階段をのぼりながら召使いはつぶやいた。そして、千段の階段をのぼりつめて疲れたきったミシェルを八人の楽隊の像に守られた飾り柱のついたベッドが置かれた部屋に残して立ち去った。

仮眠から目覚めたミシェルは、部屋のまわりをさぐってみることにした。闇につつまれたせまい木の階段をのぼり屋上のテラスにでると、そこから城の境界を見渡すことができる。静かな湖畔に位置するピュイペールの村は満月に照らし出されていた。

ミシェルは、中庭のざわめきに気づいた。着飾った客がそこに集まり夕食を待っていた。ミシェルは大急ぎで部屋にもどり、服を着替え、ちょうどダイニングルームに入っていく一団に合流した。広いしゃれたダイニングルームには、豪華なテーブルとそれに合わせた椅子がしつらえられている。華やかな家族に似合いの家具である。

召使いはミシェルをヨランダの向かい側だが、伯爵とヨランダの母親であるナポリ女王の間の席に案内した。彼らは娘の花婿候補をテストするつもりだ。恋人たちは、期待に満ちて、だが両親の判定に少し不安をいだきながら、見つめあっていた。

ヨランダはあざやかな青緑色のドレスを着て、今日は髪を低めのシニオンに結っていた。ヨランダはひかえめな笑みをミシェルに送り、ミシェルもかすかに微笑みかえした。

テーブルは名門一族にふさわしく用意されていた。ガラス食器には金の縁取りがあり、一家の紋章が手書きされているし、テーブル・リネン、ナイフとフォーク類にも紋章が飾られ、いたるところ紋章だらけだった。

召使いが給仕を始めた。伯爵夫妻の他に、五人の息子と四人の娘、三人の義家族、数人の孫、さらに、数人の客がテーブルについていた。

ぜいたくな食事のあいだも、恋人たちは互いに目をそらすことができず、いちゃついていた。

「ご存知かと思うが、君たちだけがテーブルについているわけじゃないのだよ」ヨランダの義兄がそれを見かねて意見し

た。なにはともあれ、二人が恋に落ちていることはだれから見てもわかる。

「プロヴァンスでは、きみは評判がいいらしいね」伯爵がいった。もう少しでスープのしずくが伯爵のあごひげにかかるところだった。

「ぼくは病気の治療に全力をつくしています」ミシェルは答えた。「でも、ペストがおさまってほっとしていますよ、ペストを抑えることはほとんど不可能ですから」

「あのこわい病気がここではやらなくて本当によかったわ」ナポリ女王が言った。

「ところで、きみは実際に大学を卒業したのかい？」伯爵が突然きいた。

「お父さま、そのことはもうお話しましたでしょう」ヨランダが恋人をかばった。

「夕食後に卒業証書をお見せします、閣下」ミシェルは約束した。

「そうしてくれたまえ、興味があるからね。食事のすぐあとで、わたしの部屋へきてくれたまえ。たまたま、おいしいコニャックもあるし。わかってくれると思うが、わたしは娘には最高のものしか望んでいないのだよ」伯爵は、まだ疑いが晴れぬようすで、ミシェルが義理の息子としてふさわしいか判断するために質問を重ねることをためらわなかった。質問の内容は多岐にわたったが、ミシェルはそれぞれの質問に申し分のなく答え、しだいに伯爵の疑いも晴れていった。

デザートがすむと伯爵と夫人はダイニングルームを出て、二人だけで相談をして戻ってきた。どうやら、この花婿候補は、娘にふさわしいと判断したようである。ここまでくれば、ミシェルも間違いを犯しようがない。

伯爵はミシェルと自室でしばらく時を過ごした。その後ようやく、二人きりになれた恋人たちは、ひそかに城の外へと散歩にでかけた。心が通う二人には言葉はいらなかった。栗の木陰でこっそりとキスを交わし、その感触は魔法のよう二人をとりこにした。

そして、一週間後には、ミシェルはヨランダに結婚を申し込み、ヨランダは大喜びで承諾した。慎重なヨランダの父親もその日のうちに結婚を許した。結局のところ、ミシェルは

父親の望む条件をすべて満たしているのだから。夢が実現しつつあった。ミシェルは世界中を自分のものにできるかのように感じていた。

これまでの憂うつから解放されたミシェルは、両親にピュイベールで結婚式をあげてことを知らせた。しかし、両親は、高齢のために病がちで、ピュイベールまでの長旅はできないので、弟のエクトールだけが結婚式に出席することになった。ミシェルは、両親に自分の持ち物を送ってくれるように頼み、また、なるべく早い時期にヨランダと共にサン・レミを訪問することを約束した。

結婚式の当日は、この輝かしい日を祝って、名士、名婦人が数知れず集まり、盛大な結婚披露パーティが繰り広げられた。パーティが終わり、ようやく、二人きりになると新婚夫婦は飽くことなく互いを求めあつた。

「きみと結婚できたなんてまるでおとぎ話みたいだ」ベッドに横たわり、ヨランダに無我夢中でキスをしながら、ミシェルは言った。

「これはおとぎ話よ」ヨランダがやさしく答え、二人は再び恍惚の絶頂へとのぼりつめていった。八人の音楽家の彫刻は顔を壁に向け、二人から目をそらした。

めくるめく結婚初夜が明けると、すぐに二人は行動をおこした。アジャンに新居を構えることにしたのだ。アジャンの商工会議所は資格を持つ医師を探していて、ミシェルをその地位に採用したのだ。アジャンの町は活気にあふれ、またピュイベールにも近い。若い夫婦は独立生活を営みながらも、家族との交流も維持することができる。

有頂天の二人はアジャンに家を探しにでかけ、すぐに美しい噴水がある町広場に、うってつけの家をみつけた。新居に引っ越した二人は、自由と夏の日々、そしてとりわけお互いを心ゆくまで楽しんでいた。

ある蒸し暑い夜、二人は噴水にかけより、水しぶきの下で心のおもむくままに踊りまわり、踊り疲れて噴水のふちに腰を下ろし、水をしたたらせながら、歓喜に笑い転げていた。

「目を閉じて」ヨランダが言って、ミシエルの口に何かを入れた。

「さくらんぼだ！」ミシエルが言った。

「他のものあるのよ」

「果物かい？」

「そうよ、子供ができたの」二人は情熱的にキスを交わした。

ミシエルは、医師としての仕事のほかに、小さな香水工場をはじめた。そこでは、大勢の従業員がハーブや他の植物からエーテル油を蒸留して薬用の濃縮オイルを作っていた。ミシエルは、この濃縮オイルを使って、様々な病に効く薬を調合した。こうして、ノストラダムス夫妻はアジャンの生活になじんでいった。

ある日、ミシエルはソレイユ通りにある希少本を扱う本屋をのぞいてみようと思った。

「お探しのものは見つかりましたか？」あるじが裏から声をかけた。

「ただ見ているだけで、特に何か探しているわけではないのですが」ミシエルが答えた。長いひげをはやしたあるじがミシエルに向かって歩いてきた。

「新任のお医者さんでいらっしゃいますか？」

「そのとおりです」

「わたしはアビゲイルと申します。ようやく、この近所で読書好きの方にお会いできてうれしいですね。この小さな町には本を読む人は少ないのですよ」

「ぼくはまだ、このあたりの人をあまり知らないのよ」ミシエルは言いわけした。

「もちろん、一冊の本は、ひと塊のパンよりずっと高価ですから、本を買える人はほとんどいないのですよ」アブリゲルは言葉を補った。「もし、医学書をお探しなら、もちろんお手伝いできますよ。その分野で先端をいくロンドンの出版社にコネがあるので」

「たぶん、あとで、もっと時間があるときにでも」忙しいミシエルが言った。「残念ですが、もう行かればならなりま

せん。ではまた」そしてミシェルは次の患者の診察にでかけた。

やがて、ミシェルがそれなりの医学書を収集したころには、ミシェルとヨランダの最初の子どもも生まれた。長男のビクターである。まだビクターのおむつが取れないうちに、ヨランダはふたたび身ごもった。そのあいだにもミシェルは本屋のあるじとの親交を深めていった。

ある日、本屋のあるじは、ミ歇尔のために、いわくありげな包みを取り置いていた。「カバラ」とゴシック体の文字で表紙に書かれたその書物を見て、ミ歇尔はおどろいて喜んだ。もちろん、カバラのことは前から聞いていたが、研究したことはなかった。カバラの本をアビゲイルから受け取るとは、まったく思いもよらなかった。

「おいくらですか」財布を取り出しながら、ミ歇尔はきいた。

「お支払いいただく必要はありません」アビゲイルが答えた。「それは、どうもありがとう」

「わたしにお礼を言うことはありませんよ。あなたのかくれ崇拜者に言ってください」

ミ歇尔は肩をすくめて、本を受け取った。

家に帰ると、ビクターはすでに小さなベッドで熟睡していた。ミ歇尔は暖炉の前にくつろぎ、ヨランダはジャスミンティーをついでミ歇尔に寄り添った。ヨランダと過ごす静かな時に、ミ歇尔の仕事におわれた長い一日の疲れもいやされた。医師としての仕事も順調だし、ミ歇尔は満足げに、美しい妻を見やり、キスをし、そのふくらんだお腹に手をあてた。胎児はすでにお腹をけり始めていた。

お茶を飲み終えたミ歇尔は、手に入れたばかりのカバラの本を書棚から取りだした。その本には「神秘主義の知識の集大成」という副題がついていた。ヨランダに寄り添って絨毯の上でくつろいで、本を開いてみると、中に名前と住所が記されたカードが入っていた。「ユリウス・スカリゲル アジャン市 ド・ラトレ通り十五番地」この男がノストラダムスのかくれた崇拜者に違いない。

「ヨランダ、ユリウス・スカリゲルという名の人を知っているかい？」

「スカリゲルはアジャンではよく知られた市民よ。スカリゲルが書いた本は物議をかもしているけど、ユマニストとしてはどこでも、高く評価されているわ。」

「どうして今まで、その名を聞いたことがなかったのだろう？」

「あなた、すべてのことを知ろうなんて無理よ。でも、なぜスカリゲルのことをきくの？」

「スカリゲルがこの本をぼくにくれたのだ。見てごらん、彼の名刺が入っていた」ミシェルは名刺をヨランダに渡した。

「どうしてくれたのかしら？」ヨランダは驚いてたずねた。

「ぼくの知ったことか」

「ちょっと待って、スカリゲルもお医者さんよ」ヨランダが突然、思い出した。「アジャン司教の侍医よ。それが関係しているに違いないわ。モンペリエの医学校で、あなたのことをきいたのではかしら？」

「それは、あり得ないよ」ミシェルが言った。「とにかく、どんな本をくれたのか調べてみるよ」そしてミシェルは本を読みだした。

「キリスト教の教義には、聖書に書かれている教義のほかにも、カバラの教義がある。カバラは、創世記にもとづく秘教で、一般には師から徒弟に伝承されている。生命の樹はカバラの象徴であり、聖書を神秘主義の見地から解釈する際のかぎとなる。生命の樹とは、天地創造の中に記されている四つの世界のことで、自己意識の四つのレベルを象徴している。

この生命の樹への理解は、瞑想することで深めることができる。もともとカバラは、聖書に隠された教義をさすユダヤ教の秘教だったが、今では、キリスト教のスコラ哲学にも取り入れられている。カバラは、秘教の神学校でも教えているし、魔術師ともよばれる信者が教えることもある」

ミシェルは本を閉じた。ミシェルは、この数年間、自分は精神的には、まったく成長していないことを痛感した。この本は天からの賜りものだ。ビクターのおむつを替え、三人の親子は幸せな気分です床についた。

「近いうちにスカリゲルを訪ねてみないといけないな」ビクターのまぶたがゆっくりと閉じていくのを見守りながら、ミシェルは言った。

「あせることはないわよ、あなた。スカリゲルはどこへもいきはしないわ、もう何年のアジャンに住んでいるのよ」ヨランダがささやいた。

数日後、ミシェルは、ド・ラトレ通り十五番地の扉をたたいた。いかつい体つきの召使いが扉を開け、主人は留守であるとミシェルに告げた。しかし、そのとき、やせ細って小柄な男が階段を降りてきた。アジャン司教の侍医、スカリゲルその人だった。

「これは、これは、先生、喉がひどく腫れて困っていたところです」

ユリウス・スカリゲルの冗談は、ミシェルには通じなかった。「すぐに診察しましょう、でもその前に、あなたがくれたすばらしい本のお礼を言わせてください」ミシェルはまじめに答えた。

「そんなことはなんでもない。実はアブリゲルがあの本を選んだのだ」二人は、科学者と哲学者の肖像画がところせましと飾られた客間に入った。

「すごい数の肖像画ですね、すべてお知り合いですか？」

「すべてではないがね。今、君が見ているのはエラスムス肖像画だがエラスムスとはちょうど手紙で議論していたところだ。エラスムスはヨーロッパの最もすぐれた思想家の一人とされているが、わたしから見ると彼の論法にはかなり穴がある」スカリゲルは安楽椅子に腰をおろした。

「エラスムスのことは聞いたことがあります」ミシェルがうなずいた。「それにしても、どうしてわたしに本をくれたのですか？」ミシェルも椅子に座った。

「きみの名前をよく耳にするのだよ」スカリゲルが説明した。「教会の圧力に屈しない医者はずらしいからね。わたしは反体制の科学者が好きなのだ。わたし自身も医学を勉強したし、きみと知り合いになりたいと思ったのだよ」

「それは光栄です」ミシェルは、室内を見まわしながら答えた。

「きみが、ここアジャンに引っ越してきたことのもなにかの巡りあわせだろう」ユリウスは続けた。「それも、わたしの心を躍らせる美しく高貴な花を連れてね。」

「なるほど、それでプレゼントをくださったのですね」

「すべてのことには意味があるのだよ。あんなにきれいな奥さんがいてきみは幸せだね」

「まったくその通りです。で、これはだれですか？」 ミシェルが肖像画の一つを指さしてきた。

「カルダノだよ」

「カルダノですか。カルダノは数学者で天文学者でしょう？ 違いますか？」

「しかし、ペテン師でもある」スカリゲルは怒りもあらわに言った。「カルダノは、『精妙さについて』という本で、悪魔のことを書いているが、その一節はわたしの書いたものからそのまま盗用している」

「盗作とはけがらわしい行為ですね」ミシェルが答えた「あなたは、人文主義に関して、どんな本を書かかれているのですか？」

「たくさん書いているが、なかでも重要なのは、フランスだけでなく諸国で出版された書物すべての概要を記したものだ。わたし自身も、エルスムスとならんで、今世紀ヨーロッパの偉大な思想家といわれているのだよ」スカリゲルは豪語した。

「今世紀ですって？」

「ぼくは、へたに謙遜したりしない」スカリゲルは言い切った。この我の強いユマニストに、ミシェルは微笑みかけざろうえなかった。二人の科学者は互いに話し相手として不足はなく、アリストテレスの医学書についてしばらく語り合った。二人はうまがあい、これからはもっと頻繁に会おうということになった。その後の数か月のあいだに二人の親交は深まった。

ある日、スカリゲルは、ミシェルを秘密の書庫に案内した。スカリゲルがその書庫を隠しているのは、そこには教会の權威を脅かすと考えられている書物があったからだ。

「ミシェル、これは、コペルニクスの文書だ。この画期的な文書で、コペルニクスは、『太陽が宇宙の中心である』と記している」

「実際のところ、秘教の信者と天文学者の間でも、太陽は星の一つにすぎないと考えられています」ミシェルが言った。

「でも、科学者は、証拠がなくでは納得できず、こんな夢物語をどう扱ってよいか困っているのでしょう」

「実のところは、夢物語もとても役に立つのだがね」スカリゲルは答えた。「いつか、きみもそんな夢物語を書きものにするといい。書くことによって自分が成長するよ」

そして、ミシエルの娘イザベルが生まれた。イザベルは太陽のように輝き、日に日に成長をとげた。イザベルはまるで宇宙の中心のようで、ビクターはそのそばを離れなかった。子供がいない女中は、この愛らしい女の子をわが子のように可愛がっていた。

ノストラダムス一家は、家族も増え幸せな家庭を築いていたが、外の世界ではよくないことが起こりつつあった。アジヤンの町に、これまでその害をのがれてきたペストがついに襲いかかったのだ。

ペストの最初の患者が見つかるとうちに、市民生活はきしみ始めた。ペストの感染を恐れて、市民は他人との接触をできるかぎり避けようとしていた。患者は急増しているので、それは当然のことであった。

ミシエルは、斬新なアイデアをもってペストに立ち向い、状況に屈することなく、患者から患者へと休みなく働いた。まず、市の公認医師として市内各所に隔離所を設けた。市内には、すでに数百の犬や猫の死体が放置され腐りはじめていた。ミシエルは、ペストの感染を防ぐために人間と動物の死体を石灰の間に埋葬するように命令した。また、ねずみやのみの繁殖を防ぐために、ゴミを焼却するようにも命じた。このため、町には常に煙と火の匂いがたちこめていた。そして、ミシエルはペスト患者には、にんにくとアロエで作ったクリームを体に塗るように指示した。また、衛生と栄養の重要性はミシエルが常に教えていることだが、それをさらに強調した。市民の多くはミシエルの指示に従ったが、なかにはミシエルを信用せず、この惨事の責任を転嫁するために、いけにえを求める市民もいた。

ついに、暴動が起きた。ノストラダムス一家の住むまさにその広場だ。ミシエルはその物音をききつけて、窓から外をながめて目を疑った。噴水のそばに火あぶりのための柱が用意されている。時をおかず、大勢の人々がそのまわりに集

まり、二人の男がその前に引きずり出された。アジャン市民は激怒し、胸もはりさけんばかりに叫んでいた。ミシェルは、市民が自ら判事と陪審を演じ、刑を執行しようとしていることに気づいた。暴動は手に負えなくなってきている。

「なんてことだ、アビゲイルが捕まった」ミシェルが突然叫んだ。哀れな犠牲者の一人は、友人の本屋のあるじであった。アビゲイルにあらゆる暴言が浴びせかけられ、ミシエルの怒りは煮えたぎった。ヨランダが心配してミシエルのそばに寄り添った。

「ここにいてくれるでしょうか？」おびえたヨランダが頼んだが、怒りを抑えきれなくなったミシェルは、その言葉に耳も貸さず、広場に走り出た。そこで、かろうじて良識を取りもどし、冷静に行動するよう自分自身に言いかけせ、なんとか控え目な態度で人ごみをかきわけていった。

「こいつら、腐れきったユダヤ人のせいで、こんな目にあっているのだ、火あぶりにしてしまえ！」群衆の一人が憎しみをこめて叫んだ。ヨランダはなすすべもなく見つめていた。どうかけんかになりませんように、ヨランダは恐れおののき祈っていた。二人のユダヤ人は柱にしばりつけられ、群衆の一人が柱に火をつけようとした。

「待て！」ミシェルが叫んだ。その命令の抵抗しがたいひびきに群衆は静まり、引き下がってミシエルのために道をあけた。なにしろミシェルは、ド・バーデモン家への媚なのだから。ミシェルは、唯一、彼の道をさえぎっている扇動者に脇によけるように冷やかに命令し、柱によじ登り、渾身の力をふりしぼって不運な二人をしばりつけているロープを引きちぎった。ミシェルは旧友アブリゲルにしばし目を向けた。アブリゲルもミシェルを見つめた。その眼は信仰心にあふれ、光が輝きだしていた。

「どうしたことだ」その眼の強烈な美しさに、一瞬ミシエルの心が乱れた。

いけない、狼のようなやつらに弱みをみせてはいけない。ミシェルは、群衆のムードが変わってしまったかもしれないと身構え、決然とした態度で群衆に振りかえり、力強く話した。

「ペストはユダヤ人のせいではない。もしそれが本当だったとしても、まずそれをきちんと証明しなければいけない。きみたちはみんな、恐れと怒りに翻弄され狂乱状態にあるのだ。家に帰って正気をとりもどしなさい。二度と治安を乱すようなことをしてはいけない」

群衆は、熱狂から我にかえり意気消沈して向きをかえて広場を後にした。広場はからっぽになった。

無事、ミシェルが家に帰り、ようやくヨランダは極度の恐怖から解放された。

「こんなことはもう二度としないと約束して！」まだふるえがおさまらず、ヨランダは懇願した。

「あの二人を暴徒の餌食にするわけにはいかなかったのだよ！」

「あなたが死んだら家族はこまるわ！」

「ぼくは死んでないよ」ミシェルはからかった。からかわれたヨランダはミシェルに枕を投げつけた。

その後も、ペストは猛威をふるい、ミシェルは昼夜をとわず働き続けていた。

数週間後、ノストラダムス一家に悲運が訪れた。ヨランダとピクターが病にかかったのだ。夜遅く、仕事から帰ったミシェルはこの事実と直面した。蒼白になって、ミシェルは恐れていた病の診断を下した。

「ペストの畜生め」台所で一人になるとミシェルは毒づき、こぶしで壁を殴りつけた。ペストと戦う医師が自分の家でその戦いに敗れるとは過酷なめぐりあわせだ。ミシェルは、ひどく動揺し、この悪い知らせをヨランダに告げた。

「ぼくは患者ばかり診ていて、きみたちのことを気にかけていなかった」ミシェルは嘆いた。

「ミシェル、自分をせめないでちょうだい、イザベルと一緒にしっかり生きていくと約束して」

「きみなしでは生きてはいけないよ！」

「あなたは強い人だから、高次元の自己意識があなたを支えてくれるわ」ヨランダはミシェルをなぐさめようとしていた。ミシェルは二人の身体にあざがあらわれるとすぐにそれを消

毒し、思いつくかぎりの滋養に富んだ食事を作り、最後の瞬間まで、望みを捨てず奇跡を祈り続けた。しかしその望みはかなえられなかった。ミシエルの腕の中で、彼の愛する花、ヨランダは、みるみる色あせ、ついに息をひきとった。ミシエルのヨランダの目から最後の光が消えるのを、その魂が彼女の身体を離れていくのを見守った。

翌日、ビクターもこの世を去った。ミシエルがビクターに最後のキスをしていると、彼を呼ぶイザベルの声が聞こえた。ペストの感染を避けるために、イザベルは自室に閉じ込められていたのだ。

精神的に打撃を受けたミシエルは、ド・バーデモント家の墓に埋葬して欲しいという、ヨランダの願いをかなえるために、イザベルの世話を一日召使いにまかせ、ヨランダとビクターの遺体をピュイベールに運んだ。

ド・バーデモント一族は、棺をのせた荷馬車が近づいてくるのを恐れおののいて見守っていた。もちろん、一族は何が起こったのかわかってはいたが、ペストへの恐怖から門は閉ざされていた。

「わたしたちにとっても耐えがたい痛手だが」伯爵が窓から叫んだ。「ここにも守らなければならない、愛する家族がいるのだ」

「わかりました。どなたか、安全な距離をおいたところにお墓を掘るのを手伝っていただけませんか？」義理の息子であるミシエルが頼んだ。

「すまないがそれはできない。幸運を祈るよ」伯爵は無情にも会話を切り上げて鎧戸を閉じた。寡夫となったミシエルはつらさをこらえ、たった一人で、妻と息子を門のすぐ脇のド・バーデモント家の墓に葬った。ヨランダの家族は城からひそかにそれを見ていた。

アジャンに戻ったミシエルは娘の世話をはじめた。いまや娘イザベルはミシエルの唯一のいきがいであった。

町で根も葉もない噂が広まっていた。ノストラダムスはヨランダの遺体を埋葬すらせず、その遺体は、父親によってド・バーデモント家の墓に埋葬された、という噂だ。

その夜、女中がミシエルの部屋の扉を叩いた。ひどく落ち込んでいるミシエルが扉を開け、何事かたずねた。

「先生にご忠告したくて。ド・バーデモント一族は、市民をあなたに齒向かうように煽っています。一族は、あなたが結納金を持ち逃げするために、わざと奥さまを見殺しにしたのだと訴えているのです。その上、あなたがユダヤ人と友達だという噂もたっています。あなたがいい人だと知っているのです、お知らせせずにはいられなかったのです」そして、女中は逃げていった。ミシェルは表戸にかんぬきをかけると、考え込んで家の中を歩き回った。そして、最悪の事態に備えた。二階の寝室でミシェルは静かに眠るイザベルの無邪気な小さな顔を見つめていた。ヨランダとビクターの死後はじめて、ミシエルの目に涙が浮かんだ。開いた窓からふきこむ風がその涙をかすめていった。

突然、その静けさが破られ、地獄がおとずれた。大勢の怒り狂った市民がかがり火を手に、悪意のこもったときの声をあげながら家の前に集まってきたのだ。

「殺し屋」群衆は叫んだ。「死刑にしろ」ミシェルは片目でカーテンの陰からのぞき、群衆を見た。

「あいつをつかまえろ」誰かが叫ぶのが聞こえた。逃げるなら今しかない。かんぬきをかけた表戸は暴徒の押し破ろうとする勢いできしんでいた。そして燃えさかるかがり火が家に投げ入れられ、ミシエルをかすめた。

瞬きする間もなく、ミシエルは驚いて目を覚ましたイザベルをだきあげ、静かにするようにいきかせ、背中にくくりつけた。そしてベッドの後ろにあるタンスの引出しをこじあげ、食糧の入ったカバンをつかむと肩にかけ、イザベルを背に屋根裏にかけ上がった。

寝室のカーテンにはすでに火がまわり、その数分後には家中が火につつまれた。暴徒はいまや表戸を壊して家に押し入り、一階で、悪魔の魔術師、ノストラダムスを探していたが、燃え上がる炎のために、上の階にあがってくる勇気のあるものはいなかった。

その間に暴徒の目をかすめて、イザベルを背負ったミシエルは、家の裏側の屋根に上り、隣の屋根に飛び移った。こうして、幸いにもその夜は闇夜だったので暴徒に見とがめられずに、ミシエルは隣接する家並の屋根をつたって燃えさかる家から逃げ出すことができた。

しかし途中でこの暗闇のためにミシェルは足を滑らせ、あやうく屋根から落ちるところであった。ようやくのことで、家並の端の家にとどり着き、その家のバルコニーに降り、そこからブドウのつるをつたって、ミシェルが地面に降り立とうとしたときであった。

「いたぞ！」めざとい暴徒の一人がミシェルの影を見つけて、突然叫んだ。その声にノストラダムスの家の前でまだ叫び続けていた暴徒たちもミシェルの姿を見つけ、すぐさまかけつけた。体の柔軟なミシェルは地面に飛び降り逃げだした。ミシェルは、入り組んだ小道と裏道で追手をまいて、脱兎のごとく町の外へと逃れた。追手は追跡犬にミシェルの靴下をかがせた。犬はすぐさまその匂いをみつけ、追跡がまたはじまった。

「あの人たちはどうしてあんなに怒っているの」イザベルがきた。

「ぼくたちのことが嫌いなんだ」追手から逃げおおせたと思いきり、ミシェルは答えた。

「でもどうして？ わたしたちは何も悪いことをしていないわ」

「そのとおりだが、あの人たちの考えは違う」

そのとき、恐ろしいことに、近く谷に追手の姿が現れた。ミシェルは急いで森の中を進み丘にのぼったが、そこには台地を分断する亀裂が走り、行く手は深い断崖にはばまれている。ミシェルは崖ふちを行ったり来たりして必死に逃げ道を探した。犬の吠える声が次第に近づいてくる、早く何か考えなければならぬ。

よし、この断崖絶壁をおりるしかない、ミシェルは決心した。ミシェルは、崖っぷちに手をかけ崖にぶらさがり、足で足場を探った。その手が滑りそうになった。

足がかりがあった！ 極限の集中力を駆使してミシェルはむちゃな下降を始めた。その背中でイザベルは谷間を見下ろしおびえていた。追手は急速に距離を縮め、すぐにその崖の上にいきつき、二十メートル下の垂直に切り立つ崖の最後の部分をくだるミシェルを発見したが、その姿は木々のしげみのおかげに消えた。月が雲のかけに隠れ、もうその姿を眼で追うことはできない。

追手には、ミシェルを追って崖を降りる勇気はなかった。ことに犬を連れていては不可能だ。追手の中に、わが手の内のようにこのあたりに詳しいものが出て、近くの小道を指し示した。彼らは二手に分かれ、追跡を続けた。

その数マイル先では、ミシェルは岐路にいきあたり、どちらの道を行くか選択をせまられていた。一方は下り、もう一方は上っている。高い木々に視界をはばまれ、どちらの道もそのいきつく先はよくわからない。ミシェルは下り道に賭けることにした。

選んだ道をたどるとすぐに、二つの台地の間の亀裂を渡ることができるところが見つかった。しかし、回り道をした追手のグループもまた、その道を見つけていた。犬の吠える声もまた聞こえる。すでに長い距離を逃げてきてミシェルは疲れていた。そう長く、逃げ続けることはできないだろう。月がまた顔を出し、すぐそばのほら穴を照らした。その息が首にかかるかのように追手を間近に感じ、ミシェルはそのほら穴に身をひそめた。運がよければ、ひょっとすると……？ だが、また追手に見つかってしまった。

「あそこにいるぞ！」だれかが叫んだ。ほら穴の中で、ミシェルは必死になってカバンの中を探り、ろうそくを取り出し、すぐさま、火打ち石で火をつけた。ほら穴の中では光が必要だったしミシェルは、何より大事なイザベルを背負っていた。ミシェルは、ほら穴の中を進んだ。その先には地下道がクモの巣のようはりめぐらされていた。

「しまった、火が消えてしまった」ミシェルは毒づいた。「速く歩きすぎた」ミシェルはろうそくに火をつけなおすと歩き続けた。突然、背後に叫び声が聞こえた。

なんてこった、やつらはすぐそこまで来ている、まったくついていない、ミシェルはつぶやいた。追手はもうほら穴の中だ。犬のほえ声がほら穴で不気味にこだました。こだまに惑わされ、犬は匂いを見失いかけていたが、追手はあきらめなかった。地下道の数には限りがある、彼らは、いくつかの小グループに分かれ、追跡を続けた。

追手が近づいてくる音を聞き、ミシェルは、息をひそめ、先を急いだ。行く手に地下水が流れるトンネルがあった。流

れに入ってしまうえば、犬は匂いを追えないだろう。犬をまくチャンスだ。

ミシェルはイザベルが背中にしっかりおぶさっていることを手探りで確かめ、水をかきわけトンネルの中を歩き出した。イザベルはたった2歳だったがことの重大さをさと、黙りこくっていた。しかし、水位は急速にあがってきたし、追手は間近にせまっている。ミシェルは最悪の事態を恐れてがむしゃらに前進した。水はすでにミシエルの腰まできている。イザベルは寒さにこごえていた。もうおしまいだ、ミシエルは嘆いた、すぐにもイザベルを背から降ろさなければならぬだろう。水はイザベルの口元まできている。

降参するべきだろうか？ あいつらもイザベルの命は救ってくれるだろう。でもだれがイザベルを育てるのだ？ 家族をペストでなくし、魔術師と思われている、それもド・バーデモン一族から訴えられている男の娘などだれも面倒をみてくれないだろう。

絶望しながらも、ミシエルは水をかき分けて進んでいった。突然、足がたたなくなりミシエルは泳ぎはじめた。ろうそくの火は消え、ろうそくは水に沈んでいった。ミシエルは祈った。

神様、どうかご加護を……。あいつらは絶対にあきらめないつもりか？

ミシエルは危険な暗がりに向かって泳いでいた。頭が天井にぶつかった。しかし、不思議なことに二人ともまだ息ができる。そして周囲が徐々にひらけていった。動く余地がもつとできたので、ミシエルは力強く水をかいて地底湖を泳いだ。

もうだれも追いかけてこない、ミシエルは気づいた。そして、足が地にふれた。ミシエルは、すべる斜面に苦労しながらも、岸に這いあがった。

「イザベル、逃げおおせたぞ」ミシエルは、再び希望がわき、イザベルにささやき、全身びしょねれで岸辺にたどりつくと、しばらくあたりの物音に耳をすませた。なにも聞こえない。どうやら、やつらはついに追跡をあきらめたようだ。ミシエルは、一息ついて、新しいろうそくをカバンから取り出した。ろうそくの芯は濡れていたがすぐに火がついた。巨

大な洞窟の中に、数えきれない横穴とトンネルがろうそくの光に照らしだされた。ミシェルは急いで道を探した。石灰岩の地層は何世紀にもわたって地下水に侵食され迷路をつくっていた。

この洞窟は数百万年も前にできたのかもしれない、ミシェルは考えこんでいた。そしてすぐに洞窟の壁が不思議な動物の絵におおわれていることを発見した。

「イザベル、前にもここに人間がいたらしいぞ」ミシェルは不思議に思っただけを見まわした。黒、赤、黄色で描かれた、疾走する馬や精悍な鹿は、石灰岩の光沢のある壁から今にも飛び出してきそうである。この不思議な絵は生き生きとして動きにあふれている。アーチ型の天井をすぐ向こうには、黒いたてがみをふるう紫の仔馬がまっすぐこちらをみつめていたし、白い牛が楽しそうに天井を飛び越えている。その少し先には、飛びまわる動物や倒れている動物の絵が集まっている。矢に射貫かれて倒れる身重の牝馬の絵もあった。この絵を見て、ヨランダを思い出したミシェルはすぐに顔をそむけた。

「有史前の壁画だ！」ミシェルはつぶやいた。二人は道に迷わぬようにつないだロープの端までできていた。そこでミシェルは、一晩過ごす場所をさがした。

「ハクション」突然、イザベルがくしゃみをし、その音は洞窟の中でこだました。

ミシェルは身がすくんだ。だれにも聞かれなければいいのだが。

ミシェルは、イザベルをその背から降ろし、地面のくぼみに横たえ、上着にさわってみて、服は着たままでかわかさねばならないと判断した。ろうそくの火を吹き消すと疲れきった二人はすぐに眠りに落ちた。ミシェルは小石があばら骨にあたる痛みで目を覚ましたが、イザベルは眠っていた。

これが悪夢ではないなんて……、ミシェルはため息をつき、最後の一本となつたろうそくを手探りでさがし火をつけた。岩壁に水が湧いているのをみつけたミシェルは、それをコップのため、ようやく目を覚ましたイザベルに飲ませた。二人はカバンに入っていたパンと乾燥肉で飢えをしのをいだ。二人の服はいくらか乾いていた。

出口をさがさなければならぬ。ミシェルはイザベルを再び背負うと、光をさがしはじめた。しかし一時間たっても出口はみつからず、最後のろうそくは今にも燃えつきそうであった。ミシェルはあてもなくあたりを歩きまわっていた。その時突然、炎が一方になびいた。出口かもしれない、ミシェルは期待をもって、微風をたどっていった。天井にあいた穴から光が差し込んでいた。青空が見える。暗闇に慣れた目には、青空はまぶしかった。

でも、その穴までのぼる方法がない、切り立つ壁を調べ、ミシェルはがっかりした。

「待てよ」ミシェルは、カバンからナイフをとりだした。壁に足場をほることができるともかもしれない。石灰岩はもろく、ナイフで削り取ることができた。壁に足場をほり終えると、ミシェルは、イザベルを背に、超人的な力をふりしぼり、ゆっくりと岩壁をよじのぼった。穴にふちに手がとどいた。かべにはりついたまま、片手を外に差し出した。その手に太陽が照りつけた。

太陽の光のおかげで、ものを見ることができると、ミシェルは太陽に感謝した。そして、ミシェルは、穴のまわりを削って広げ、外に這い出した。みわたすかぎりの草原だった。ミシェルはタカのようにあたりを見まわしたが人の姿はどこにもない、ミシェルはほっとして息をついた。

「イザベル、助かったぞ、いまやすべては過去のことだ」ミシェルはイザベルを背中からおろした。ようやくイザベルは、ふたたび自分の足で大地に立ち、草原を走りまわった。あたりには家が一軒もみあたらない。

「身体を洗わなければいけないね」この先の丘には川か小川があるだろうと思ひ、ミシェルは言った。ミシェルはイザベルを肩にのせ歩き出した。少し歩くと二人は小川が流れる谷に行き着いた。川の水は澄んでいるように見えたので二人は川の水で喉のかわきをいやした。そして、顔を洗い、靴を脱いで足を澄んだ水につけた。ミシェルはカバンからひとつかけのパンを取り出し、イザベルに与えた。カバンにはちょっとした財産も入っていた。三百フランあまりのお金だ、それは、ド・バーデモン家からの結納金であった。

数年はこれで生きのびることができるだろう、ミシェルは見積もり、この先の計画をたてた。

アジャンに帰ることはできない。まず、徒歩でこのあたりをはなれ、それから、馬車を見つけてサン・レミに行こう。いい考えだ。

少し先にたわわに実をつけたプラムの木があった。プラムをお腹いっぱい食べると、これまでの疲れはすこしばかりいやされた。イザベルはすでに、羽をはばたいてあたりを飛びまわる蝶々に歓声をあげている。

人生は続く、というのは真実だ、ミシェルは切ない気持ちでイザベルを見守った。たぶん、イザベルだけがぼくのいきがいとなるだろう。

その日、二人は丘と谷を越え、日暮れには、森林の中にひそかにたつ崩れかけた小さな石造りのあばら屋をみつけた。あばら屋に人気はなかった。一夜のねぐらには願ってもない。ここなら無事に一夜を過ごせるだろう。床には炭が残っていた。たぶん狩人がここで火をおこした名残だ。乾燥肉とプラムを食べると、あとは寝るしかない。ミシェルはイザベルのまわりに身体をまるめ、あばら屋にふきこむ風からイザベルを守った。夜中には、風が強まり、その小さなあばら屋の中を音をたてて吹き抜けた。その音に目を覚ましたミシェルは、イザベルが脇にいることを確かめて、ふたたび眠りについた。

翌朝遅く、ミシェルは、屋根の上で歌うカササギの大声に目を覚ました。それでも、イザベルは、のぞき見みしようとするらない。

「イザベル」ミシェルはささやきかけてイザベルにふれた。どうしてイザベルはこんなに静かなのだ？

そして、いやな虫の知らせにミシェルは、身をかがめてイザベルをのぞきこんだ。

「いけない！」イザベルの顔の黒い斑点に気づいたミシェルは慄然とした。その声に目を覚ましたイザベルは、具合が悪いとうったえた。イザベルがベストにかかるとはあまりのことであった。ミシェルの中の心の支えがポキリと折れた。ミシェルは、呆然とイザベルを抱きしめ静かに揺すっていた。翌日、イザベルは息をひきとり、ミシエルの生きる支えもなくなった。ミシェルは、ただ座って空を見つめていた。ミシ

ェルの頭の中では、不気味なシーンが展開され、そのシーンはいつまでも彼につきまとっていた。

「その二人をいっしょにおいていけ、そいつらは離ればなれでは生きのびられないのだから」フランス人将校が命令した。切っても切れない縁のブルーノとイブは、ぬかるみの中、台座にのった重い大砲を苦心惨憺して前線へとひきずっていた。ほこりのあがっていた地面は大雨で茶色の泥に変わり、大砲をひきずるうちに、二人の青い軍服も泥まみれになった。

「左に引け、このまぬけ！」ブルーノがイブを怒った。「君の精神力とやらで、この仕事をかたづけられるのかと期待していたのに」イブがため息をついた。ようやく、大砲を位置につけ、ブルーノが弾薬を詰め、イブは銃身の先に弾丸を入れた。こつは、敵のちょうど目の前でバックファイアがおきるように弾道をきめることだ、そうすれば弾丸はちょうど人の高さを貫通する。砲兵隊全員が位置につくと、砲撃の合図をくだすために、ネイ将軍が立ちあがった。

「発射！」将軍が命令した。フランス軍の大砲が轟音をたて、同盟国旅団は目に見えて犠牲者を出した。砲兵隊のうちの四分隊がモント・サン・ジャンへと進軍するあいだも残りの砲兵はワーテルロー[□]の戦況を見守っていた。敵旅団の二隊の騎兵隊が、思いもかけず、行軍するフランス歩兵隊に突入した。歩兵隊は急撤退の合図を打ちならした。いまや、全兵力をあげての戦闘となり、砲兵は大急ぎで大砲を再装てんしていた。

「急げ、イブ、砲弾を投げ込め！」すぐに手持ちの砲弾は底をついたが、フランス軍はイギリス軍を徹底的に打ちのめした。トランペットが攻撃の合図を吹き鳴らすと、フランス騎兵は全速力でぬかるみを蹴散らし同盟国軍を壊滅すべく猛襲をくわえた。しかし突然、まったく予期しなかった何千ものプロシア兵が森の中から砲撃をしかけ、同盟軍の窮地を救い、フランス軍を壊滅寸前の危機に陥れた。命からがら、ブルーノとイブは、大砲の下にもぐりこみ、戦乱の真ただ中、銃を構えた。

□ 1815

「まだプロヴァンスにいるのだったらいいになあ」黒テンの毛皮をまとったフランス軍将校が二人の目の前で敵に倒されるのを見ながら、イブが夢見るように言った。しかし、ブルーノがそれに答える機会はなかった。まさにそのとき、敵の砲弾がブルーノに命中したからだ。ブルーノの腕と脚はちぎれて空中に飛び、頭だけがイブのそばに残った。

ハッとしてミシェルは我にかえった。恐ろしい悪夢だ。ミシェルは、その脇の腐乱しかかりハエがたかったイザベルの死体を見つめた。

「どけ！」ミシェルは気が狂ったように叫び、腕を振りまわしてハエを追い払おうとした。ミシェルは正気を失っていた、そこにどれだけ座っていたのかわからない。ミシェルは立ち上がり、イザベルの遺体を抱き上げると、野原のひらけたところに埋葬した。

「わが子よ、安らかに眠りたまえ」少し落ち着きを取り戻したミシェルは語りかけた。「おまえの命は短かった。今、わたしはおまえに別れ告げ、おまえのそばをはなれなければならない。人生を歩み続けなければならないからだ」木の枝で作った十字架を小さな墓にたてると、ノストラダムスはカバンを取り上げ歩き出した。そして、数歩歩んで振り返り、イザベルの墓に最後の別れを告げた。いまや、ノストラダムスは世捨て人だった。ノストラダムスの彷徨がはじまった。

第 4 章

ポー ネー ロロンは血よりも火になるだろう
賛美のなかを泳ごうと 大いなる者 合流の地へ逃れる
彼はカササギが入りこむのを拒むだろう
パンポン デュランズが彼らを幽閉しつづけるだろう
(山根和郎訳『ノストラダムス全予言』)

ある夜ふけのこと、ピレネー山脈の山奥にある一軒の宿屋の扉が激しくノックされた。この予期せぬノックに不承不承、扉を開けた亭主は、玄関口に立つ恐ろしげな男の姿に立ちすくんだ。その不気味な男は薄汚れたフードつきマントをまとい、ひげは伸び放題、なめし皮のような顔に邪悪な表情を浮かべていた。

「すまんが、宿はもう閉めちまったよ」男の様相に恐れをなして亭主は客を断った。
「じゃあ、どうして扉が開いてるんだね？」男はきき返すと、亭主に一フラン硬貨を押しつけ、強引に宿の中に入ってきた。

「数日、泊まりたいだけだ」男は言葉を続けた。
この男と言い争ってもしかたがないようだ。「部屋はなんとかするがね」亭主は口ごもった。「お客さんの名前を教えてくださいませんかね」

「ディスキュートとでも呼んでくれ」男が答えると亭主は男を部屋へ案内した。

「寝る前に一杯やって、食事をしたいのだが」男は言って、また硬貨を亭主に握らせた。

この男は金に糸目をつけないことは確かだ。欲ばりな亭主は急いでビールが入ったジョッキを男に出し、食事のしたくをするために台所へと姿を消した。しばらくして、亭主はこの奇妙な男に温かい粥を出した。亭主は床につきたかったが男への不安がぬぐえず、もうしばらく男を見張っていた方がいいだろうと思い直した。

「ディスキュートさんとやら、今夜は夜空がきれいだよ。こ

んな山の中でもこれほど満天の星はめったに見られんよ」
「いや、気づかなかった」男は答えて平然と粥を食べ続けた。

「火星だって見えるよ」亭主は話し続けた。

「裸眼でかい？」

「もちろん、他に何があるんだい？」

「望遠鏡だ」男はそう言って口をぬぐうとビールを一気に飲み干した。

「そんなもの聞いたことありませんぜ」亭主はどもった。

「昔、持っていたんだ」男は言った。粥を食べ終えた男は、部屋へ戻って床につこうと立ち上がった。

「それでは、おやすみなさい。さっきは宿泊をことわって悪かったな。かんべんしてくれ」亭主はようやく、男を一人にしても間違いはないだろうと思言った。

男は部屋に入るとマントをフックにかけた。そして、重い足取りで鎧戸が下りた窓に近づき鎧戸を開けて、いつになく雲がひとつもない夜空を見上げた。たしかに、火星が裸眼で見える。

人はこの世に生まれ、やがてこの世を去っていく、だが、星はいつも変わらずに空で輝いている、光輝くスピカを見ながら男は考えた。ずいぶん昔のことだ、お祖父さんと一緒に夜空を見たのは、ミシェルはホルダーから財布を取り出して枕の下に隠し、かびくさいベッドに横たわった。

明日は、山の中を歩いてみよう、ミシェルは窓の外を見つめた。しばらくすると上弦の月が昇った。さすらい旅人、ミシェルがこの母性本能と不確実性の象徴である月を見つめていると、月は、しだいに大きくなり、あたかもミシェルの注意をひこうとしているかのようにであった。ゆっくりとミシェルの意識は薄れ、いつの間にかあたりは月の光で真っ白になった。突然、ミシェルは、自分もはやベッドに寝ているのではなく、宇宙を浮遊していることに気づいた。ミシェルは振り返って、地球を探したがそれははるかかなたであった。ミシェルはまわりの巨大な空間に圧倒されパニックに陥りつつあったが、いきなり、ボタンと音をたててベッドに落下した。身体中が冷たい汗にまみれていた。ミシェルは自分が生

体離脱を経験したことに気づいたが、それは心地の悪い経験であった。

もうしばらく、地球にとどまっていたほうがよさそうだ、ミシエルは思った。

翌朝、ミシエルが高山の希薄な空気の中を散歩していると、突然目からうろこが落ちたように、目の前に世界が開けそのありのままの姿が見えた。それまで希薄だった山の空気は観念にあふれて芳醇なものとなった。混沌から実質と観念が生まれ、実質と観念からこの世が成り立っている。時間は、実質と観念にまたがる三次元の事象である。この世とは驚くべき相互関係による創造物なのだ。ミシエルにこの世の無数の因果関係が明かされた。この発見に衝撃を受けたミシエルは、酒に酔ったように山道をフラフラとさまよった。ミシエルのカウザル・ボディーがまさに働き始めたかのようにであった。

月が満ちる前にお前のお眠っている知能は目覚めるが、そのためにお前は黒死病によって良心の呵責を知らねばならぬ、ミシエルはヘルメスの言葉を思い出した。

それは、家族がぼくの犠牲になったということか？ ありのままの真実、人間には耐えがたい真実とはこのことなのだろうか？ この新たな認識にミシエルは胸が痛み身も縮まる思いであった。

神には慈悲がないのか？ ミシエルはうめいた。もし、ぼくの家族がこのゲームの歩兵だったとしたら、ぼくはいったいなんなのだ。ぼくらは人形芝居のあやつり人形にすぎないのだ。それは過酷な現実であり、ミシエルは一瞬、全能の創世主に激しい怒りを覚えた。

神を恨むなんてぼくは背徳者だ、ミシエルはすぐに思い直した。ぼくは人類という大きな鎖の中のちっぽけな輪の一つにすぎない、彼は憎悪をぬぐい去った。与えられた役割を演じよう、そして自分の殻を振りはらうのだ。

予言者としての再出発を決心したミシエルは山頂をめざした。ミシエルの脳裏に様々なお告げがうかんで絶えず形を変えて、ミシエルの六感を惑わせ、ミシエルは考えをまとめることができなかつた。その心のうちをなすがままにまかせ、突き出した崖をめぐると、ポーの町の北に美しい地形が広が

っていた。そこでまた別なお告げが頭にうかんだ。「ポーネー ロロンは血よりも火になるだろう。パンボン デュランスが彼らを幽閉しつづけるだろう」この謎のお告げには、新たなシンボルとイメージがともない、ミシエルはめまいを覚えた。

ぼくは、もう一度、自分の足で歩くことを学ばなければならないだろう。

翌日、ミシエルは、ピレネー山脈からポーの町へ下った。役場を訪れ、パンボンとデュランスという名前について問い合わせるためだ。町役人は、ノストラダムスを事務室に招き入れたが、むさくるしい格好のミシエルは、念のため医師である証明書を見せた。

「申し訳ありませんが、わたしではお役に立てません」役人は言った。

「もしかすると、市長なら知っているかもしれません。あちらにおかけになってお待ちください」

ミシエルは待合室のベンチに腰をおろした。待合室では、職人が粘土をこねて像を作っていた。ミシエルはその作業をしばらく遠くから見ていたが、やがて、その職人と言葉をかわそうと彼に近づいた。

「なにを作っているんだ？」

「聖なる処女マリア像だ」男は気がなさそうに返事をした。

「型には何を流し込むのだい？」

「青銅だ」

ミシエルは再び、待合室のベンチに腰をおろしたが、しばらくすると、処女マリア像を作っているにしてはなげやりな職人の態度に怒りを覚え、我慢しきれず立ち上がって職人のもとへ歩いていった。

「この調子では、聖処女マリアというより悪魔の像のように見えるのだがね」とミシエルが批判すると職人はひどく腹をたてた。

「おまえさんのことは当局に報告せにゃならん」男は怒鳴ったが、ミシエルは動じなかった。

ようやく市長が現れ、ミシエルを市長室に招き入れた。

「パンボンとデュランスですか」市長は考え込みながら言っ

た。「デュランスは川の名前ですが、記録を見てみないと。来週また来ていただければ、なんらかの情報をさしあげることができるかもしれません」

翌週、町役場を訪れたミシェルはいきなり襟首をつかまれた。当局は、ミシェルを冒とく罪で告発していたのだ。ミシェルは法廷に出頭しなければならなかった。法廷でミシェルは、職人に批判的なコメントを述べたことは認めたが、それは職人の無知を批判したのであって処女マリアを批判したのではないと弁明した。

「証人はいるかね？」判事がきいた。

「残念ながらありません」

「それでは、きみの反論は認められない。ここに、ネー刑務所で一週間の懲役を命じる。これは寛大な判決だよ」

有罪判決を受けたミシェルは手錠をかけられ、工事中のネー刑務所の代わりに、ロロンの刑務所に連れて行かれた。

「科学者を収容したのは初めてだ」刑務所長が言った。

「ぼくが逃げ出す前に水とパンをくれた方がいいですよ」ミシェルが素っ気なく言うと、刑務所長は笑った。

「3日後には、パンポンがわたしと交代するが、きみのユーモアを聞けなくなるのは残念だ」

「ユーモアはわたしの得意とするところではありません。ところで、あなたのお名前は？」

「デュランスだ！」

釈放後、ミシェルはシャラントの森の小道をさまよい歩きながら、彼に天から与えられたお告げが持つ象徴的な意味を考えていた。

これらのお告げを占星術と結びつけたどうなるのだろう？一、二日の誤差でその日付を正確に予言することができるだろう。

ミシェルがぶかぶかのズボンを引き上げようとかがんだところに、ブナの木が「木が一本、倒れるぞ」と告げた。ミシェルは警戒して、一歩ずつ注意深く歩を進めた。すると彼のすぐ目の前で栗の木が倒れた。

「ぼくをその気にさせようというつもりかい？」ミシェルは、

独り言を言いながら、倒れた木をまたいだ。そしてこの現実となったこの予言を熟考し、その精度を検討し過去の予言と比較した。

短期の予言は猟犬の嗅覚のようなものだ、しかし象徴的なお告げを理解するには、もっとその主題について知識を得なければならない。子どもころの白昼夢を記録しておかなかったことは失敗だった。これからはすべての予言を記録して機会をみつけて現実との関係を見出そう。

しばらく放浪の旅を続けるうちに、ミシェルは行商人からノルマンディー沿岸の町フェーカンの修道院には、いい宿坊があり、その修道士は情け深いという話を聞きつけた。

しばらく静養するにはうってつけの場所だろう。ミシェルはその勧めに従って、白亜層の崖のふもとにある修道院を訪れた。そこは、敬虔なベネディクト会の修道院で、紀元六世紀の聖ベネディクトゥスの戒律が今でも守られている。

ミシェルは、自分の意思を表すかのようにカバンを地に投げ出した。修道士マビヨンがミシェルに近づき、自分がミシエルの役に立てることがあるかたずねた。

「ここにしばらく滞在したいのですが」ミシェルが答えた。黒い修道服に身を包んだ修道士の一団がゆっくりと彼の背後を通り過ぎた。

「それは構いません。我々は客人にも敬虔に戒律をお守りいただくようお願いしています。言いかえれば、我々と寝食を共にし、いっしょに働いていただきたい」

「それは願ってもないことです。わたしは心から秩序を必要としているので」ミシェルはうきうきとして言った。

「簡単なことではありませんよ」修道士がミシェルをたしなめた。「全員が、朝の七時から夜の七時半までまじめに働き、その後は説教に参列しなければなりません。そして毎偶数時には短い祈りを捧げます。一週間に七日間毎日のことです。それから朝食は六時です」

「たいへん結構です！」

「一日うちには、自由時間も与えられます」修道士は話を続けた。

修道士ブノワ・マビヨンはミシェルに部屋を割り振り、その後二人は正午の祈りを捧げた。夜には自由時間があり、ミ

シエルはマビヨンの新たな一面を発見した。マビオンは反体制的な傾向があり、その上陽気な修道士であった。

「我々の指導者、ベネディクトゥスは現世の富や誘惑を否定していました」マビオンは語った。「もちろん我々もそれは同じことです。でも、わたしのつくったハーブ飲料をぜひ飲んでみてください。アルコールがたっぷり入っていますよ」

「そりゃあ、楽しみだ」

すぐに二人はマビヨンの部屋へ戻り、マビオンは上機嫌でお手製の飲み物をミシェルについだ。

「これは、最高だ」それを一息に飲み干しミシェルは言った。

「わたしもそう思いますよ。世界中から集めた二十七種類の希少な植物とハーブを混ぜているのです」マビオンは自慢した。

「コクがありますね。ぜひ作り方を教えて頂きたい。あなたのハーブの知識はいずれ病気の治療に役立つでしょうから」

「構いませんよ。明日、晩鐘の後、台所で作り方をお見せしましょう。我々は、自分たちのためだけではなく、すべての人々のために祈りを捧げます。それと同じことで、我々の知識を広めることはいけません」

やがてマビオンはミシェルにハーブの識別方法と処理の仕方を教え、ミシェルは彼に古文書の解読方法を教えた。

「ご覧なさい、ここに占星術の書がありますよ。あなたの専門分野だ」二人が修道院にある書物のコレクションを調べていると、マビオンが言った。ミシェルにとってこの情け深い修道士との友情は時を得たものであった。人生の無常にさいなまされてきたミシェルは、いまま少しずつ癒されている。冬が終わるまでこの修道院の厳しい規則に忠実に従って過ごそうとミシェルは決めた。

ある午後の休み時間にミシェルは高い崖の上に座って、大西洋のかなたの水平線を見つめていた。イギリスの海岸もそう遠くはない。心躍るロンドンの町が水平線の向こうにあると知っていても、ミシェルにはドーバー海峡に向ってうねる波しか見えなかった。カモメの甲高い鳴き声がミシエルの注意をひいた。カモメは、引き網漁を終えて帰港する漁船を追

いかけていた。

突然、ミシェルは英国から予言を授かった。英国で悲劇が起きる。しかし、その悲劇とは？ まだミシェルにはわからない。ミシェルはマビヨンから借りた書物で、占星術の表を調べた。

今の星の配置と同じ配置は1666年に再び巡ってくる、風がページをはためせている間もミシェルは計算した。ペンを握りしめりながら、ミシェルは来るべき悲劇を直観していた、その実態ははっきりしなかったが。

この方法では時間の計算結果に幅がありすぎる。正確な測定具を買わなければならない。

次に、ミシェルは観念とその隣に計算を暗号化して書きとめた。

これがそのまま恐るべき狂信者の手に渡ったら、ぼくは困ったことになるぞ。それはもう身にしみてわかっていた。

その夜、充実した一日に満足してミシェルは床についたが朝の祈りが始まるしばらく前にその眠りからたたき起こされた。少なくともミシェルはそう思った。

「火事だ！」叫び声が聞こえ、厚い煙がミシェルの部屋に充満していた。ミシェルは驚きのあまりベッドから転げ落ち、階段をかけおりた。階下は炎におおわれ、それは消しようもない。

「イザベル、どこにいるんだ？」ミシェルは混乱して叫んだが、ゆっくりともうイザベルはこの世にいないことを思い出した。一階には、厚い煙を通して、白熱してひびいた石の窯が見えた。そして床には破れた小麦粉の袋が散乱している。

ここは、修道院じゃなくてパン屋だ。ぼくは夢をみているんだ！

突然、行く手に大きな炎があがり、ミシェルの考えを妨げた。反射的に炎を避けながらもミシェルは、夢の中でもやけどをするのだろうか？ と疑問をいだいた。そして、果敢にも振り返って、その手を火にかざした。

「あちち！」ミシェルは痛みに悲鳴をあげて外に逃げ出した。

それでも、やはりこれは夢だろう。

まわりの建物もことごとく炎の海に包まれていた。ミシェルは、安全なところからそれをながめていた。いったいぼくはどこにいるのだろう。パン屋の向かいに印象的な橋が見えた。あの橋は絵で見たことがある、ロンドンのタワーブリッジだ。

「そこにつっ立っていないで、手伝ってくれ！」いきなり英国人が叫んだ。

彼の話す英語が理解できるぞ、ミシェルは驚いた。夢の中では、人は言語を超えて心で話すのだろう。

しかし、ミシェルは彼らに手を貸すつもりはなく、ただ傍観者としてその光景をながめていた。ぼくはタイム・トラベラーであってロンドンっ子じゃない。

火事は、川岸に連なる軽くて燃えやすいものを貯蔵している木造倉庫に勢いよく燃え広がった。火消しが火事場に急行したが、タワー・ブリッジの脇の水車はすでに燃えつき、水の供給は止まっていた。もはや、火事を食い止めることは不可能だ。たえまなく吹き荒れる風に、火は行く手の町並みを焼きつくし、いまや市の中心部と河岸に燃え移っている。ミシェルは夢うつつで炎の海のあとを追い、町の中心部にやってきたが、その高級住宅街にも火の手はせまっていた。火消しは、密集した家並みを叩き壊しはじめた。水が足りないいで火の手をおさえるにはそうするしかないのだ。

町の半分以上を焼くつくし、壮麗なセントポール大聖堂をも焼き落とした後、ようやく風がおさまり史上最大のロンドン大火はゆっくりと鎮火した。古いロンドンの町は煙とともに消え去った[□]。

それから一年後、ストラスブルにて。放浪の旅を続けているミシェルは、激しく降りしきる雨の中、ある酒場に入っていた。そこでは、労働者たちが音楽にあわせてビールジョッキを振りながら、胸もはりさけんばかりに土地の民謡を歌っていた。「飲めや、この世の憂さを忘れ心いくまで。おいらはビールで飲んだくれ。ルネとジョッキ一杯、ルノーと

□ ロンドン大火

樽一杯」

陰気なミシェルでさえ、ほろ酔いかげんで陽気な大勢の人々の顔を見て、ほほえまずにはいられなかった。楽団は、ポータブル・オルガン、笛、サックバットなど、いろいろな楽器を演奏していた。次の戦いの歌にはタンバリンも加わった。

「もう一杯飲もうぜ」だれかがどなった。ミシェルは、飲んだくれの一団のテーブルに加わり、その団結を祝して一パイントのビールを注文した。次の歌は「かわいた喉のしらべ」だった。

一時間ほどするうちに曲のムードが変わった。ヴィオラが聴衆を恍惚へといざない、あやしい雰囲気か漂ってきた。なまめかしい服装の女たちが現れ男性客を挑発している。男たちは女たちに流し目を送っていたが、ミシェルは興奮する男たちにはつられず、冷やかにそれをながめていた。彼はそんな女たちにまるで興味がなかったのだ。

酒場の反対側にひととき目立つ老人がミシエルの目にとまった。ミシエルは、その老人に見覚えがあった。ベレー帽をかぶった白髪の老人は、若い貴族の男の連れと夢中になって話をしていて、あいにく薄暗い灯りに彼らの顔がよく見えないので、好奇心をそそられたミシエルはそのそばに近づいた。近くから見ても、ミシエルはそれがだれか思い出せなかったが、突然、老人がミシエルに目を向けるとようやくミシエルはひらめいた。わかったぞ。

「何か御用ですか？」老人はきいた。櫛目の通ったカールがベレー帽からはみ出していた。

「エラスムスさんとお見受けしますが」ミシエルは答えた。オランダ人の学者であるその老人は驚いて喜んだ。

「わたしを知っている人がいるとはうれしいかぎりだ。きみは？」

「わたしは、医者ノストラダムスです」そう答えながら、ミシエルは、偉大な思想家が甲高い小声であることがおかしかった。

エラスムスはミシエルを見てしばらく考え込んでいたが、その名に心当たりがないようだった。

「こちらは、ド・フロレンヴィル侯爵だ」エラスムスは連れ

を紹介した。

「座りたまえ」侯爵が言い、ミシェルは礼を言って腰をおろした。

「そうだ、ようやく思い出したぞ」エラスムスが大声をあげた。「イタリアに旅した時にきみのことを聞いたことがあるぞ。ペストが大流行したときに、家に閉じこもるよう教皇に助言した医者はいきみだろうか？」

「そのとおりです。わたしはユリウス・スカリゲルの家であなたの肖像画を拝謁する機会にめぐまれました」

「ああ、スカリゲルか」エラスムスはため息をついた。「彼の手紙に返事を書かねばならん」

ミシェルとエラスムス、二人の学者の間で会話ははずもうかというとき、二人の売春婦がテーブルにやってきて、ミシェルに目をつけ彼を誘惑しようとした。みだらな売春婦は、はずかしげもなくミシエルの膝の上ですわり彼の髭をなでた。まわりの人々はこの見世物を遠まきに見ていた。同席するエラスムスと侯爵もミシェルがどう彼女たちを扱うか興味深く見守っていた。

「きみはもてもてだね」ド・フロレンヴィルが茶化した。ミシェルは女たちに目もくれなかった。女たちはミシエルの額にキスし、その胸をミシエルの顔に押しつけて挑発した。ヴィオラの音だけが聞こえ、人々は椅子から身を乗り出した。しかし、苦行の末に禁欲者となったミシェルは、好色に身をまかせざるつもりは、さらさらなく、彼女たちの耳になにかをささやいた。それを聞くやいなや女たちは悲鳴をあげて逃げ去った。だれも言葉もなく、にぎやかだった酒場は気まずい沈黙にとざされた。そこで酒場の亭主は楽団にその場を盛り上げるよう言いつけた。すぐにお祭り騒ぎがもどってきた。

「いったい、あの女たちに何をささやいたのかね？」エラスムスとド・フロレンヴィルは興味津々でたずねた。

「きみたちは一週間のうちに性病で命を落とすだろう、と言ったのですよ」ミシェルは素っ気なく答えた。エラスムスは大声で笑った。

「あのつまらない奴らを追い払うのには、きみのそのまじめな顔でそんなことを言うほど痛快なことはないな。だれも冗談とは気づかなんだろう」

「冗談ではありませんよ」ミシェルが言った。ド・フロンヴィルはそれを聞いてショックを受けた。ミシェルの言葉はひどくけがらわしく思えたのだ。

「きみ、医者はそのんことをしてはいかんよ。君が言ったことは診断ではなくて呪いだよ」

「これは呪いではなく、現実起こることを予言したのです。わたしは真実しか申しません」ミシェルは答えた。

「予言だって？ キリスト教では予言など禁じられているはずだ」ド・フロンヴィルは冷やかに言った。

「では、聖書の中の一節を指摘いたしましょう、侯爵閣下。ヨエル書で神は、民は予言と先見の明を授かるべきであると書いています。アモス書には、予言者への神の裁決が示された、と記されています。また、申命記では、神が超自然的な学問を糾弾したとされていますが、占星術はそれに含まれていません。また、ヘブライ人への手紙では、すべては飾ることなく明かされるべきであると述べられています。続けましょうか？ 侯爵閣下」

侯爵はその高慢な鼻をへし折られ、口をつぐんだ。

「わたしは子どもの頃から、先見の明にめぐまれていましたし、占星術を学びました」ミシェルは強調した。ド・フロンヴィルは、学識豊かな友人エルスムスが助け舟をだしてくれることを期待していたが、彼は無言のままであった。

「それについて、わたしは何も言うことできないな。わたしは未来を予言する能力がないから、自分の経験からしか話すことができないよ」ド・フロンヴィルは、気難しい表情でまっすぐ前を見つめて言った。

「偏見を捨ててくれればいいのだが」ミシェルはつぶやいた。

「宗教戒律に女性は弱点だ」エラスムスが言った。「教養人ですら上手くまるめこむし、自分の伴侶についてすべて話してしまうし。」

「わたしは、女性に同調する気は毛頭ありません。噂話ばかりしているだけですよ」ミシェルはエラスムスに同意した。

「あのご婦人たちはきみを見損なっていたね。きみは特別だよ。悪い意味ではない。ところで彼女たちはどこへ行った

のだろう？」エラスムスはきいた。女たちはすでに戻ってきていて騒いでいたが、ミシェルたちのテーブルには近寄ろうともしなかった。

「無知というのは幸せなもんだ」エラスムスは続けた。「ちょっとしたお世辞ですぐまた喜んで、自分たちの運命を多くの人たちとわかちあっているよ」

会話は他の話題に移った。ロッテルダム生まれの思想家エラスムスは七十歳であった。そのころの平均寿命は三十五歳くらいであったから、それはまれにみる老齢といえる。エラスムスはバーゼルへの旅の途中であった。

「それでは、ストラスブールは中休みといったところですか？」ミシェルがたずねた。

「まあね。明日、市庁舎でこれまでの人文学者としての業績を表彰されるのだ。それに、ド・フロレンヴィル閣下とは、人文学者のジャコブ・ウィンフェリングのグループで知り合っただけで、以来長いつきあいで、ウィンフェリングとはこれまで何回も討論を重ねているのだよ」

「ストラスブールは、ウィンフェリングのおかげで文芸の重要な中心地となりました」ド・フロレンヴィルは機嫌を直して言った。

「そのとおりだ。そのおかげできみと知り合いになれたし」エラスムスが同意した。「以来、ド・フロレンヴィル閣下とは連絡をとりあい、わたしがこの町にくると、いつでも喜んで泊めてくれるのだ」

テーブルを囲んだ三人は夜更けまで話こんでいた。とうとう、亭主がまもなく閉店であることを告げると、三人は最後のビールを飲みほした。外に出て澄みわたった夜空の下で別れを告げるとき、年老いたエラスムスは予言能力を持つ医者ミシェルといつか再会したいと言った。

「残念ながら、それはあまり期待できません」ミシェルはエラスムスはその夏に死ぬと予知していた。その暗示を理解したエラスムスは、自分の運命を受け入れ、二人は互いにかたい握手をかわした。ミシェルが驚いたことにド・フロレンヴィルはミシェルを彼の城に招待した。なんのしがらみもないミシェルはその招待に応じることにした。とどのつまり、人生を経験するためにこの世にいるのだから。

一週間後、ミシェルは洒落た馬車に乗り、ストラスブールに近いロレーヌにあるド・フロンヴィル城へと向かっていた。御者はなかなかその城を見つけることができなかった。城は人里離れた深い森の中に隠れていたからだ。広大な所有地の入り口には門番小屋があり、そこで御者はミシェルの到着を知らせた。門番は何もきかず、高い門扉を開けて、客人ミシェルをのせた馬車を前庭に通した。さらに数分進むとようやく木々の間に城が見えた。城は堀に囲まれた小島に建っていた。馬車が跳ね橋をわたり、城へ続く階段の前に止まると、すぐにド・フロンヴィルが姿をみせた。

「ノストラダムス先生、ようこそお越しくださいました」ド・フロンヴィルは歓迎するふりをしていたが、まだ、エラスムスの前で恥をかかされたことを根に持っているのは一目瞭然であった。

「まずは、庭をご案内しましょうか？」ド・フロンヴィルが提案した。

ミシェルは、手足を伸ばしたいと思っていたのでその提案を受け入れた。ド・フロンヴィルはすべては順調であるかのようによそおいつつミシェルをブナの木で作られた迷路に案内した。

「あなたのお城はすばらしいですね」ミシェルは言った。ド・フロンヴィルは礼を言いながらも意地悪いアイデアを思いつき、彼の心は風とともに浮き立った。

ノストラダムスのうわさの予言能力というやつをからかってやろう、ド・フロンヴィルは意地悪く考えた。わたしの客みんなの前で、その正体を暴いてやる。

二人は迷路を通り抜けた。迷路の真ん中には小さなマルコ・ポーロの像が立っていて、迷路の終点であることを示していた。それから、二人は回転扉を通して、幾種もの果樹が植えられた果樹園に入った。次にド・フロンヴィルはミシェルを様々なめずらしい野菜が植えられた野菜畑に案内した。その隣には小屋がいくつかあり、そのうちの一つに豚が飼われていた。黒豚と白豚だ。

「ノストラダムス先生」ド・フロンヴィルは、突然、尊大な態度で話しかけた。「あなたは透視能力がおありだということだが、この二匹の豚のどちらが今晚の夕食になるか、予言

していただけませんか？ コックにはなにも言わないとお約束しますよ」

ペテンくさいが、ミシェルは迷いもせずに応えた。「我々は、今晚夕食に黒豚を食べるでしょう。白豚は狼に食われてしまいますから」

城に戻ったド・フロンヴィルは、すぐに台所に向いて、ノストラダムスとの約束を破り、コックに夕食用に白豚を屠殺するよう命じた。

コックは白豚を屠殺し串に刺した。台所で忙しく働いていたコックは助手を呼んだ。「グラヌイ、庭からハーブを摘んできてくれ」返事がないのでコックはグルヌイをさがしたが、グラヌイはどこにも見つからず、コックは自らハーブを摘みに庭に出た。そのすきに、嗅覚の鋭いオオカミがやってきて、開いたままの台所の扉から忍び込み、豚をくわえて逃げ去った。戻ってきたコックはそれを知って腹を立てたが、主人には内緒にしておこうと決め、黒豚をつかまえて屠殺し、やつのことで夕食に間に合わせた。

名士ばかり招いたド・フロンヴィルの客は、客間で夕食を待ちながら会話を楽しんでいた。

「ウィンフェリングの本を読んだことはおありかな？」貴族の一人がミシェルにたずねた。

「いいえ、科学論文を読むのに忙しかったものですから」

「彼の本を読むことをお勧めしますよ」

「ありがとうございます。心に留めておきます」ミシェルは礼儀正しく答えた。

ド・フロンヴィルが客を歓迎して、テーブルのそれぞれの席へつくように言った。客は会話を交わしながら、二、三皿の前菜を食べたが、メイン料理が給仕されるときがくると、ド・フロンヴィルが客の注意を促した

「今宵の美しい宴をさらに知的な境地へと高めるために、ここで、わが友、エラスムスの言葉を引用させて頂きたい。「真の幸福とは、我々が作り出す想像の世界にのみ存在する」わたしは、エラスムスのこの言葉に深く感服しているが、今宵はそれを脇において夢を見るのは愚か者にまかせようではないか。これから贅をつくしたメイン料理をお出しするが、この料理で至福の味をご賞味いただきたい。ところで夢とい

えば、今夜は名高い予言者にご臨席の賜っていることをお知らせしたい」客はド・フロンヴィルが誰のことを話しているのかと互いに顔を見合わせたが、当のミシェルは悠々とかまえていた。ド・フロンヴィルのミシェルを笑いものにしようというたくらみにすぐ気づいたからだ。

「それは、ノストラダムス師である」ド・フロンヴィルは明かした。ド・フロンヴィルの声に批判的な響きがあることに気づいた客は、落ち着かなかった。

「さて、今日の午後、わが客人には、本日のメイン料理を予言していただいた。わたし個人的にはそんなまやかしは信じていないが、彼の予言があたったかどうか確かめてみようではないか。それでは、ノストラダムス先生、今晚のディナーには白豚、黒豚のどちらが供されるかあてていただきますよ」

「黒豚です」ミシェルは一步も引かなかった。

ド・フロンヴィルはコックに蓋がかかった皿をテーブルにのせるよう合図した。運命の瞬間だ。ド・フロンヴィルは蓋をとった。ド・フロンヴィルが落胆したことに、それは黒豚の料理であった。

「これは、黒焼きにした白豚か？」ド・フロンヴィルは必死にたずねた。

正直なコックは、自分の過ちを認め、白豚は狼に取られてしまったので黒豚を料理しなければならなかったことを白状した。

客たちは、自らの罠にかかってしまったド・フロンヴィルを心底笑った。一方、ミシェルは客の賞賛を集め、ド・フロンヴィルは、ミシェルの方に目をやろうともしなかった。

一躍人気者になったミシェルには、数週間この邸宅で豪華な生活を楽しんだ。ド・フロンヴィルが我慢の限界に達してミシェルに立ち去るよう命じるまでは。

その翌日、ミシェルはあてもなく、だが惜しむこともなく城を出た。

この贅沢で気ままな生活の後でミシェルは、俗世のあかを落とそうとアルプスの山に向かった。そして、その澄んだ山の空気とスイスの雄大な自然をこころゆくまで味わった。ミ

シエルは自分の心がさらに大きく広がり、洞察力も深まりつつあることに気づいた。しかし苦しみと喜びは背中合わせで、その成長は心痛をともしなうものでもあった。

「なぜ人は喜びを得る前に苦しまなければならないのだ？」
たったひとりで山の中の湖をわたりながら、ミシエルは声を上げてきた。しかし、彼がはしけをこぎ進める間も湖は静寂につつまれていた。

まあ、その答えは聞くまでもない。我々は若いころには自らの能力を顧みず無駄に過ごし、歳をとってからその能力を取り戻そうと躍起になるのだ。

「山の神よ、教えてくれ。なぜ赤子はすべてを持って生まれてくるのだ。いずれは樂園から追われる運命なのには？」

しかし、山はその秘密を明かさず、ミシエルはこの人生の不条理に自分で答えを出すしかなかった。ミシエルはそのあがままの存在だけで、創造主の意に従って生きることのできる植物や動物に羨望を感じていた。しかし、資質とは自分で作りだしてはじめて価値があるのだと自分自身を慰め、いつか自分の能力によって、ありのままの真実を見ることができるようになることを心から望んだ。

山を一步一步登るうちに、ミシエルは少しずつ人生の喜びを再発見し、それを心から味わった。山頂への険しい道のりは、美しいパノラマと澄みゆく心で報われた。

ミシエルはウォリスでローヌ川を渡った。

「ぼくが行くべきところがわかったぞ」ミシエルは自分の精神的探究の旅の先を見出した。「イタリアだ」

そして、ミシエルは教会の支配下にあるイタリアへ向かって一人旅を続けた。

数週間後、ミシエルは、ペルジアの近くの山道で修道士の一行と出会った。その灰色の僧服を身につけたつましい外見から、彼らはフランシスコ会修道士であることがわかった。フランシスコ会修道士は、清貧こそが神に近づく道であると説いたアッシジの聖フランシスコを信仰している。

一行が近づいてくるとミシエルは脇によけて道をゆずり謹んで頭を下げて彼らを見送った。その時、ミシエルの目の片隅に一人の修道士の姿が映った。突然、彼の心の底から讚美の気持ちがわきあがり、ミシエルは驚く修道士の足元にひれ

伏した。ミシェル自身も自分にあふれる信仰心に不意を突かれていたが、自分が卓越した人物に巡り合ったことを確信していた。

「頭をお上げください、わたしはただの修道士にすぎません」若い修道士は言ったが、ミシエルの目には彼の目の前にいる人物の真の姿がはっきりと見えた。

「わたくしは神聖なあなたの前にひれ伏すしかありません。あなたは、貧しい豚飼としてお育ちになり、今はつつましい修道士でいらっしゃいますが、いつか、あなたのお名前はローマのサン・ピエトロ大聖堂の頂点に金文字で輝くことになるでしょう。将来、あなたは教皇シクストゥス五世になられます」

驚いた修道士はうかがいをたてるように同輩を見回したが、彼らもこの言葉をどうとらえていか分からなかった。

「親愛なる我が友よ、すべての道ローマに通じます。われわれに神のご加護がありますように」修道士は言い、修道士たちは歩み去った。

長い間、自己批判にさいなまれてきたミシエルは、心の安らぎを求めて豊かなベニスにやってきた。違う景色を身を置くことは悪いことではあるまい。

ベニスの黄金期はすでに過ぎ去り、今やその領土を失いつつあった。しかし、この西欧最大の港町はミシエルの好奇心をそそった。有名なマルコ・ポーロとコロンブスはこの町で育ったのだ。ちょうどコロンブスがアメリカを発見したばかりであった。

ミシエルは小さな漁船に乗って、数多くの船が係留、投錨しているこの巨大な港に到着した。長年に渡って、異国の絹、香辛料、珍しい宝石などの積み荷がこの港を経由してヨーロッパ各地に運ばれている。ミシエルはカバンを手に岸に飛び降り、うず高く積みあげられた中国語やアラビア語の文字が書かれた麻袋や木箱の脇を通り過ぎた。

「ここは活気にあふれているな」ミシエルは声をださずに笑った。

深い霧に隠れ、おびただしい数の宮殿や教会そして運河は

ほとんど見えなかった。ミシェルはすぐに簡素な宿屋を見つけ、荷物をおろした。そして町を見物しようと宿屋の古びた階段を下りていくと、「旦那、鍵をお忘れですよ」と亭主に呼び止められた。

「鍵はいらないよ」ミシェルは流暢なイタリア語で答えた。「なにも心配していないから。ところでゴンドラを雇いたいのだが、どうすればいいのかい？」亭主は、彼の甥がゴンドラでベニスの町を案内してくれるだろうと教えてくれた。

しばらくして、ミシェルはゴンドラに乗って、ベニスに張り巡らされた運河とそこに架かる数多くの橋を見物していた。

「どこかに行く途中ですかい？」船頭がきいた。

「どちらとも言えないよ。しばらくベニスに滞在しようかと思っている」ミシェルは答えた。

「そりゃあ、いいご身分ですなあ。そんな時間と金と自由がある人は多くないっすからね」

「その通りだ。だが、デカダンスとは程遠いがね」

ためいきの橋の下を通りかかると、船頭は愚痴をこぼし始めた。

「おれの夢は実現していないっすよ。昨夜なんか、また悪い夢を見た……」だが、ミシェルは彼の愚痴など聞きたくなかったので、せわしく往来する船に注意を払うよう促した。

「ここが、メインの運河、グランドカナルだよ」自分の仕事を思い出し船頭が言った。「そして、向こうに見えるのがリアルト橋だ。」

しばらくして、ミシェルはこれまでみたこともないほど美しいドゥカーレ宮殿を見て、そこでおろしてくれるよう船頭に頼んだ。

「もうすぐカーニバルだ。行ってみるといいよ」別れ際に船頭はミシェルに勧めた。

「いや、カーニバルに興味はないね」堅物者のミシェルは答え、硬貨をゴンドラの錢袋に投げ入れて、宮殿の背後へと消えた。総督はこの宮殿からベニスの町を支配しているのだ。

町には音楽が流れていた。ノストラダムスは本を置いた。気分転換も悪くない、ミシェルはカーニバルを間近に見物し

ようと宿を出た。

通りでは、ベニスっ子がカーニバルの仮装をまとい、群れをなして浮かれ騒いでいた。彼らは、仮面で顔を隠していたが、その仮面は、有名な学者を風刺したもの、贅沢な商人、道化や挑発的な娘などいろいろであった。

明日になったら、悪夢を見たと彼らはまた愚痴るのだろう、こんなお祭り騒ぎをしても心を晴らすことはできないのだから、ミシェルはつぶやいた。

この夢のような見世物はサンマルコ広場で頂点に達していた。大広場は、そこかしこから音楽が流れ、お祭り気分の人々でいっぱい、身動きがとれなかった。人ごみの押し合いへしあいを避けて、ミシェルは高いライオンの柱を回って水辺にそって広場を抜けだした。

ミシェルが少しは静かな中庭にたどり着くと、そこで風変わりな女性を見かけた。彼女は、ダビデの星を首に飾り、色ガラス細工の蝶々のまわりで遊ぶ子どもたちに囲まれていた。あれは、グノーシスの蝶々だ。ミシェルは興味津々で彼女に近づいた。

「きれいな蝶々ですね」ミシェルは声をかけたが、その声はあたりのざわめきにかき消された。その女性は、ミシェルが近づいてくるのを見ると黙って悪魔の仮面をミシェルに手渡した。

ほくもパーティの仲間入りしろという意味だろう。ミシェルは、進んでマスクをかぶった。ミシェルがマスクは似合っているかたずねようとした瞬間、その不思議な女性と子どもたちもみんな、魔法のように姿を消した。ミシェルはあたりを見回したが、その視界は大勢のパーティに興じる人々にさえぎられた。

彼女が古びた図書館の隣りに立ち、彼に向かって手招きしているのを再び見つけたミシェルは、驚いて開いた口もふさがらなかった。ミシェルは、群衆をかき分けていったが、彼が図書館に着いたときには、すでに彼女は影も形もなかった。ミシェルはまごついた。そしてまた、彼女と子どもたちが紙の門を踊りながら通り過ぎてくを見つけた。ミシェルは再び群衆をかき分けて、中央の建物に向かった。しかし、その建物の中庭にたどり着いたミシェルが、見つけたのは、戦い

神マースと海の神ネプチューンの石像だけであった。あわてて彼女の姿を探し求めた。

見つけた！ 彼女は巨人の階段を駆け上っている。彼女はミシェルをからかっているに違いない。

「これは、カーニバルの余興かい？」ミシェルは彼女に呼びかけたがその声はあたりの騒ぎにかき消された。

ミシェルは、この謎を解明しようと決心した。そして、彼女の姿を追って路地をたどると、静かな一画に出た。不思議な女性は、今度は、子供たちと木の階段を踊りながら上り、沈みかけた太陽に長い影を落としている古めかしい家の中に消えていった。ミシェルは、雑草が生い茂り、井戸がある中庭に入りこんだが、その女性と子供の姿は見当たらなかった。

「だれかいるかい？」彼は声をあげたが、返事はなかった。ミシェルは中庭の奥に扉を見つけた。ミシェルはその扉を開け、別な中庭に通じる細い通路に入った。そこにはさらにいくつかの扉があった。

ぼくはいったいどこに誘導されているのだろうか？ 最初の扉には「シャローム」（ヘブライ語の挨拶）と書かれていた。ミシェルがその扉を開けると、部屋の中央には、七本脚の燭台が置かれたテーブルがあった。子どもたちのころに見たその燭台をミシェルはよく覚えていた。

「こんにちは、だれかいませんか？」ミシェルが呼びかけたが、答えはなかった。あの女性と子どもたちは宙に消え失せていた。

突然、町中からトランペットの大きな音が聞こえたので、ミシェルは、何事かと、外に飛び出した。彼が、数分前に通ってきた路地には何も変わったことはなかった。けたたましいトランペットの音がまた聞こえた。その音はサンマルコ広場から聞こえてくるようであったので、ミシェルはサンマルコ広場に向かった。その道すがら、ミシェルは通りが空っぽであることに驚いた。仮装した市民が数人、恐れをなして逃げ回っているほかは町は閑散としていた。ミシェルはその一人を呼び止め、なぜ逃げているのかたずねた。

「カーニバル禁止のおふれたが出たのだ」男は口ごもった。

「総督の命令かね？」

「総督なんてもういないよ」男はそう言って立ち去った。ミシェルは急いでサンマルコ広場に行ってみたが、そこは、わずかにカーニバルの名残りをとどめているだけであった。ミシェルは用心深くあたりを見回した。ライオンの柱すらなくなり、そこには新しい像——英雄らしき男を乗せ後ろ脚で立つ馬——が立っていた。その名前は、ナポレオン・ボナパルトであった。

「その仮面の男を捕まえろ」だれかがいきなり叫んだ。ミシェルがふりかえると、フランス兵の一団が彼に向かってきている。無意識にミシェルは空に飛び上がって兵士から逃れた。

時をおかずして、あたりは兵士であふれ、彼らは屋根の上のミシェルを指さした。

「屋根の上には長くいられまい」将校が言い、まわりの通りを通行止めにした。ミシェルは危険がせまったことを察知して海に向かって、舞い上がろうとしたが、期待を反して重力に逆らえず落下し始めた。兵士の一団は、ミシェルを捕まえようと波止場に急行した。

状況は悪くなる一方だ、落下しながらミシェルは歯を食いしばった。危ういところで、ミシェルは落下を食い止め、滑空して港に水しぶきをあげて飛び込んだ。兵士が彼の後を追ってきたので、ミシェルは水に潜り、係留されている船の間に隠れた。

翌朝、ミシェルは、緑あふれるサン・ザニポロ広場で支離滅裂な夢を思い返していた。今回はまったく現実を見失い、それが一体いつのことであるのかわからなかった。町の賑わいに彼は惑わされていたのだ。

ナポレオンという名前が記憶に残っていた。しかし、実際にこの皇帝が勢威をふるうのは今から数百年後のことだろう、ミシェルはそう見積もって日記に記した。

すべての物事とすべての人はすでに存在し、この世に現れる機会を待っているのだと考えると、それは本当に驚くべきことだ。

あの魅力的な女性はぼくに何かを教えようとしていたのか、それとも危険からぼくを守ろうとしていたのか？ どちらにしても、危険はかわせた。

これまでもしばしば、夢の中で空を飛んではいたが、未来に飛び込んだのは初めてだ。まだ自我にとらわれているとは残念なことだ。ミシェルはこの最も大事な時に失敗をおかしたことを残念に思っていた。

「旦那、明日はカーニバルの初日ですよ」突然、庭師がミシェルに話しかけた。ミシェルは、親しげにうなずいた。

もし、ナポレオンの従者に捕まってしまったら、ミシェルは想像をめぐらせた。その足元に刈り取られた木の枝が落ちかかっている。いったいどうなったのだろうか？ 未来でも安全を確保するには、夢の中でも周りにもっと注意を払わなければいけない。高く上がれば上がるほど、落下の衝撃はひどくなるのだから。木に登って枝を刈っている庭師が、落ちてくる大枝を避けるようにミシェルに声をかけた。

いつ現実から夢に入り込んだのか？ ミシェルはさらに考え込んだ。そして、今日から毎日、飛び上がって重力を試してみることにした。高次元の世界では、重力はほとんどないとミシェルは理解していた。高い次元に行けば行くほど重力は少なくなる。

ミシェルは立ち上がって服についた木の葉を払い、広場を立ち去った。今のところ、場所によって予言が誘発されているが、いつか一つの場所から世界中どこへでも行けるようになるかもしれない。

ベニスでの数か月が過ぎると、ミシェルは変化を望むようになった。彼はもっと旅がしたかった。彼は船会社を訪ねて、次に港を出る船に乗ることにした。

三日後、ミシェルは荷物をまとめ、たった今ついたばかりで造船所の隣りに係留された三本マストの船に向かった。それは、ペルサエルト船長が指揮するオランダの商船で、通常は貨物のみを運送しているが、この航海では貨物が少ないので一般の船客も受け入れていた。

ミシェルは船大工の一団をよけながら、船に向かって歩いて行った。棧橋への渡り板では、船員が警備にあたっていた。

そのプロビデンス号は、前世紀のグロテスクで不格好な船に比べて、スマートであった。ポルトガル人とスペイン人の

間で新世界発見の気運が高まり、造船技術は急速な進歩を遂げている。

「おーい、船客のノストラダムスだ」ミシェルは当直の船員に呼びかけた。船員はミシェルに無愛想な一瞥を投げると、長い乗客リストを確かめ、オランダ語で話し始めた。ミシェルが身振りでもオランダ語はわからないことを伝えると、船員は「ノストラダムスはない」と答えた。ミシェルはリストを見せてくれるように頼んだ。

「あったよ。これがぼくの名前だ」ミシェルは自分の名前を指さすと一字ずつ発音して聞かせた。オランダ人は、鼻息も荒く、お金を出すように身振りで示した。ミシェルは船旅の料金を前払いすると渡り板を上った。

「ずうずうしいやつだ」彼は軽蔑してつぶやきながら、船に飛びのり、メインマストの脇で指示を待っている数人の乗客に向かって歩いていった。

「あんたも、仕事でマルタに行くのかい？」おせっかいな男がミシェルにたずねたが、ミシェルはむっつり首をふった。そのベニス人はミシェルには取りつく島もないことがわかったと、一人旅の女性とおしゃべりを始めた。

「いい船だよねえ、奥さん。この船を作るのに三カ月かかったそうさ」

「そんなに長く？」彼女はきいた。男は、ペルサエルト船長が注意を促すまで、とうとうと木材を研磨する方法を説明していた。

船長は、イタリア語で乗客を歓迎し、船はデルフトの磁器の荷揚げを終え、シリアへ香辛料を運ぶために出帆することを告げた。この船は、最近にぎわうようになったアムステルダムから来ていた。オランダ人は、コショウ、ナツメグ、丁子、中国茶、コーヒー、砂糖、そしてもちろんチーズを商っている。

そこへ、船員が船長を呼びに来きたので、彼はその場を立ち去った。

この腐ったような匂いは突然どこからただよってきたのだろう？ ミシェルは顔をしかめた。

出帆の潮どきのようだ。船はもやいといて、数艇の手漕ぎ舟に導かれて慎重に港を離れ、海門を通り過ぎると三角帆

をあげて微風にのって海に出た。

ミシェルは荷物を船室に運んだが、そこもいやな匂いがする。船員の一人が、この船はかつて奴隷を運んだこともあるとミシェルに教えてくれた。ミシェルは船倉の匂いのひどさに耐えられず、すぐさま外に出て新鮮な空気を吸った。

甲板では、乗客が遠くにかすみつつあるベニスに名残を惜しんでいた。

過去をふりかえるより将来を見るほうがぼくは好きだ、ミシェルは考え、自分自身に満足して甲板を船首に向かってぶらぶらと歩いて行った。

船は舳先で水を泡立てながら進み、船首からは壮大な眺めを見渡すことができた。それは鳥になって海の上を飛んでいるかのようなのであった。しばらくそこでくつろいでから、ミシェルは船尾デッキに戻った。前方デッキにはベルサエルト船長が立っていた。ちょうど操舵手が船長から舵とりを交代したところであった。

船長と話すにはいい機会だとミシェルは船長に向かって歩いていった。

「我々が船の針路を保っているか確かめに来たのかね？」ベルサエルト船長がきいた。

「もちろんです。すぐにサイレンのいる島に通りがかるので、あなたがサイレンの魅力にさからうことができるか知りたかったのです」

「ホメロスのオデュッセイアを読んだことがあるようですか？」

「ええ、ギリシャ語でだけです」

「それは、それは、学者さんが乗船しているとは驚いた。わたしも読み書きができるが、本を読む時間はないのだ。無論、地図はいつも読んでいるがね。地図のコレクションを見に私の船室に来るかね？」

ミシェルは船長の申し出に応じた。そして二人は、話をしながら船で一番大きい船室に向かって歩いていった。ベルサエルト船長は口臭がひどく、彼の船室にはその匂いがしみついていてた。ミシェルは、アルコールで口をゆすぐよう忠告しようとしたが思いとどまった。次の機会にしよう、ミシェルは思った。

船長は目の前のテーブルにアドリア海の手図をひろげた。「見てくれ、これがイタリアの半島をまわる我々の航路だ」船長はミシェルに航路をたどって見せた。「このあたりでは海賊に注意しなければならない」

「いい手図ですね」ミシェルは言った。「フランドルの手図師ゲラルドゥス・メルカトルが描いた手図だ。他にも彼の手図を持っているよ」船長は誇らしげにトランクから陸手図と海手図をいくつか取り出した。

「これらは現在の手図では最高のもんだ」船長は続けた。「新しい手図法で作られている。古い手図には間違いがたくさんあり、コロンブスはインドへの新しい航路を発見しようとして、間違った航路をたどってしまったと言われているのだよ」

「この手図があれば心強いですね」ミシェルは同意した。「でも、船の位置は星を使えばもっと正確に測量できますよ」

「もちろん、ヤコブの杖がなければ我々は迷ってしまうよ」ペルサエルト船長は笑いながら自信満々で言い、奇妙な格好の星の角度を測る器械を引き出しから取り出した。

「これを使えば、高度角だけではなく、緯度を測ることができる」船長が説明した。

「この器械は北極星に合わせるのですか？」ミシェルがたずねた。

「なるほど、君も天体のことがわかっているのだね」ペルサエルト船長はヤコブの杖をしまった。

「ええ、いくらかは……。天文学を何年も勉強しましたから」

「では、これはどう思うかね？」ペルサエルト船長は髭を生やした男が描かれたジョッキをテーブルの上に置いた。船長の顔を模写したものらしいが、似ていなかった。

「ええと、あまり好みではありませんが」ミシェルはバカ正直に答えた。ペルサエルト船長は少し機嫌を損ね、仕事に戻った時間になったことを隠そうとしなかった。しかしその前にミシェルを感心させようと銀貨のコレクションを見せた。なるほど、銀貨のコレクションは素晴らしかった。ミシェルは船長に興味深いものを見せてもらったことの礼を言い、船室を

後にした。そしてしばらく間、外で風にあたっていた。
あたりが暗くなると乗客は寝床についたが、船は軽く上下に揺れていた。夜の間に波が高くなると船の揺れも激しくなった。ミシェルはこの揺れで眠ることができなかった。
そのうちにミシェルは気分が悪くなった。そして船酔いに悩まされても何もできない自分に情けない思いであった。
四日後にようやく船はイタリア半島を回って、シシリア島が水平線に姿を現した。
ここで船を下りたほうがよさそうだ、ミシェルは考えた。ぼくは二度と船旅はしないぞ。
その夜の夕食には、ハツポットとよばれる奇妙な粥が出された。
「海獣よけによく効くんだ」船のコックはそう言って、みんなに大盛りの粥をふるまった。
「このあたりに海獣がいるのかい？」ジョセッペという名の男が恐れをなしてたずねた。
「もちろんだとも、先月なんかクラッケンから命からがら逃げなきゃならなかった。まるごと船も捕まえられるくらい巨大な海獣さ」
「ハツポットを食べれば大丈夫なのかい？」
「海獣はハツポットが大嫌いなんだ」コックが保証すると、ジョセッペはあわててハツポットをかき込んだ。
「くだらん」伝道のためにマルタに向かうカソリックの司祭がさえぎった。「きみはそのハツポットが嫌いだという海獣を実際に見たのかい？」
「いや、おれは調理場にいたので見なかった」コックは言い訳した。
「すべては、伝説をもとに恐怖心と無知から生まれた作り話さ」司祭が言い、テーブルにしていた乗客たちは安堵の息をもらした。
「クラッケンとは、非常に長い脚を持つ巨大なタコじゃないのかい？」ミシェルがきいた。
「そのとおりだ、おれの言ったことは間違いないだろ。学者さんだってそう言うんだから」コックはうれしそうに答えた。

「ぼくはマルタには行くのをやめるつもりだ」ミシェルは前もって乗客に告げた。乗客たちの数人はまた不安になったようであった。

「それに、もちろん、海賊に襲われる危険性のほうが高いよ」コックが追い打ちをかけた。

「こわい話はもうたくさんだよ」司祭がコックをたしなめた。

「ご婦人もおられることだし」

真夜中を過ぎたころ、船はシラキウス湾に入り錨を降ろした。

ミシェルは高熱を出してベッドでうとうとしていた。船酔いだろうか？ それともハツポットのせいだろうか？ オランダの食べ物は彼の胃にもたれていた。同室の船客がミシエルのうめき声を聞いて船医を呼んだ。船医は夢うつつでふらふらと現れ、ミシェルを診察した。やはり眠れなかった船長もやってきて、ミシェルに臭い息をふきかけた。

「一日三回、口をゆすぎなさい」ミシェルは突然、熱にうかされ叫んだ。

「うわごとを言っているな」船医は心配そうに言った。「できるだけ早く陸にあげなきゃならんな。陸で治療したほうがいい」

翌朝早く、ミシェルは小舟で陸に降ろされ、シラキウスの病院に運ばれた。プロビデンス号はその日のうちにマルタへと出航した。

数日たってもミシエルの病は回復せず、シシリア人の医師には高熱で木の葉のように震えているミシエルの病気の原因がわからなかった。

瀉血をして悪魔の汁を絞りださなければいかん、と医師は考えた。

「やめてくれ！」腕をつかまれたミシェルは大声で抵抗した。医師は驚いて瀉血を止めた。

時々意識をもどしてはいたが、ミシェルは何も考えることができなかった。考えようと努力するのだが、すぐにまた気を失ってしまうのだ。高熱が下がらず、医師はまた瀉血治療するしかないだろうと判断した。そのとき、アラビア人の男が彼の肩をたたいた。

「この男をわたしの家で療養させてやりたいのですが、ここ

は彼には騒がしすぎるのでしょうか。わたしが全面的に責任を負いましょう」
「これは、アルカザーリさん！」医師は叫んで姿勢を正した。

ミシェルは海辺の豪邸に運ばれ、そこで、やさしい女性の手厚い看護を受けた。その看護と潮風と静けさが奇跡を起こし、ようやくミシエルの熱は下がり始めた。

数日後、ミシエルは立ち上がることができるようになり、謎の保護者がミシエルに会いにきた。

「回復にむかっているようですね」深い茶色の目をした男は言った。

「ええ、だいぶよくなりました。ところで、ご親切にもわたしを助けてくださったのはどなたですか？」

「わたしは、アブー・ハーミド・アルカザーリですが、実際にあなたのお世話をしたのは妻のファティマです。わたしはあなたをここへ運ぶよう指示しただけです」

「なるほど、あなたは命の恩人です」ミシエルは礼を言った。アルカザーリは謙虚に沈黙していた。その後には波音が心地よく聞こえていた。

「わたしたちは二人ともシシリア生まれではないようですね」彼が言った。

「そうですね。わたしはフランス人ですが、あなたは？」

「ペルシアのバグダッドから来ました」アルカザーリは答えた。彼は頭からつま先まで毛織物で身を包んでいた。

「なぜ、この島にいらっしゃったのですか？」

「ここには自由な気風があるので、わたしと妻はここに移民して住んだのです。残念ですが、お祈りの時間なので失礼しなければなりません、またすぐにお会いしましょう」イスラム教徒のアルカザーリは部屋を去り、ミシエルは海をながめ波の動きを追っていた。翌日には、ミシエルはアルカザーリとその妻と昼食をともにできるまで回復した。

「シシリアの素晴らしいところは、アラビアとキリストの文化が融合していることです」アルカザーリは言い、ミシエルはそれに同意した。ファティマは慎ましやかにテーブルに料理をならべていた。

「プロヴァンスが恋しくはありませんか？」アルカザーリがきいた。

「いや、そんなことはありませんよ。わたしはずいぶん昔にプロヴァンスを離れて以来、各地を旅してきました」

「あなたは心のおもむくままに旅されているようですね」

「もうすでにわたしのことをよくご存じのようですね」ミシェルは驚いて返事を返した。「ところであなたの何をなさっているのですか？」

「わたしは、イスラム教の神秘主義の教え、スーフイズムに従って生きています。母国語で本を書いて出版もしていません」

「あなたの本を読んでみたいのですが、アラビア語が読めなくて残念です。でも、その本についてお話いただけますか？」アルカザーリは、しばらく考えこんでいた。その間に彼の妻が温かい食事を運んできた。

「幸福の錬金術という本が最新作です」彼は例を示した。

「イスラム教は服従を基本にしているのかと思いました」ミシェルが言った。

「そんなことはありませんよ。おそらくイスラム教徒のほとんどはそう信じているかもしれませんが、コーランとシャリアの戒律は外部へのみせかけにすぎません。アラーの教えの本質は愛ですよ」

「では、その教えがわたしを危険な運命から救ってくれたのですね」

「わが友よ、あなたは神に守られているのですよ」

「この数年というものの神から見放されているみたいだが」

ミシェルがつぶやいた。

「なるほど人生は見かけどおりとは限りませんし、常に試練に満ちています。でも、きっともうすぐあなたの人生に女性があらわれて、安らぎをもたらしてくれるでしょう」

ファティマがスープを配り、アラビア人の夫妻は黙って食べ始めた。彼らの存在は心安らぐものであり、それ以上話をしなくてもよかった。ミシェルは彼らとともにやすらかに食事を楽しんだ。一週間もすると、ミシェルは旅を続けられるほど元気を取り戻した。

「ワシが再び飛び立とうとしているようですね？」回復した

ミシェルがアルガザーリに面会を求めるとアルカザーリはきいた。ミシェルは素直にほほえんだ。

「どうしたらこのお礼ができるでしょう？」
「生きることです。それで十分です」アルガザーリは心から答えた。ミシェルは彼を抱擁し、謝礼を支払おうとしたが、アルガザーリは決して受け取らなかった。ミシェルは彼の妻にも礼をいい、再びたった一人の旅に出た。

シシリアの南部は牧歌的な平原であったが、その北部には、ヨーロッパ最大の火山、エトナ山がそびえ立っている。シラキュースの町で、ミシェルは火山のふもとは再び地震にみまわれていることを知った。昨年から、雪におおわれた山頂から大きな噴煙があがるのが見えるようになっていた。

ミシェルはこの山に興味をわいて登ってみようと思いたち、自分の身体がこの危険な登山に耐えられるかを念入りに調べた。

すべてはちゃんと機能しているようだ、最後に膝の屈伸運動を試すとミシェルは判断した。そして、照りつける太陽をさえぎるために古い将校用の帽子を買いもとめた。

火山へと向かう途中では、旅人を受け入れてくれる農場をみつけては夜を過ごした。平野をいくつか越えると、標高が急に高くなりはじめ、それにつれ一步一步が重くなりエトナ山もだんだんと大きく見えるようになった。火山のふもとの土地は肥沃で、かんきつ類、オリーブ、ぶどう、いちじく、小麦、オオムギが栽培されている。火山は生命を奪うが与えもするのだ。ミシェルは道中最後となる農場を訪ねて、エトナ山の状況をたずねた。

「道楽であの山に登ろうなんて、おまえさんの気がしれないよ」農夫は眉をひそめた。

「危険に求めているのだよ」

「まあ、おまえさんの命だから」農夫はミシェルを奇人だと思ったが、最もいい登山路を教えてくれた。翌日ミシェルは文明世界を後にした。しばらくすると溶岩におおわれた火山のふもとに広がる松林に着いた。そこで自分の位置を確かめ、オレンジを食べ、さらに林の中を進んだ。林はすぐに終わり、

山肌には岩がむきだしになった。斜面は急斜面となりミシェルは立ち止って息をつかなければならなかった。

遠くにシラキューズ湾が見え、そこに停泊する船は小さな画鋲のように見えた。それはあまりに小さくか弱く見え、ミシェルには人間の存在のように思えた。ミシェルはしばらく考えこんでいたが、やがて荷物を背負い再び歩き出した。

ぼくはとつても孤独だ、ミシェルは突然さびしくなった。ぼくの家族がなつかしい。フランスもなつかしい。ミシェルはふいにホームシックにかかりうなだれた。

急斜面をよじ登っている今は感傷にひたっているひまはないぞ、ミシェルは自分に言いきかせ、決意を新たに登山を続けた。左側には溶岩の穴が見え、そこから水蒸気が上っていた。

火、土、水そして空気。この生命の源を体験するためにぼくはここにきたのだ、ミシェルはそう信じていた。

危険はなさそうだった。最後に会った農夫の話では、ここ数年、新たな噴火は起きていない。とはいえ、火山からあがる煙はどこからでも見えた。

「おまえはおとなしくしてくれるよな？」ミシェルは登り続けた。しかし、突然、大きな地響きがして灰塵の雲があがり、ミシエルの顔から血の気が引いた。火山灰が岩壁の一つから噴き出したが、それは火口からの噴火ではなかった。

よかった、噴火ではないぞ！

苦心を重ねて、ようやくミシェルは雪が積もる地域に達した。そこには、とげの生えた植物の他にはなにも育っていない。ミシェルが深淵をのぞきこむと、数か所の側面から溶岩が流れ出しているのが見えた。

怖い光景だ。ぼくは向こう見ずな行動をしているのだろうか？ しかし、天気もいいし、山頂に達することは不可能ではあるまい。

ミシェルはついに巨大な火口が開いた山頂に到達した。火口の縁に登るとミシェルは身も凍るような恐怖にかられた。そして身体の平衡を失いあやうく火口に転落するところであった。間一髪のところ踏みとどまり地面に手をつけて身体を支えたが、彼の帽子は、ひらひらと地底に舞い落ちていった。

「危ないところだった！」ミシェルはほっとしてつぶやいた。彼の帽子は何百ヤードも下の火口の底に落ちていた。

なぜ、突然、恐怖にかられたのだろうか。ぼくの身体には戦慄が走った。あまりの高さに恐れをなしたのか、それとも薄い空気と硫黄ガスのせいだろうか？ ミシェルにはわからなかった。その恐怖から立ち直ったミシェルはあたりを用心しつつ歩きまわり、自然のすばらしさを楽しむこともできた。しばらく山頂にいと、身体が凍えてきたので下山を始めた。

火山のふもとまで無事に下ると、ミシェルは北に向かうことにしたが、それは賢明なことではなかった。それは切り立った山脈を抜ける険しい道であり、パレルモの港町にたどりつくまでに何週間もかかってしまったのだ。パレルモについたミシェルはすっかり疲れ果てしばらくは気力もなく呆然としていた。

旅続けることで心の安らぎが得られるとは思えない、ミシェルは落胆した。ノルマン様式の教会で礼拝に参列していたミシェルはフランスへ帰ろうと決心した。

ミシェルは、マルセイユに向かうポルトガル船を見つけた。三日間の航海の末、フランス軍港マルセイユの印象的な石灰岩の岩壁が見えてきた。マルセイユはサン・ジーンとサン・ニコラスの二つの大要塞に守られていた。船はゆっくりと港に入ったが、港の一部はまれにみる高潮で浸水していた。

ミシェルは舷側ごしに高潮の状況を見て、ローヌ川も被害にあっているかもしれないと不安になった。下船後、ミシェルはマルセイユの町の中心にあるカヌビエール通りに宿屋を見つけた。そして、港のまわりに数多くあつまるシーフードレストランの一つで帰国を祝うことにした。

すぐに家族に会える、ミシェルは、浸水を免れた栈橋にあるテラスに座って喜びをかみしめていた。ウェーターが注文をききにきた。

「こんにちは、ご注文は？」

「メニューにシタピラメはあるかい？」

「もちろんですとも、ご覧ください、すぐそこに泳いでおり

ます」ウェイターは冗談を言った。
「じゃあ、衣をつけて揚げてくれ。お腹がぺこぺこなんだ」
「お飲み物は？」
「ビールをもらおうよ」お祝い気分を味わいながら、ミシェルは言った。
「わたしの間違いかもしれませんが、あなたは有名なお医者さんではありませんか？ ええと、ノートル、いやノストラ……」
「ノストラダムスだ。その通り、わたしだよ。こんなに長い時間が過ぎても見分けてもらえるとは光栄だ。長いこと外国に行っていて今日帰ってきたばかりなんだ」
「ちょうどいい時にお帰りになりました」ウェイターは急にまじめな顔になった。
「どうかしたのか？」
「史上最悪の洪水が起こっているのです。アルプスで何週間も雨が降り続き、その上たいへんな高潮のために川の水の行きどころがなくローヌの三角州全体が浸水しています。追い打ちをかけるように、ペスト患者がみつかりました」
「なってこった、最悪の組み合わせだ」ミシェルは事態を知り、ローヌ川のほとりのサン・レミに住む家族のことが心配になった。
「すでに、溺死者が数多くでています」ウェイターはさらに説明を続けた。「生き残った人たちも持ち物のすべてを失い、ほとんどの人は行どころもありません。道も流され、家畜も死んで川に浮かんでいます」
「サン・レミも被害にあっているのかい？」
「おそらく。カマルグ地方全体が洪水にみまわられていて、近づくこともできません」
「ということは、人々はもはや安全な飲み水を手に入れることもできまい」
「そのことはわかりません。役場が災害対策にあたっていますが、医療経験のある人を探しています。あなたのように有能なお医者さんは喉から手がでるほど欲しがっていますよ」
「では、わたしは仕事にかかる準備をしよう」ミシェルは言った。「シタピラメの代わりに何か簡単なものを持ってきてくれ、もうお祝いするどころではないからな」

食事の後、ミシェルは役場に出向いた。すぐさま、ミシェルには二人の助手がついた。

水が引きはじめると、三人は状況を視察し応急処置をとるために馬に乗って災害地域に向かった。

「記憶を新たにしてもらうために、ぼくの処置計画を繰り返すが」ミシェルは助手に言った。「今のところ、我々ができることは、すべての人々に普通の水は飲むことはもちろん、洗濯にも適さないことを説得することだけだ。沸騰させた水か、清潔な桶にためた雨水は安全だ。帰ってきたら、バラの花びらで薬を作り、できる限りの被害者に配る予定だ」二人の助手は注意深くミ歇尔の話聞いた。

お昼前に彼らはローヌ川に着いたが、そこですでに川に浮かんでいる死体をいくつか発見した。そして馬が暴れだして手に負えなくなったので手綱をとき木につないだ。

「彼らの死因を調べてみよう」とミ歇尔は言い、助手とともに川岸へおりました。そこから、木の枝で川岸近くに浮いている死体をつついてみた。

「ひっくり返してみてください、そうすればもっとよく見えるだろう」ミ歇尔は頼んだ。助手はしばらく、おっかなびっくり死体をつついていたが、やがて死体をひっくり返すことができ、恐ろしい腫瘍におおわれたその顔が見えた。

「黒死病だ」彼らは身震いした。

「先を急ごう。馬も慣れるだろう」ミ歇尔が険しい顔をして言った。

苦労の末にようやく洪水の被害を受けた最初の村にたどりついたが、村は洪水と同時にペストの被害も受けていることがわかった。道に水があふれ、人間の死体と動物の死骸が水たまりに浮いていた。被害の状況があきらかになるにつれ、ミ歇尔はこれはいまだかつてない大惨事であるという確信を強めた。被害にあいボロボロになった村人の姿に胸が痛んだが、水についての注意を与えこと以外にはミ歇尔とその助手にできることはなく、彼らは旅を続けた。

グラン・ローヌ川とプティ・ローヌ川にはさまれた三角州は、死体のたまり場となっていて、馬はおびえて立ちすくんだ。訪れる村の状況はどこも同じであった。死神はその斧をふるい、住民には溺死をするかペストで死ぬかの選択しか

残されていなかった。ウラインの村は恐怖に支配され、生き残りの中には死に物狂いで、馬に乗ったミシェルたちにすがりつく者もいた。ミシェルはようやくのことで馬を鎮めながら、彼らに離れるように命じた。

「おまえらはなにもしてくれないのか？」やぶれかぶれで彼らは叫んだ。

「水に気をつけるように忠告してやったろう」ミシェルは答えた。

「忠告だけか？」

「そうだ、だがわたしの忠告にしたがえば、生き残れる可能性は高いぞ」

「さっさとこっちまえ」別な村人が言い放ち、三人に向かっては石や小枝を投げつけはじめた。三人は大急ぎで逃げ出した。

駆け足でいくつもの村を通りすぎ、彼らはローヌ川がプティ・ローヌとグラン・ローヌに分かれる地点までやってきた。ミシェルはこのあたりを自分の手のひらのようによく覚えていた。生まれ故郷のサン・レミはすぐそこだ。サン・レミの住民の数は十分の一に減っているということだった。

家族は無事だろうか、彼は心配になって助手を残して大急ぎで両親が住むレムパート通りに馬を乗り入れた。しかしそこはもぬけの殻であった。彼は人の気配がないかと馬を降りて調べたが人影はなく、町役場に行ってみることにした。

町役場のたった一人の役人は、ミシエルの弟の一人が町はずれの壊れかかった家を直していることを教えてくれた。ミシエルは馬に飛び乗り駆けつけた。そしてベルトランが木の柱を抱えてそこに立っているのを見つけ、駆けよった。

「ミシエル、生きていたのか」すぐにミシエルを認めたベルトランは叫び、柱を投げだしミシエルに駆けよった。二人は、涙もぬぐわず固く抱擁した。

「お父さんとお母さんは？」ミシエルは大急ぎできいた。

「しばらく前に亡くなった」ベルトランは、むせび泣いた。

「他の弟たちは？」

「エクトールはおぼれ死んだ。ジュリアンは、エクス・アン・プロヴァンスの山の上に住んでいるが、消息がわからない

い。アントワヌはアルルの町役場で働いているよ。実際のところぼくたちは洪水をよく生き残ったほうだ。兄さんからしばらく便りがなかったけど、どうしていたんだい」
「いろいろありすぎて今は話している暇はないが、かいつまんで言えば、家族を亡くした後、半年ほど気がおかしくなっていたんだ」ミシェルは答えた。

「兄さんの家族のことは、当時アジャンの町役場で聞いたよ」

「まだ、罪の意識にかられているよ、ベルトラン。ぼくがペスト患者の治療をしているあいだに、家族がペストの犠牲になったのだ」ミシェルに痛恨がよみがえった。

「崩れた家を直しているのかい？」

「そうなんだ。見ての通り仕事が山積みさ」

「そうか、仕事にもどらなくてはならんようだな。ぼくもまだたくさん仕事が残っているし。だが、すぐにもどってくるよ」そして二人は別れた。

ペストの最悪の状況が好転のきざしをみせると、ミシェルはサロン・ド・プロヴァンスに居を構えた。町の人々はもろ手を上げてミシェルを歓迎した。ミシェルはここに永住するつもりであった。一年うちにボワソンネリ広場に新しい診療所を開いた。さらに、再びエーテル油と自家製の薬を作り、化粧品と衛生に関する本も書いた。それは好調なすべりだしであった。たった一つ足りないものは愛する女性であった。

第5章

闇夜に密かに書斎におりて、
青銅の床几にひとり静かに座れば、

孤独より立ちのぼるか細き火影は、
信じて徒ならざることをば語らしむ。
(高田勇・伊藤進訳『ノストラダムス 予言集』)

白馬の群れが風とともに走り去り、その少し先でフラミンゴの群れが舞い上がり、そして再び舞い降りた。ミシェルは暇を見つけては、雌馬に乗りカマルグを駆けまわっていた。自然の広がるカマルグに安らぎを見出し、この地で英気を養っていたのだ。湖と沼が点在し水鳥の格好のすみかとなっている美しい田園地帯で馬を乗り回すことは、このうえもない楽しみであった。ミシェルは、ヒースの湿原を後にし、馬を砂丘に向けた。黒いコウノトリのような鳥がおっかなびっくり、そそくさと逃げ出した。ミシェルは砂丘の頂上で馬を止め、しばらく水平線に見入っていた。カマルグは地中海と二又に分かれるローヌ川はさまれた三角州で、島のような趣がある。長い年月をかけて堆積した川の沈殿物と潮の満ち引きによりその地形は常に形を変え、ここに来るたび、いつも何かしら新しい発見がある。この湿地に唯一人間が刻みえた印は、はるか昔ローマ時代につくられたまっすぐな道であった。ミシェルは広い砂浜に馬を乗り入れ、患者が残した印象を風に吹かれるままにぬぐい去ろうとしていた。遠くに一頭の雄牛の黒い姿が丘の陰に消えるのが見えた。ミシェルは、野生の雄牛の群れがいるかもしれないと馬を急がせた。その時、背後で速足の蹄の音が聞こえ、ミシェルが振り返ると、真黒な馬にまたがる女性の姿があった。赤いスカーフを身に付けたその女性は、挨拶もせずミシエルの脇を通り過ぎ、砂丘へ走り去った。

彼女は何かを追いかけているようだ。調べてみよう。ミシエルの馬に拍車をあて同じ方向に向かった。好奇心にかられたミシエルの馬は砂丘の頂上からその強靱な女性のしていることをながめた。彼女は、狂ったように砂煙をあげて野生馬の群れを追っているようだ。カモメ、鶺鴒や他の猛禽類の鳥が一斉に飛び去った。

彼女は野生馬を追い集めているのだ！ ミシェルは驚いた。彼女に手を貸してやったほうがいいだろう。ミシェルは砂丘を駆け下り、馬を速足で進めた。乱入者に驚いた数羽のフラミンゴは、ブランクトンを口にしたまま、ひなに餌をやるのを止めた。

「すまん」彼は愛想よく言った。湿地を越えると地面は乾いていたので、ミシェルは全速力で馬を走らせた。その間も男まさりのその女性は声をあげて、何かに取りつかれているかのように野生馬を追っていた。彼女のはるか頭上をこの騒ぎから安全な距離をおいて、白と黄色のサギの群れが隊列をなして、青空を舞っていた。ミシェルは、彼女が激しく追い立てている野生馬の位置を確かめながら、彼女に追いついた。馬の多くは右手に回って逃れようとしている。ミシェルはその行く手をさえぎった。彼女はミシェルに気づいたが、ミシェルを無視して馬を追いつづけた。

こんな生意気な女はこれまで見たことがないぞ、ミシェルは苦笑した。彼女は、まったく冷静に馬を乗りこなす、男っぽい気性とはうらはらに、均整のとれた身体つきをしていた。

だが、女がズボンをはいているなんて！ 馬を逃すまいと出来る限りのことをしようと、乗馬経験の浅いミシェルは四苦八苦していた。彼女は彼を無視し続けている。やぶに逃げ込もうとする馬もいたが、二人は追いつめられず、その機会を与えなかった。この野生馬とのかけひきは続いた。地面のでこぼこしたところに野生馬を追いつめようとした時、馬がよろめきミシェルが振り落とされるまでは、ミシエルの身体は地面に打ちつけられた。その騎馬兵のような女性は、ミシエルの具合を見に馬を近づけた。野生馬の群れは姿を消した。

「すまない、だいなしにしてしまつて」ミシェルは言った。「まったくくだわ」彼女は馬を降りながら不満をもらした。彼女は落胆を隠そうとしなかった。

「怪我はない？」彼女は少し声を和らげてきた。

「ないようだ」ミシェルは自分の身体を触って確かめた。

「でも、あの馬をどこへ連れていこうとしていたのかい？」

「どこへも！」

「どこへも、だって？ じゃあ、ぼくたちはどうしてこんなことしなきゃいけないんだい？」

「ぼくたち、ですって？ わたしは手伝いを頼んだ覚えはないわ」たしかにその通りだった。ミシェルは自己紹介した。

「ぼくははミシェル・ド・ノートルダムだ。きみは？」

「アンヌ・ボンサルド・ジョメルよ。起き上がるのに手を貸してあげるわ」彼女はミ歇尔の手をしっかりとつかんだ。

「きみは力があるね」アンヌの手を借りて立ちあがりながらミ歇尔はほめた。

「そうね。男性に怖がられることもよくあるわ」

「正直言って、君のようにたくましい女性には会ったことがないよ。ただ遊びであの野生馬を追いたてていたのかい？」

「そうよ。ここに来るのが好きなの」

「まったくまれにみる女性だ。ぼくは医者でサロン・ド・プロヴァンスに住んでいるのだが、きみはどこから来たのかい？」

「イステルのベルの沼の近くよ。あなたのことは聞いたことがあるって認めるわ、ノストラダムス先生」

「ミ歇尔と呼んでくれ。ちょっとこの辺りをまわらないかい？」

「いいわよ」二人は馬にまたがった。緑の広がるその一帯を馬でめぐる間に、少し打ち解けたアンヌはこのあたりのことを話し始めた。

「このあたりの森には時々クマが出るのよ」

「クマだって？ ここでクマを見たことはないよ」ミ歇尔はこっそりとアンヌの容姿をうかがっていた。そして、彼女は広い肩幅を除けば、実は女らしい身体つきをしていることに気づいた。その上、整った美しい顔立ちして、ゆたかな茶色がかった金髪が帽子からはみ出している。塩田にさしかかり、いまはすっかりリラックスしたアンヌは、実際に何羽かを指差しながら水鳥の話をした。二人はいっしょに過ごす時を楽しんでいた。ミ歇尔はもっと彼女のことを知りたかった。

「愛している人はいるのかい？」率直にふるまおうと決めたミ歇尔は聞いた。だが、それは率直過ぎた。

「ここでは塩がたくさん採れるの」アンヌは質問をかわして答えた。「きみのように若くて健康な人が独身のわけはないよね？」ミ歇尔は食い下がった。

「わたしは未亡人なの」アンヌが気にさわったように答えたので、ミシェルはしばらく黙っていた。やがて彼らは海岸に出て、海岸沿いをイステルに向かって馬を進めた。

「未亡人になって長いのかい？」しばらく間をおいて注意深くミシェルはきいた。

「三年近くになるわ」

ちょうどいいタイミングだ、ミシェルは思った。アンヌの家に着くとミシェルは彼女を夕食に招待した。アンヌは招待に応じ、二人は時間を決めた。

女中は家中をちりひとつなく掃除し、ミシェルは台所で自ら食事のしたくをしていた。午後には準備万端整い、ミシェルは一張羅に着替えてアンヌを待った。ようやくノックの音が聞こえ、ミシェルは緊張しつつドアを開けた。

「ごきげんよう、ポンザルト・ジャメルさん」

「あら、わたしたちは名前を呼び合う仲だと思っていたけど」アンヌはきまり悪そうにドアのところに立ち止まって答えた。彼女はこの前と同じ服を着ていた。

エレガントとは言えないな、ミシェルは少しがっかりし、居心地が悪かった。

「ぼくは気張り過ぎたね。とにかく中に入れてくれ」アンヌが居間に入ってくるとミシェルは彼女の香りに気づいた。いい匂いだ、それに少なくとも彼女の服は洗いたてだ。

「ミシェル、あなたの料理の腕前がそこそこだといひのだけれど」

「ぼくの料理の腕前を疑うのならすぐにでも手伝ってくれ。きみはまだ普段着を着ているし」ミシェルははっきりと言った。ミシェルは彼女をリラックスさせるコツを心得ているようである、アンヌは驚いた。

「ぼくはもっと楽な服に着替えてくるから、台所に行って、ぼくが用意しておいたものを見てごらん」ミシェルは階段を上っていった。アンヌは台所へ行って、あたりを見回した。カウンターにはいろいろな野菜、チーズ、魚、卵そしてパイ生地がのっている。カウンターの上の棚には、たくさんの香辛料が並んでいた。そして、戸棚の中に干しキノコの容器が

あり、ママレードの容器が幾列も並んでいた。容器についたラベルによれば、それぞれ違った果物から作られているようだ。かまどの炎の上には赤々と熱した鉄板が使うばかりになっていた。

まあ、ずいぶん本格的だわ、アンヌは気づいた。ミシエルのことを見くびっていたわ。そこへ普段着に着替えたミシエルが紙の束を手に戻ってきた。

「見てごらん、ぼくが書いた『化粧品とジャム論』だ。これはおいしい料理の作り方を知りたい人にはお勧めするよ」

「あなた、お料理の本も書いたの？」

「まだ、出版されていないがね。さて、仕事にかかろう。あそこにパイ生地がある。刷毛でとき卵を塗ってゴマを振りかけてくれないか？ ぼくは、鉄板に油をぬるから」二人は料理をしながら自分たちのこれまでの人生について語り合った。「亡くなった奥さんのことがまだ恋しいのかしら」しばらくしてアンヌがきいた。

「そうだね、時々は。彼女のことはいつまでも忘れないよ。アンヌ、クリームチーズをそっとかき混ぜて、刻んだケーパーを入れてくれないか？」

「これがケーパーなの？」

「家事の女王っていうわけじゃないようだね？」その間にもミシエルはパイを黄金色に焼き上げ、野菜の入ったチーズソースをかけた。ミシエルがその上にスモークサーモンの小片をのせ、さらにさっくりと焼き上がったパイ皮をかぶせるのをアンヌはうっとりと見ていた。

「できあがりだ。テーブルにつこう」

「こんなお料理は今まで見たこともないわ」アンヌは目を丸くして言った。

「神技だろ？」ミシエルは笑みを浮かべて皿を運んだ。食堂のテーブルにつくと、ミシエルはワインを注いだ。

「すごくおいしいわ」アンヌが言った。「あなたのことを過小評価していて、ごめんなさいね」

「ありがとう。とろろできみは乗馬がうまいね。それにいい馬を持っているし。お金持ちみたいだけど」

「主人が製塩工場を持っていたのよ」

「ああ、それでカマルグを馬で回っていた時に塩の話をして
いたのだね。工場は儲かっていたのだろうか？」

「ええ、とっても儲かっていたわ。塩はいろいろな国に輸出
されているし、カマルグはヨーロッパで一番大きな塩田地帯
なのよ。わたしの主人、ジャックは、自分の工場で事故にあ
って亡くなったの。それで工場を手放した方がいいと思っ
たのよ」

「それは、つらかったろう」
「このスツールはいったいなんなの？」部屋の隅にある奇妙
な椅子を見ながらアンヌはきいた。ミシェルは立ちあがり、
銅の三本脚のスツールを取り上げた。

「超自然現象のための道具で、瞑想に使っているんだ」
「あなたっておかしな人ね」アンヌは笑った。突然、その隅
にどこからともなく炎があがり、すぐに消えた。

「なんてこった！」ミシェルは叫んだ。
「いったい何だったの？」アンヌは驚いてきいた。
「ぼくにもわからない。まるで魔法のようだった……」二人
は考えこんでしまったが、しばらくして再び食べ始めた。

「手伝ってくれるかい？ ポテトパイを作ろう」前菜を食べ
終わるとミシェルはきいた。そして二人は台所に戻った。半
時もすると、湯気のあるメインディッシュがテーブルの上
にのった。

「ご主人のためによく料理していたのかい？」料理にナツメ
グを振りかけながらミシェルがきいた。

「ほとんどしなかったわ。わたしは、お料理をするにはそ
っかしすぎると思うのよ。でも、料理を覚えられないとい
うわけではないわ」

「よければ、そのうち料理の秘訣を教えてあげよう」ミシ
エルは提案した。二人はポテトパイを食べ終えたが、ミシ
エルは、桃にクリームとアーモンドのスライスをのせたおい
しいデザートも用意していた。

「もしわたしを感心させようとしているなら大成功よ」デザ
ートの味見をしたアンヌは言った。食事の後、二人はテー
ブルを片付け、台所で仲良く皿を洗った。

「そこにあるママレードの瓶はきれいね」乾いたコップをし
まいながらアンヌは言った。

「あれはジャムだよ。細かい皮が入っているのがママレードで、ジャムには入っていない」ミシェルが説明した。

「あら、知らなかったわ。どうやって作るの？」

「洗って乾かしてから、砂糖を加えて煮るんだ」

「そんなに簡単なの？」ミシェルはうなずいた。

「わたしは女としてもっと修行を積まないといけないよね」アンヌが言った。

「きみはそのままでいいよ」二人はきれいに片付いた台所を後にした。

「とっても楽しかったわ。でももう帰らないと」アンヌがとうとう言った。

「もしきみさえよければ、泊っていったらどうだい？ きみの家までは遠いし、一時間もすると暗くなるだろう」アンヌは礼を言ったが、自分の馬ならば三十分で家につけるからとミシエルの申し出をことわった。玄関口で、思いがけず、アンヌはミシエルの口にキスし、ミシエルの立ち直る隙も与えず去っていった。微笑みながらミシエルは居間に戻り、不思議な炎があらわれた隅に目をやった。そしてしばらくの間、二人で過ごした心地よい時を思い返していた。そして、夢見心地で階段を上ると、幸せな気分で床についた。

険しく切り立つ山が影のように輪郭だけを見せていた。開いた萼(がく)のように見えるその山頂の端にまさに風に乗って走りだそうとしている船のような形をした城が建っていた。その少し下あたり、天と地をつないでいるかのような城へと続く岩場を、一人の男が登っている。やがて男は城門に達し、衛兵に近づいた。

「ノストラダムス、とうとうきたか」ちょうど守衛についたばかりの光の輪を頭にいただいた若い衛兵が呼びかけた。ミシエルは何と答えたらいいのかわからなかった。衛兵はミシエルの当惑を見てとった。

「おまえは高次元の意識に到達したのだ。おまえにふさわしい女性に巡り合ったのだ」衛兵はミシエルに説明した。

「なぜそれがわかる？」

「おまえは彼女によって悟りを開いた！」ミシェルがそれを理解するのにしばらくかかった。

「しかし、どうしてわたしのことを知っているのだ」やがてミシェルはきいた。

「我々は地上のおまえのことをしばらく観察していたのだ」トリスタンという名のその衛兵は答えた。

「おまえの魂がこの高みに順応したとき、おまえは光の兄弟の一員となる。いと高きところに神の栄光を。さあ、立ち止まらずにわたしについてきなさい。ちょうどマニソラの支度をしているところだから見せてやろう」二人は城の中に入った。城は、太陽の位置を考慮して設計され、たくさんの部屋と廊下があった。来たる祭礼に備える大勢の半透明の人々の一団を二人は通り過ぎた。

「ドルイド・ルームを見てごらん。花でいっぱいだ」あたりの人ごみを見まわしながら、トリスタンが言った。「友人におまえを紹介したいのだが、いまのところだれも見当たらない」

「ここにいる者はすべて、わたしのよう悟りを開いた者たちなのか？」ミシェルはたずねた。

「いや、この者たちは召使いだ。わたしやおまえのような者は少ない」トリスタンは通りかかった一人を呼び止めた。

「イゾラはどこだ？」

「わたしは存じませんが」通りがかりの者は答えた。

「もし、イゾラを見かけたら、特別な客人が来ていると伝えてくれ。それと晚餐の準備に手伝いが必要だ」それから二人は、主室に向かって歩いて行った。そこには花で飾られた大きな丸いテーブルに飲み物と軽食が用意されていた。司祭が祭の準備がすべて順調に進んでいるか確かめていた。

「ここにいるとモンセギュールのカタリ最後の城塞を思いだすな」ミシェルは言った。

「そのものさ」トリスタンは同意した。

「ということは、ここにいる者たちは、まもなく十字軍に虐殺されるということか？」ミシェルはきいた。

「そんなことはない。おまえは紀元十二世紀にいるわけではない。ここには、時は存在しない。我々の祭礼と伝道に終わりはない。ここは安全だよ。イゾラがいたぞ！」長い金髪の

天使のような女性が雑踏のなかから現れた。その神々しい女性は清らかさを絵に描いたようであった。

「イゾラ、ノストラダムスを紹介しよう」

「清浄な魂を持った方にお会いできて、なんて素晴らしいことでしょう」イゾラは言った。その後、トリスタンはさらにあたりを案内した。二人はモザイクの床が印象的なオクシタン・ルームに入った。部屋の中央には、鳩の乗った三日月をいただき、足元にはリンゴをくわえた蛇がとぐろを巻くマグダナのマリアの像が飾られていた。ミシェルがその像に心を奪われているあいだにも、ラズベリー、ブラックベリー、カラントなどの果物が入ったボールを運ぶ信者がその脇を通り過ぎていった。トリスタンとミシェルは外に出て、城を囲むテラスでピレネー山麓の丘陵を眺めながら、祭が始まるのを待っていた。

「ここにはヨーロッパ全土から人が集まっているようだが、彼らはみんなカタリ教徒なのか？」ミシェルがたずねた。

「どちらかといえば、グノーシスの集まりだ」トリスタンは答えた。「グノーシスは、カソリックも、プロテスタントも、ユダヤ教徒も、いかなる宗教の信者も受け入れている。無神論者をも手を広げて迎え入れる」トリスタンは教えた。

「それが別に問題にはならないようだな」

「ここではね、しかし、我々の自由で崇高なものの考え方は、脅威ととられることもある、それが最後の公然のグノーシスが虐殺された理由だ。しかし、それは肉体が滅ぼされただけのことだ」

「なぜ、彼らは逃げなかったのだ？」ミシェルはきいた。

「大昔に我々の先祖は、山の頂に至ったならば、十字軍に殺されることも潔とする神聖な誓いをたてたのだ。解放された魂は神が最も純粋な形で姿を見せる天の高みに召されることを知っていたからだ」

「わたしなら生き延びることを選ぶであろう」

「皆が同じではないからな。その自己犠牲はこの永遠の地をつくることを意味していたのだ。人に見られずに我々が聖なる営みを営める地だ。彼らの犠牲失くしては実現できなかっただろう」

「自己犠牲とはあまりに過大な要求ではないか？」

「選択は個人の自由だった。そして、わたし自身この世の出来事には惑わされまいと誓っている。行こう、いずれにせよ、祭が始まるようだ」二人は主室に戻った。そこには何百人もの信者と新入信者がすでに待っていた。

「あそこに男がいるだろう？」トリスタンは言った。「パルジファルだ。驚くべき男だ。おまえに紹介しよう」二人は英雄然とした男に近づいた。

「初めて聖杯城に来たのか？」パルジファルがたずねた。「そうです。わたしには思いもよらぬことばかりです」ミシェルは認めた。

「わたしも初めは、何もわからず無知のまま、この城を後にした」

「では、その後に悟りを開かれたのですね」

「そうだ、しかし、そのためにはいばらの道を歩まねばならなかった」

「あなたは騎士道時代の方ですが」ミシェルは続けた。「その時代には、みんなが聖杯を探していましたが、見つけた者はいたのでしょうか？」

「たくさんの者が見つけたよ。聖杯とは、神が天地を創造された際にその素を混ぜたところの象徴だ。永遠の生命を得るには、模索する魂はこの世にあふれる矛盾をしのぐ道を勝ち得なければならぬ」

「聖杯は実存するのでしょうか？」

「見ていてごらん」パルジファルは笑みを浮かべた。円形のテーブルについていた一人の高僧が皆に注意を促し、立ち上がって演説を始めた。

「本日、我々は、神の子、イエス・キリストと彼の妻でありイシスの女神の巫女であるマグダレンのマリアを奉り、ミソラを祝う。この祝いは、イエスが聖杯から生命の聖水をお飲みになられた最後の晩餐をしのぶものだ。イエスが処刑されたのち、アリマタヤのユセフがイエスの聖なる血をまさにその聖杯に集めた。それを召使いがマグダレンのマリアに手渡し、マリアはそれを持って旅に出た。彼女はイエスの子を身ごもっており、その子の安全をはかるためにフランスへと移ったのだ。そして、このモンセギュールで子を産んだ。したがって、我々カタリはイエス・キリストの子孫なのだ。イ

エス・キリストとマグダレンのマリアを生んだエッセネ文化の遺産の守り手なのだ。後にマグダレンのマリアはラングドックに秘教学校を開いた。彼女が訪れたところにはいずこにも癒しの泉が湧いた。我々は何世紀にもわたってミニソラを祝ってきたが、今年は特別である。主の自らの力によって、その霊魂が我々のもとにもたらされた。この喜ばしき祝いに際して、われわれは聖杯を取り出し、聖水を用意した。この聖杯から聖水を飲むことにより神に近づくことができるのだ」召使いが司祭に液体の満ちた聖杯を手渡した。

「ノストラダムス、前に出てきたまえ」彼はミシエルを呼んだ。ミシエルは当惑しながらも円形のテーブルに歩み寄った。「汝は、地上での光の標である。汝の使命を全うするべく汝に力と知恵があらんことを」司祭は続け、ミシエルに聖杯を渡した。ミシエルは聖杯から聖水を飲んだ。するとミシエルの身体に力がみなぎった。

「ノストラダムスに幸あれ！」部屋にいた全員が喝采を送った。

「さて、それでは祭を始めようではないか」司祭は演説を終えた。ハーブ奏者が天上の調べを奏で始め、祭の参列者は飾り付けられた部屋のそこかしこに散り、用意されたごちそうに舌づつみをうった。静けさを求めて、テラスに出る者もあった。天候にも恵まれ、素晴らしい時が過ぎていった。

その夜ふけ、突然、衛兵の鳴らす警鐘が響いた。城は十字軍の奇襲を受け包囲されていた。見張りに立っていた兵士に矢の雨が降りかかった。パニックが起り、だれも命令を下すものがないまま信者たちはあらゆる方向に逃げ惑っている。我が身の定めを受け入れ降伏しようとひざまずいている司祭につまずく者までいた。数人の高僧は、衛兵を引き連れパルジファルとトリスタンのもとに走り寄った。

「我々はそなたたちに信仰を伝えて欲しい。急ぐのだ、逃げ道がある！」

「しかし、我々は永遠にこの城にとどまると誓いをたてているのだ」パルジファルとトリスタンは抗った。高僧たちは、切迫した面持ちで、信仰の存続の重要性を説いた。民衆の利益が最優先だ。重圧と混乱状況のもと、パルジファルとトリ

スタンはしぶしぶと同意した。ミシェルは自分が呼ばれるまでその様子を見ていた。

「彼らと一緒に行くのだ。そなたにも重要な役目がある。そなたは、人類の鏡を掲げるのだ。しからば人類は彼らに起こる出来事を知ることができ、彼らは目を開いて光を見ることができなのだ」ミシェルはどうしていいかわからず、同意するしかなかった。高僧は衛兵隊長に彼らを先導し、必要であればその後ろを障害物でふさぐよう命令した。

「ごきげんよう。我々のことを後世に伝えてくれ」高僧は、彼らを見据えて別れを告げた。

「急ぐのだ。無駄にする時間はないぞ」衛兵は言うのと彼らを離れたところへ引き連れていった。そのとき、大きな衝撃音が城をその土台から揺さぶった。十字軍がホールに侵入し、カタリの兵士は大急ぎで主室への出入り口を固く閉ざした。その外は十字軍に占領され、残された信者たちは最後の一人にいたるまで虐殺された。その間も、衛兵は選ばれた三人をヒマラヤスギの細工が施され、目を見張るほど美しい踊り場へ案内した。衛兵はそこで立ち止まり、いろいろなひし形の羽目板がはめ込まれた壁の継ぎ目を細心の注意を払って指でなぞりながら調べた。そして、一つのひし形で手を止めて押した。すると羽目板が開き秘密の通路が現れた。

「中に入れ」衛兵が命令した。トリスタン、バルジファル、ミシエルの三人は人が這い入るだけの大きさしかない秘密の穴に、飛び込んだ。衛兵がその後に続き、ひし形の羽目板を閉め、漆喰を塗って外から見えないようにした。衛兵がランプを灯すと、狭い通路が見えた。

「急ぐのだ。我々には時間がない」彼は言い、三人は急いで通路を進んだ。

「この通路の終わりで、左に曲れ」数分後、彼はささやいた。その通路は行き止まりだった。穴が開いた人の高さほどの球状の物体が見えた。城の回りの戦いが聞こえ、トリスタンは、一瞬、立ち止まり、じっと聞き入った。

「ここに入れ」トリスタンのためらいを見た衛兵は、確固たる態度で命じた。三人は従順に、脱出のしかけらしいその球状の物体に乗り込んだが、これからの起こるのかまったく想像できなかった。そのしかけは小枝と動物の皮でできて

いて、三人の男にちょうどいい大きさであった。三人はそれぞれの場所を見つけ座った。

「身体を支える手すりや足掛かりがあるぞ」衛兵は言った。三人が席に着くやいなや、衛兵はゆっくりとカプセルを動かした。球は自力で転がりはじめ、地下トンネルはすぐに垂直なトラックとなった。球はその乗客を乗せたまま数秒間に数百メートルの速度で垂直に落下し、地面らしきものにぶつかって着地し、急速度で転がり始めた。ミシェルは意識を失い、回復できなかった。トワイライト・ゾーンでは時が飛ぶように過ぎ、すべてがそこにあった。いやそれとも時が止まり、何もなかったのか？ トンネルの先には光があった。信じられないほどの数の形状と少なくともそれと同数の色があった。

「わたしはここにいるわ」ミシェルはだれかが言うのをきいた。弱々しく目を開けてみると、驚いたことにそこにはアンヌの顔があった。上下逆さで、彼女の茶色っぽい金髪が彼の鼻のすぐ上に下がっていた。

「あなたのことずっと抱きしめていたのよ」彼女は心配そうに続けた。「あなたは、凍りそうなほど冷たかったので死んでいるのかと思ったわ」ミシェルは自分のことをつねてみた。彼は地上に戻ってきていた。

「きみはどうして……」しかしミシェルには言葉を続ける力がなかった。アンヌは彼の質問を察して説明した。

「家で、夜中に突然目が覚めて、あなたが是が非でも私の助けを必要としていると虫の知らせがあったの。それですぐに厩から馬を出して乗りつけたのよ。わたしが寝室に駆けこんでみるとあなたがベッドの脇に身動きもせず倒れていたの。間に合わなかったのかと心配したわ。でも、あなたはまだ生きていたの。よかったわ。それから、あなたをベッドに引きずり戻して、普通の体温に戻るまで身体を温めていたのよ」

「アンヌ、なんてお礼を……」しかし、アンヌはミシェルの唇に指をあててさえぎった。

「お礼を言う必要なんてないわ」そして、アンヌはミシェルにキスをした。

彼女はまさにぼくにふさわしい女性だ、ミシェルは深く心を動かされ、喜びの涙が目にあふれた。そして、優しく彼女に触れるとミシエルの心をおおっていた鉄の鎧が溶けだした。長い間の苦悩が一瞬にして消え、彼の心は恍惚となった。

「ぼくと結婚してくれ」ミシエルは喜びにあふれて言った。アンヌは満面に笑みをたたえずぐに承諾した。

男と女の愛、最も美しい愛がそこにあり、歓喜がミシエルの身体を貫いた。二人は互いの腕の中で眠りについた。

翌朝遅く、ミシエルは目覚め、ベッドにたった一人で寝ていることに気づいた。ミシエルは飛び起きて、腰に布を巻くと階下へ降りて行った。

「アンヌ、まだいるのかい？」

「ええ、わたしはここよ！」ミシエルが台所に行ってみると、驚いたことに引き出しがすべて開いていて、鍋があたりに散乱していた。

「何か食べたかったのよ」ボールを手にしたアンヌは説明した。「あら身体をおおわなくてもいいわよ。裸の男の人を見たことがないわけじゃないから」彼女は食べ続けた。ミシエルはまっすぐ前を見つめていた。

「ぼくのトリュフも食べてしまったのか？」ようやくミシエルは言った。

「ちょっとかび臭い黒い物のこと？」

「そうだ、その黒い物は同じ重さの金と同じ価値があるのだよ、その上なかなか手に入らないのだ」

「あら、ごめんなさい。知らなかったのよ」

「気にしないでくれ、新しいのを見つけるから」彼女は本当にぼくにふさわしい女性だろうか？ なんでも食べてしまう女性が！ ミシエルはいまいましく思った。

「何か言った？」

「いや、何も」ミシエルは損害の調査に乗り出した。

第六章

強大なるドイツの一隊長
いつわりの救いの手をさしのべるだろう
王のなかの王 ハンガリーを助ける
彼の戦争は未曾有の流血をもたらすだろう
(山根和郎 訳)

ささやかな結婚式を終えると、アンヌはイストルからサロン・ド・プロヴァンスのミシエルの家へ移り住んだ。ミシエルの家は一時の栄華はすでに過去のものとなり、雨漏りすらしている。アンヌは、延び延びになっている家の修繕を手掛けることにした。アンヌの愛馬サレは親切な隣人の厩に収まった。ミシエルの家に移ったその日、アンヌは自分の持ち物を片付けると、いきなりみだらな様子でミシエルの上に飛び乗った。

「おいおい、気をつけてくれ。ぼくは繊細な学者で肉屋の少年じゃないよ」ミシエルが言ったが、その間にもアンヌは脚でミシエルを挟み込んだ。

「あら、亡くなった主人はぜんぜん気にしなかったわ」アンヌは驚いて答えた。

「ぼくはきみの亡くなったご主人じゃない。こっちにおいて」二人は互いの服を脱がせた。次第にアンヌとミシエルはお互いになじんでいった。ある日、アンヌは初めての妊娠をミシエルに告げた。二人の生活が軌道にのり始めた。数カ月後、ミシエルが作った化粧品をアンヌが売ろうとしている時にポールが生まれた。母親となったアンヌは女性として開花し、それは傍目からも明らかだった。アンヌの物腰はずいぶんと女らしくなった。七年間の苦難の末、ミシエルによりやく幸せが巡ってきたのである。金星が訪れる年ごとにさらなる子を授かりミシエルは祝福されるであらう。

三人目の子供が生まれて間もないある日、ミシェルは裏庭に面したベランダに座り春の気配を楽しんでいた。いたるところで蕾がほころび甘い香りをただよわせ、木々には鳥が集い歌をさえずっていた。蜂の羽音もにぎやかな隣の庭から近所の女の子が現れ、ミシエルの前を通りかかった。バスケットを手をしているから、森に薪を拾いに行く途中だろう。

「こんにちは、お嬢ちゃん」ミシエルの声をかけた。女の子はミシエルのことをよく知っていたので、礼儀正しく挨拶を返した。

アンヌは、屋根裏をミシエルの書斎に改築しようと、数人の職人と共に屋根裏で働いていた。ようやくアンヌは、ミシエルに本当に大切なことのみを専念するよう納得させたのだ。ミシエルにとって大切なこと、それは予言を占星術と結び付けることであった。アンヌは、自分の財産を持ってすれば財政上の心配はないと言い張り、ついにミシエルは金儲けのために患者の診療をすることを止めた。

ミシエルは超自然学の本の上に身をかがめていた。その背に陽の光が心地よくふりそそいだ。ミシエルは翌年に起こるであろう出来事の予言に取り組んでいた。突然、額に豆が当り、目の前に開かれていた本の上にピシャと音をたてて落ちた。

「わかったよ、もうやめんか、ポール」ミシエルは自作のパチンコで遊んでいる息子のポールをしかった。

満ち足りた結婚生活と同様に、ミシエルの創造的な仕事もまた実を結びつつあった。最近、市役所からアンペリ城の噴水のラテン語の碑文を依頼されていたし、美容法と料理の本「化粧品とジャム論」もリヨンのボラン出版からようやく出版された。その朝は、初めて手がける暦の作成に余念がなかった。この暦には、ヨーロッパの各地の出来事を予言し、十二の四行詩として掲載するつもりだった。午後にはミシエルの弟アントワーヌが雑談をしに来ることになっていた。あの悲惨な洪水を生き延びたアントワーヌは、今は、サロン・ド・プロヴァンスに近い生まれ故郷のサンレミで収税吏として働いていた。

「ミシェル！」屋根裏の窓からアンヌが呼んだ。「ちょっと見に来て下さいいな」

ミシェルは急いで家の中に入っていったが、居間では子供たちにつまずかないように気を配らなければならなかった。セザールは兄と姉に首を床に抑えつけられ、さらに兄と姉はこれでもかというほどセザールをくすぐっていた。ミシェルは障害物を避けながら屋根裏へ上がり、特注の戸棚を見た。戸棚の中には、緑、赤、黄色そして青の瓶が並べられ安全に保管されていた。ミシェルが新鮮な空気を吸えるように広げられた窓の前には、新しい贅沢な机が置かれていた。幾何学用の道具を入れる特別な収納箱も買ってあった。昔ながらの鎧戸の下には、マルセーユから持ち込まれたガラス窓がはめ込まれていた。

「ちょっと見た限りでは何も文句を言うことはないな。計量カップもみんな無事だったし」ミシェルはうれしそうに言いながら、仕事の仕上がりを目を点検した。

「いや、少し言いたいことがある」しばらくしてミシェルはアンヌに言った。そして、どう直してほしいかを大工に詳しく説明した。

その時、教会の鐘が正午を告げ、アントワヌの声が聞こえた。アントワヌはきっちり昼食の時間にやってきたのだ。洪水の後、ミシェルとアントワヌは頻繁に会うようになっていた。アンヌは階下にかけており、女中が食事を出せるようにベランダにテーブルを用意した。

「アントワヌ、座ってくれ」ミシェルは椅子もう一脚を運びながら言った。アントワヌは、マドレーヌとセザールの間に割り込んで座った。アンヌがポークソセージを取り分けた。

「これはコーシャーじゃないね」アントワヌが言った。

「ぼくだって違う」ミシェルが言った。

「ポール、食事よ」アンヌが呼んだ。これで三回目だ。ポールは木に登り、侵入者アントワヌをにらみつけていて、下りてくるのを嫌がっていたのだ。ポールは食事中もアントワヌから眼を離さなかった。ソーセージと野菜の食事を味わいながら、ミシェルとアントワヌは世間話に花を咲かせた。

「ベルトランはどうしている？」ミシェルはたずねた。
「元気だ。小さな建築屋を始めたよ」
「そりゃあ結構なことだ。アンヌが屋根裏の改築を済ませてしまっただけだ。ベルトランに頼めたのになあ」
「アントワヌはかろうじて笑いをこらえている。
「女が大工仕事をするなんて！」アントワヌがミシェルにささやいた。
「聞こえたわよ」まずいことにアンヌが言った。「今、殴られたい？ それとも後にする？」
「ごめんよ、アンヌ、悪気はなかったんだ」
「ぼくたちは、互いに足りないところ補っているんだよ」ミシェルが白状した。「アンヌが男役で、ぼくが女役だ」
「兄さんたちはまれにみる夫婦だよ」アントワヌは少しまごついてつぶやいた。
「ミシェルは自分のことを言っているだけよ。わたしは、自分のことを女らしいと思っているわ。百パーセントね」
「マドレーヌ、食べものをわしづかみにするのはやめなさい」突然、アンヌが叫んだ。アンヌがお世辞にも上品とは言えない態度でマドレーヌを叱ると、ミシェルは笑いがこらえられなかった。
「アントワヌ、お前の言うとおりのだ。アンヌにけんかを売るもんじゃない。アンヌには、ちょっとばかり磨きをかけないといけないようだ」
「ちょっと待ってよ、いつまでも若造なんだから」アンヌは言い返した。「わたしがあなたをここまで引き立てきたのよ。いったいだれがだれに磨きをかけているのかしら？」怒ったアンヌは、そう言うと食卓を離れた。
「兄さんはじゃじゃ馬ならしにてこずるだろう」アントワヌが予言した。もうアントワヌの帰る時間だった。アントワヌを戸口まで見送ると、ミシェルはベランダの椅子に座り、書きかけの本を取り上げた。夕方になって、今朝の少女が薪でいっぱいになったバスケットをさげて、家に向かって歩いてきた。
おかしいな、ミシェルは思った。少女は今朝に比べて大人びて見える。
「こんばんは、娘さん」ミシェルは声をかけた。少女はミ

シエルに手を振り、「娘さん」という言葉にクスクスと笑った。今朝は「お嬢ちゃん」と呼んだのに。肌寒くなってきたので、ミシェルは改装された書斎をもう一度調べてみることにして、家に入ろうとすると。そこでアンヌに出会った。アンヌは、ミシェルがお昼に言ったことにまだ腹をたてていた。いくら謝っても無駄だった。その日、鍋、釜が家の中を飛んだ——アンヌの手元から。

ある夜、ミシェルは新しい望遠鏡で流星群を見つけた。石や金属のかけらが、時折、大気中に突入し、その一部が燃えて流星となるということは、すでに天文学者の間では知られていたが、巷では知られていなかった。大昔に直径数キロメートルもの流星が地球に落ち、巨大クレータを作り地球の環境を根本的に変えたという話をミシェルは、読んだことがあった。ミシェルは、既成観念にとらわれず科学に興味を持っているという噂のプロヴァンスの総督にこのことについて手紙を書こうと思っていた。

総督は、著名な天文学者であるミシエルの手紙を読んでくれるだろう。知識は広く世に知らしめるべきである。その上、ミシエルには総督は自分の役に立ってくれるだろうという下心もあった。

案の定、総督は科学的知識に感謝を示す返事をくれた。さらに手紙には、最近リヨンで出版された翌一五五五年を予言した暦にも深く感銘を受けたとも付け加えていられた。総督はミシエルの予言を上流階級の人々にも紹介し、ミシエルの暦はフランス中でひっぱりだこになった。成功への鍵をつかんだミシエルは、毎年、暦を出版することにした。さらに、ミシエルは、次の千年の間に人類にどんな未来が待ち受けているのかを予言するというもっと大きな仕事も考えていた。この仕事の成果は「予言集」という名にふさわしいものとなるであろう。

仕事が首尾よく進んでいることに満足し居間へ下りたミシエルは、テーブルの上に仁王立ちしているアンヌを見つけた。何事かと驚いたミシエルがあたりを見回すと、マドレーヌは戸棚の上において、ポールは天井からぶら下がり、セザールは床を這いずっていた。

「なにをたくらんでいるんだ？」

「違うわ。ゲームをしているのよ。あなたもゲームに入らない？」楽しそうに、アンヌはミシェルに呼びかけた。

「なんのゲームだ？」

「床に足をつけちゃいけないのよ」

「わたしは、床に足がついていたほうがいい」

「あなたは、いつもくそまじめなんだから」アンヌはため息をついた。ミシェルはなんとなく傷ついて、アンヌに背を向けて書斎に戻った。書斎にはいつでもすべきことがあった。たとえ、書斎を整理するだけであっても。少し感傷的になったミシェルは、ジャンおじいさんのことを思い出した。おじいさんは、ぼくのことを良く理解してくれた。そこへアンヌが入ってきた。

「ミシェル、愛しているわ。わたしたち、けんかもしょっちゅうするけど、わたしの愛はけっして変わらないわ。でも、あなたが何を考えているか話してくれないかしら？」アンヌはそう言うのと腰をおろした。

「信じてもらえるかどうかかわからないが」ミシェルはためらいがちに話し始めた。「ぼくには、成し遂げなければならぬ仕事がある。人類が我に返らず事実から目をそむけたならば、どんな惨事が起こるかを知らしめることがぼくの使命だ。それがぼくに重くのしかかっているのだ」

「どうしてわたしたちの間に溝があるのか分かるような気がするわ。でもそれはどうしようもないことね」アンヌは理解を示した。「実のところ、あなたの仕事がそんなに重要なこととは知らなかったわ。だから子供たちと遊ぶ余裕がないのね」

「常に悲惨なイメージが浮かんでくるのだ」ミシェルは続けた。

「なんて、怖いことかしら。でも、あなたにとって、その使命は家族より大切なの？」

もちろん、この言葉はミシエルの痛いところをついた。

ミシエルは心苦しい思いでアンヌを見つめた。

「たぶん。ぼくがこの使命を全うしたら、再び、神のみもとに召されることができるようになれると思うのだ」

「それはだれでも願っていることよ」アンヌはミシエルの頬に優しくふれて、ミシエルの邪魔をしないように出て

いった。

まもなく、ミシェルは、これまで何年にもわたって日記に集めた夢と幻想をまとめて、予言集の最初の部分を完成した。ミシェルは、最も重要な予言を選び、占星術を駆使し年を割り出し、分類し、解釈し直した。ミシェルは各章をそれぞれ世紀と呼んだ。実際の世紀を意味したわけではなく、各章を百の四行詩で構成したからである。四行詩は、あいまいで、またフランス語、プロヴァンス語、ギリシア語、ラテン語が混ざり、事実上ミシェル以外のだれにも意味は理解できない。異端審問が厳しくなってきたので、こうして本当の意味を隠さなければならなかったのだ。今では家族もあるし、ミシェルは、二度と冒とくや魔術の罪を問われなくなかった。

念のため、四行詩の順番をバラバラにしておこうと決めたミシェルは、四行詩を書きこんだページを机の上にはばらまいた。ぼくの秘密は、奥義を極めた者のみに明かされ、他の人々はその予言が現実になったときに知ることになるであろう。ページを無作為に並び変えるとミシェルは原稿を脇に押しやった。ミシェルはしばらく考え込み、指で髪をすきながらため息をついた。いまだにしばしば、トリスタンとパーシバルと時をともにした、高次元の世界での儀式を思い起こし、二人がモンテギューの陥落を生き延びることができたのかと案じていた。ミシェルの幻想は薄れてきている。古文書からも夢からも答えを得られず、ミシェルにはなす術もなかった。

その数週間後のことである。星がまれにみる配置となり、ミシェルは、今度こそその答えを得て救いを得られるであろうと期待していた。屋根裏部屋でミシェルは不思議な力を秘めた銅の丸椅子を取りだした。特別な数値を計算して作られたこの丸椅子をある角度に置けば、天体と交信することができるのだ。ミシェルは正しい位置を見つけて、丸椅子を置き、そのすぐ脇の床に水を入れた器を置いた。床にあぐらをかき、ミシェルは丸椅子の足とシートを水で濡らし、椅子に頭をあずけた。そして、目を閉じ、掟を破った墮天使に思いを馳せた。すると機が熟していたのであろう、瞬く間にミシェルの魂が身体を離れていった。

ミシェルは、ある家の居間を浮遊していた。その部屋の高い天井には、ミシェルの時代には存在しなかったシャンデリアが下がっていた。シャンデリアについているろうそくは、ろうで作られたものではなく、小さなガラスの球が光を放っていた。その部屋には、赤い豪華なソファ、あの不思議なろうそくのついたランプがいくつか、そして金縁の巨大な鏡があった。オーケストラとコーラスが聞こえたが、おかしなことに、どこにも演奏者が見当たらない。音楽は、黒い円盤が自動的に回っている箱から聞こえるようであった。部屋の片隅には、見事な等身大の英雄の彫像が飾られていた。その大理石の彫像は、筋骨たくましい半神人が誇らしげに刀をかざし勝利を宣言する姿を巧みな技術で表現していた。

彫刻家は勝利に憑かれていたに違いない。この彫像は悲痛的な叫びをあげている。

軍服を着て頭を五分刈りにしたドイツ人の男が部屋に入ってくると、ホルンがついた箱に向かって歩いていった。威勢のいい音楽が繰り返し演奏され、男はその音楽に陶酔しているようであった。そして男はだれかを呼んだ。

「マグダ、どこにいるのだ？」返事がなかったので、男はさらに大声をあげると今度は返事があった。

「今行くわ！」遠くから声が聞こえ、少しあって男の妻が部屋に入ってきた。

「ワーグナーのパーシバルをかけるのはこれで六回目よ」妻は苦情を言い、すぐにレコードを止めた。

ミシェルは、自分がこの騎士時代を称える音楽に導かれてここへ来たことに気づいた。ここでも言葉の壁はなかった。

「ヘルガはお腹が痛いのよ」マグダが続けた。「何か御用？」

「ここ、二、三週間は非常に忙しくなる。子供たちに構っている暇はない。それに外国記者団へのスピーチの原稿を君に手伝って欲しい」男は紙ばさみを取り上げた。

「いいわよ、ヨーゼフ。ところで、四百年前に、一九三九年にポーランドをめぐるドイツはフランスとイギリスと

戦争をするだろうと予言をした人がいたことをご存じ？」
「じゃあ、きみはクリジンの「太陽と魂の謎」を読んだのだね」ヨーゼフがきき、マグダはうなずいた。

「党のメンバーの何人かが読んでその話をしていたが、わたしはまだ読んでいない」マグダはどこからともなくその一九二二年に書かれた話題の本を取り出し、ページを繰ってその文を見つけた。

「見てごらん下さい。この四行詩は、戦争の起こる日付と原因の両方を予言しているように思えるわ。その下にフランス語の原文があるから、確かめてごらん下さいな」マグダが言った。

「フランス語だって?! 我々はフランスを攻撃しようとしているのだ! わたしがそんな言語に時間を費やすとも思っているのかね?」しかし、ヨーゼフはマグダの勧めに従ってドイツ語版を読むことにし、二人は本をのぞき込んだ。天井からその予言に主であるミシェルが二人を見ていた。

ぼくの詩に違いない、ミシェルは驚いた。未来で自分が書いた詩に遭遇するなんて、それも自分ですら知らない未来を予言をした詩に。ミシェルは啞然として二人を見守った。

「すごい詩だわ。国会演説に絶対に使うべきよ」マグダが勧めた。ヨーゼフは、声をあげてそれを読んだ。「ヨーロッパの奥深くで、貧しい両親から子供が生まれるだろう。彼の演説に大勢の人々が魅了され、彼はドイツをさらに強大な国家へと導くであろう」

「総統のお気に召すことは間違いないわ」マグダが言った。

「気をつけなければいけないよ。もし、クリジンが出てどころだと知ったら、総統も国民も中世のフランス人の言うことなど耳を貸さないだろう」

「ルネサンスよ」マグダがヨーゼフの間違いを正した。
「そんなに細かいことを言うな。メッセージは、必ずしも真実である必要はない。簡潔に繰り返せば、たいがいそれで十分だ。わたしが事実だと決めれば、それが事実だ。それにしても、面白い意見をありがとう。プロパガンダに役

に立つこともあるかもしれん*。だが今は記者会見で発表するクリスタルナイトについての私の見解を聞いてくれ」ヨーゼフが演説を始めたが、それはすぐにベルの音で妨げられた。ヨーゼフは、角笛のついた器械から角笛を取り上げ、しばらく、何かに耳を傾けていたが、やがて角笛を器械に戻した。「マグダ、家庭教師からだ。ヘルムトとヒルダを迎えに来て欲しいそうだ」

マグダはすぐに部屋を出て行った。ヨーゼフは大きな鏡の前に立つと、記者会見のための演説の練習を始めた。

「我々がユダヤ人の持ち物を略奪、破壊したという、諸君が聞いた話はすべて悪意に満ちたでっちあげだ。ユダヤ人は全く被害を受けていない」ヨーゼフは、自分が満足するまで、大きな身振りをつけて、一言、一言をはっきり繰り返し、しばらく部屋の中を行ったり来たりし、再確認のために鏡の前へ戻った。

「絶対不変の偉大な真実は、ナチスと総統は正しいということだ。いかなることがあっても正しいのだ」ヨーゼフは、いきなり振り返り、だれかに語りかけた。

「異議があるかね？」

ミシェルは、他にだれかがこの演説を聞いているのかと部屋の中を見回したが、だれも見当たらなかった。

「おまえにきいているのだ」ヨーゼフは厳しい口調で繰り返した。

だれに話しかけているのだ？

「わしにおまえが見えないなどと思ったら大間違いだ」

ヨーゼフはまっすぐ、ミシェルをみつめていた。なんてこった、この男に見つかってしまったぞ！……一瞬すべてが凍りついてしまったかのようだった。

「わしには他の者には見えないも見えるのだ」ヨーゼフは続けた。「このことは、党の誰にも言ってはいないがね、言ったら、みんなは、わしを気ちがいだと思うだろう。おまえはここで何をしているのだ？ 亡霊君。わしを助けに来たのか、それとも邪魔しに来たのか？」

* 一九〇四年、ドイツはフランスとの戦争を预言するにせのノストラダムスの预言を広めた。

ミシェルは驚いて言葉もなかった。

この男は、驚くべき能力があるに違いない。亡霊を見ることができ、亡霊に動揺することもない。ヨーゼフは、たった一人の聴衆の前で演説の練習を始めた。

「我々、国家ドイツ社会主義労働党は有権者諸君のために行動する。我々はこの退廃した政府によってゆがめられた民主主義という名の武器庫の武器を利用するために国会へ行く。我々は、擁護者や中立者としてではなく、闘うために国会へ行くのだ。どうだい？ この演説をどう思うかね？」ヨーゼフは有無を言わせぬ様子でたずね、その後沈黙が続いた。ミシェルは、注目を浴びていることをひしひしと感じていた。

「申し訳ありませんが、わたしにはおっしゃることがわかりません」ようやくミシェルは口を開いた。

「なんだね、無知でつまらぬ亡霊か。おまえに教えてやろう。おまえがどこから来たかは知らんがね、ここは第三帝国であるぞ。庶民から生まれた半神、我がヒトラー総統閣下が率いる帝国だ。総統閣下は、現代のキリストか、少なくともジョン伝道師ともいえよう。ヒトラー総統閣下は帝王の素質をすべて備えておられる。生まれながらにして人民の指導者であり、すぐに独裁者として君臨するであろう。わしは総統閣下に心酔している。そして、つまらん謙遜はせんよ、亡霊さんよ。わしは、この全能の帝国において、重要な役割を担っておるのだ。我こそが、天才的な啓蒙・宣伝大臣閣下、哲学およびゲルマン語学博士、ヨーゼフ・ゲッベルスであるぞ。君は、どんな重要人物と対面しているのか気づいておるのかね？」

「おっしゃることは、なんとなくわかります」ミシェルは答えた。ミシェルはヨーゼフの力を無視することができなかった。

「わしの役目は」ヨーゼフは続けた「民衆の心に民族社会主義思想を刻み込み、無条件にその思想を認めさせ、彼らが二度と逃れられぬようにすることだ。それが総統閣下の思召しだからだ。普段、わしはもつと言葉を選ぶが、おまえは単なる亡霊にすぎない。おまえがわしの演説を世に知らしめることはないだろうから、わしの心のうちを話す

またとない機会だ」

「あなたが話題にしているその総統閣下が大勢の人がそんなに心酔しているのですか？」ミシェルはシャンデリアの回りを飛び回りながらきいた。

「おまえは時を旅する亡霊だな。その通り、何百万という国民が、総統閣下を崇拜しておる。わしの妻も彼を敬愛する一人だ。妻は、総統閣下と結婚したいとまで望んでいたが、それがかなわず、総統閣下に最も近いわしと結婚したのだ」

「そのヒスターはさぞかし素晴らしい人物に違いないですね」ミシェルは言った。

「ヒトラーだ！ まったくその通り。総統が目標としているのは、純血主義とアーリア人至上主義だ。総統は理想的なドイツのモデル家族——金髪白人家族——を促進しているのだ。総統閣下の子供たちだ。わしの七人の子供たち、ヘルガ、ヒルデ、ハラルト、ヘルムト、ホルデ、ヘツダ、ハイデは、金髪で青い目をし、我々のプロパガンダにはぴったりだ。ごらん、これが総統閣下の写真だ」ヨーゼフは、小さな髭を生やした男の肖像画をかかげた。ミシェルはヨーゼフの物知り顔の態度にへきえきとしてきた。演説の天才ヨーゼフは、たとえミシェルを見上げながらも、ミシェルをやりこめようとしていた。

「純血主義とアーリア人至上主義とはどういうことでしょうか？」ミシェルはたずねた。ミシェルは、ヨーゼフにやり返したくなかった。

「おやおや、わが家の亡霊は考えることができるのかね。いいことだ！ それでは教えてやろう。この世には、優秀な人種と劣悪な人種がおる。ジプシーやホモセクシャルになったり、精神病にかかったりするものは血筋や遺伝子が原因だ。わかるかね？」

「もちろん」ミシェルは嘘をついた。

「よろしい、したがって、生物学上の原因で、いろいろな人間が生まれる。我々は劣悪な人種は優秀な人種に比べて生殖が早いことを発見した。そこで、劣悪な人種を隔離し、不妊処理を施すか、手っ取り早くいっぺんに排斥せねばならぬ。さもなくば、この繁殖のアンバランスによっ

て、間違いなく我々の文化は崩壊するであろう」

ゲッベルスは偏執狂だ、ミシェルは確信し、ヨーゼフに脅されるつもりはなかった。

「クリスタルナイトもそれに関係しているのですか？」ミシェルはたずねた。

「けしからん、盗み聞きしていたのか。思ったより、はしこいやつだ。クリスタルナイトはユダヤ人壊滅への第一歩だ。我々の党員が、最近、シナゴークや店などユダヤ人の所有物を破壊することで、哀れな劣悪人種をさらしものにしたのだ」

「ということは、ユダヤ人に犠牲者はなかったということですか？」

「我々を非難しているのかね？ さっきも言ったように、わしは、必要とあれば、事実を曲げることも意に介さん。目標達成のためには臨機応変にふるまうことが大切だ。嘘も方便だよ。総統閣下とわたしは、ドイツ国民が心から願う純血アーリア人による帝国を築くことを望んでいるのだ。二つの立場からものを見ることほど民衆が嫌うことはない」

ヨーゼフは、蛇のごとく狡猾に事実を曲げることができるのだ。

「民衆があなたの策略の裏にある事実を見つけ出すことを恐れてはいないのですか？」ミシェルはたずねた。ミシェルは、自分が直面している悪魔の恐ろしさに気づきだした。

「まったくないね、しかし、大事をとって、党は、優れた作家、哲学者や科学者の書いた、ドイツ精神に反し道徳の退廃を招く中傷的な書物二万冊を焼き払った。我々が目指すのは、我々の同胞とその子孫に恩恵を与えることだ。ついに我々は、ホモセクシャル、ジプシー、反社会主義者、精神異常者から解放されるのだ。我々はすでに三十五万から四十五万人を洗淨した」ヨーゼフはとどまるところを知らなかった。

「そして、おびただしい数のユダヤ人という問題を解決するために、特別強制収容所を建設しておるが、そこでは、我々の医者がこの劣悪人種を使って人体実験を行い、アー

リア人種のために役立つのだ」

この男と話してもしょうがない、ミシェルは嫌気がさしてきた。「あなたの物差しで言えば、あなたも洗淨されるべきだ。あなたは気が狂っている」ミシェルはついに我慢できなくなって爆発した。

「それがおまえの本心か、残念だが、わしとは意見が合わんようだ。しかし、真実がすべて、党のためになるとは限らんよ」ミシエルの言葉にもひるまず、ヨーゼフは続けた。

「偶然にも真実と一致すればそれに越したことはないが、そうでなければ、事実は調整する必要がある」

もはやミシェルは憔悴しきっていた。このドイツの狂信者はミシェルを脱力させるばかりであった。

「新種の石鹼を売り込む看板があるとする、お前はどうかね？」ヨーゼフの饒舌がまた始まった。

「競合商品の質が高いことを言う必要があるかね？ そんな意見はおまえだって耳もかさんだらう。わしの政治キャンペーンも同じことだ」

ミシェルは、ここから逃げ出す方法を探していた。ミシエルのエネルギーはもはや限界であり、早くここから逃げ出さなければならぬ。ヨーゼフの言うことをもう一秒たりとも聞いていることはできない。

「もし、事実が我が意にそぐわなければ、事実を変えねばならん」ヨーゼフは繰り返した。そして、スイッチをひとつ動かすだけで、室内の灯りをすべて消した。突然、昼から夜へと変わったのに驚いたミシェルは落下し始め、シャンデリアをつかもうとしたがとどかず、床に激突した。

なんてこった、ぼくは悪魔に出会ってしまった、ミシェルは、茫然としながらも立ち上がろうとした。

「おまえのような取るに足らん亡霊にはこれが一番だ」ヨーゼフはせせら笑い、再び、一斉に明かりを灯した。強烈な電気ショックを受けたミシエルの身体はその場に崩れ落ちた。刀を振り上げた英雄の銅像の脇に横たわり、ミシェルは必死にその場を逃れる方法を探した。

「我々の理念に従いたまえ、さもなければおまえを滅ぼさ

ねばならん」ヨーゼフは非情であった。

「待ってくれ、わたしは、第三帝国の未来を予言することができるんだ」ミシェルは時間をかせごうとして言った。

「我らの美しき帝国よ、白く、白くそして美しい」ヨーゼフは、我を忘れて歌い、別なワーグナーのレコードをかけた。

「トリスタンとイゾルデだよ」ヨーゼフは言うのと、再び明かりを消した。このショックでミシェルは半身が麻痺して、意識が遠くなっていくのを感じた。再び電話が鳴り、ミシェルはその音に少し立ち直った。ヨーゼフは音楽を止めると角笛を取り上げた。

「いや、なんでもないよ。明かりで遊んでいるだけだ」

ヨーゼフは答えると電話を切った。

「さて、何を話していたのだったかね？ そうだ、きみは第三帝国の未来を予言したいと言ったのだった。無論そんなことでごまかされんぞ。わしにもきみの未来がバラ色でないことくらい予言できる」ヨーゼフは、再び、明かりを灯した。その煌々とした明かりにミシェルは、もはやものを考えることもできず、身体はがたがたと震えだし、いまにも消え入りそうであった。もう一度、攻撃されたらひとたまりもあるまい。その時、ドアが開いてマグダが入ってきた。

「子供たちを連れ帰って寝かしつけたわ。わたしがいない間にお行儀よくしていたかしら？」

「もちろんだとも、演説の練習をしていたよ」ヨーゼフは嘘をついた。マグダはヨーゼフをじっと見つめた。

「もうイレーネに会うのはやめてちょうだい。大統領のイメージに傷がつくわ」

「わたしとイレーネの間には何もないよ。イレーネはいい女優だから、ひいきにしているだけだ」

「そんな言い訳は通用しないわ。ヨーゼフ、理想の家庭を築きたいのでしょうか？ それならば、色欲は抑えなさい。さもなくば総統に言いつけるわよ」

ヨーゼフはふてくされた様子で椅子に腰を下ろすと、その視線を妻の向こうに向けた。

「わたしはもう寝るけど、明かりで遊ぶのはやめて」マグ

ダはユーゼフをたしなめると部屋を出ていった。ヨーゼフは、一秒たりとも無駄にせず、ささやかなゲームに戻ることを望んでいたが、部屋には等身大の銅像以外には何も見当たらない、亡霊は消えてしまった。ギリギリところでミシエルの魂は、その主を待ちわびていた肉体へと戻ったのだ。

「危ないところだった」ミシエルはうめいた。いまだにヨーゼフのイメージがまぶたに焼き付いていた。ミシエルは、我に返って丸椅子を脇に寄せた。そして、机の前に座ると、あの危険な経験を書き留めた。自らの光で闇を照らすことができ初めて悪魔に打ち勝つことができる、ミシエルはペンをインクに浸しながら、思い返していた。

アンヌは四人目の子供を身ごもっていた。数か月で赤ん坊が生まれるであろう。

「女の子だよ」二冊目の暦を執筆しながら、ミシエルは予言した。

「知りたくないわ！」アンヌは耳をおおって叫んだ。

「そんな大声をだすなよ。赤ん坊が怯えるよ」ミシエルが注意したが、アンヌはきかなかつた。思いがけずノックの音が聞こえ、それに応えてミシエルは玄関へ出たが、意気消沈した様子で居間に戻ってきた。

「子供たちを二階に連れていきなさい。降りてきてはいけません」ミシエルはアンヌに命じた。

「どうしたの？」アンヌは慫慂として答えた。「どうして、わたしが馬車馬のように扱われなきゃいけないの？」

「今、議論するつもりはない。後で説明するから」アンヌが子供たちと二階に姿を消すと、ミシエルは玄関に戻り、客人を招き入れた。それは軍隊からきた夫婦であった。妻は、二つの頭と四本の手を持つ、見るも恐ろしい新生児を抱いていた。千里眼の医師に会うためにツーロンから休むこともなく旅してきたのだ。夫婦が最後の望みをかけて見つめる中、ミシエルは、この怪物のような子を見て耳の後ろをかいた。

わたしにできることはない、ミシエルは考えたが、夫婦をただ送り返すのが気の毒で、形ばかりにこのシャム双子

を診察した。

「わたしのことをどこできいたのですか？」シャム双子の背中を診察しながら、ミシェルはきいた。

「ツーロンの役所で勧められたのです」若い父親が答えた。

「役所の人は先生ならなんとかしてくれるかもしれないと言っていました」

ミシェルは、夫婦に飲み物をふるまい、少しの間、生存の可能性がほとんどないその子を助けることができないものかと一心に考えていた。

「お気の毒ですが、お子さんは長くは生きられないでしょう」ミシェルは慎重に言葉を選んで事実を告げたが、それを聞いた母親は泣き出し、夫婦は悲嘆にくれて、夫が妻を抱きかかえるようにして去って行っていた。

アンヌが子どもを連れて階下へと降りてきて、何が起こったのかと訊ねた。

「ぼくはただ、君たちに悪夢をもたらすような身の毛もよだつものを見せたくなかったのだ」ミシェルは説明した。子供たちが寝た後に、妊娠末期のアンヌに少しだけその秘密を明かしたが、それでもアンヌは恐れおののいた。

それから数カ月後、ミシェルとアンヌの第四子が誕生した——幸いその子は五体満足であり、ミシエルの予言通り女の子だったので、ポーリーンと名付けられた。アンヌはすぐにまた身ごもった。家事に忙しく、子供の泣き声と嬌声は書斎の静かな環境を乱したがミシェルは構わなかった。解決は簡単だった。階段に仕切りの扉をつけたので、ミシェルは静かに仕事に打ち込むことができた。翌年に起こる出来事を予言し、いろいろな人の星占いをするだけでなく、ミシェルは、二十世紀についてもっと知ろうと試みを重ねていた。しかし、もう丸椅子のトリックはきかなかった。ミシェルは、マルセーユの魔術用具を売る店で新しい道具を見つけた。家へ帰るとすぐに、ミシェルはその謎めいた箱を持って書斎へ上がった。ミシェルは、箱から壊れやすいボールを慎重に取り出し床に置いた。そして、階下に下り庭に出て、天水桶から水をくんだ。

「喉が渴いているのね」庭で洗濯物を干していたアンヌが言った。

「喉がからからだ」アンヌと言い争いをしたくなかったので、ミシェルはそう答えると水が一杯に入ったバケツを持って書斎へ戻った。今日こそ、世界大戦のきっかけとなる偉大なドイツの指導者、ヒスターの元を訪れることができるだろう、ミシェルには確信があった。ミシェルは、水をボールに入れ、そこへ幻覚を起こす作用を持つ香油を加えた。ミシェルはその脇に座りしばらく水の表面を見つめていた。だんだんとミシェルの気持ちは落ち着いた。蒸発した香油の匂いが空気中に漂い、ゆっくりとしかし確実にミシェルを酔わせ、ミシェルは深いこん睡状態に入ってしまった。突然、だれかが後ろからミシェルに抱きつき、ミシェルは、身を立て直すひまもなく前へのめった。

「パパ、見せたいものがあるんだ」ミシェルの首に抱きついてセザールが叫んだ。

「ばかやろう！」ミシェルはののしり、セザールは恐れをなして飛びのいた。セザールは父が怒ったところを見たことがなかった。父は、いつもはとっても冷静なのに、今、父の目は炎が燃え上がり稲妻が走っている。ミシェルは、我が子がそこにしょんぼり立っているのを見ると、かんしゃくを起こしたことを後悔した。

「かんしゃくを起してごめんよ。タイミングが悪かったのだ」ミシェルは、息子に手を差し出した。セザールは一瞬ためらったが、恐る恐るミシェルの手を握った。

「セザール、だれの心の内にも悪魔が棲んでいる。お前のお父さんの心の内にもな。悪魔の力をコントロールする方法を学ぶのはいいことだ。たった今、わたしは失敗したがね。幸い、わたしたちには良心がある」

二人ともかなり動揺していて、落ち着くまでには数分かかった。

「ミシェル、下りていらっしやいな。あなた驚くわよ」突然アンヌが階下から叫んだ。

「今度は何だい！」ミシェルは不機嫌に音をたてて階段を居間へ下りていったが、そこにはだれもいなかった。

「誕生日おめでとう」アンヌと子供たちがはやしたてなが

ら台所からあらわれた。

「ドアの脇にプレゼントがあるの」ミシェルは五十歳になったのだ。ミシェルは頭痛がしてきたが、不承不承玄関へ行って見た。しかしプレゼントは見つからず、肩をすくめて居間へ戻った。

「ドアの外だよ！」みんなが叫んだ。ミシェルはぶつぶついいながら玄関へ戻りドアを開けた。

「パパーン」ホルンの音になった。市民の一群がミシェルの前に立っていた。

「ノストラダムス先生」レミレ市長が声をかけた。「先生の半世紀を記念する五十歳のお誕生日をお祝いすることができ、我々は光栄のいたりです」

本当のところは、ミシェルは、市長の目の前でピシャリと扉を締めたかったのだが、興奮する市民と家族の手前そもできず、がまんするしかなかった。

「先生はサロン・ド・プロヴァンスにとって」市長は続けた。「特別でたいへん価値ある存在です、そこで市議会は先生の銅像を建てることを決めました。ぜひ市庁広場にご足労いただき、先生のその手でご自身の銅像の除幕をお願いしたいのです」

ミシェルは逃れようもなく、すぐさま引っ張り出され、お祭り気分の群衆にかつがれ、市庁広場へ連れていかれた。そこには幕のかかった銅像が立っていた。

「市民のみなさん」銅像の前に着くと市長は叫んだ。「本日、我々の誇り、ノストラダムス先生は五十歳になられました。そこで市議会は、先生に敬意を表し、名誉市民の地位を授けるとともに、その銅像を建立いたしました」

市長はミシェルに銅像にかかった布を引いて取り除くよう頼んだ。ミシェルが布を引くと、ミシェルに生き写しの銅像が現れた。オーケストラがファンファーレを奏で、市議会議員がお祝いを言おうとミシェルのまわりに我先に集まった。賞賛の嵐が収まると、怒り心頭に達していたミシェルは群衆の隙をついて家へ逃げ帰った。市長はアンヌと言葉を交わし、市議会議員は無料でふるまわれた軽食を楽しんでいた。その後、成り行きに満足したアンヌが、子供たちに広場に残ってボール遊びをすることを許し、家へ

帰ると、居間には、ミシェルが頑な様子でアンヌの帰りを待っていた。

「こんなふうには驚かされるのは金輪際ごめんだ」ミシェルはきつい調子で言った。「君がセザールにぼくを呼びに行かせた時、ぼくは神経を集中させていたのだ。心臓が止まるところだった」

産着にくるまれたポーリーンが泣き出した。

「大丈夫よ、ポーリーン」アンヌがなだめた。「わたしたちは、いつも変わり者のパパに合わせなきゃならないの。パパは、地球は自分を中心に回っていると思っているんだから」

この言葉に大いに憤慨したミシェルは、強情な妻に背を向け、ぶつぶつとののしりながら階段を上って行った。

「あなたは、いつだっているいろいろな悲惨な出来事に没頭していたいんだから」アンヌが追い打ちをかけた。「私たちはあなたとは違うわ。時には楽しみたいわ」

ミシェルは自分が型破りな妻を持っていることを自覚していたが、これは行き過ぎだった。ミシェルは、これを最後に屋根裏部屋のドアに鍵をかけた。ミシェルは、ふくれ面で一日中屋根裏部屋にこもっていたが、夕方には機嫌も直り、寝室へ下りてきてアンヌに謝った。

「君の言う通りだ。わたしは深刻に考え過ぎるから、君と子供たちは苦労しているに違いない。だが自分のやり方を変えることはできないんだ」

「今に始まったことじゃないわ。ここに来て服を脱いで」アンヌが言った。ミシェルはベッドにもぐりこみ、二人は愛情をこめて抱き合った。

「あなたが自分の使命をまっとうしなきゃいけないことは分かっているわ」アンヌは言葉を続けた。「わたしも最後までそれに協力するつもりだけど、ちゃんと生活もしたいのよ」

アンヌの理解にミシエルの心もなごみ、二人は愛を交わした。

「君に出会ってほんとうによかったよ」満ち足りてミシエルは囁いた。

しかし、その翌朝、目覚めたミシエルは悪寒がした。身

体中が燃えるように熱かった。昨日の出来事にミシエルの身体が音をあげたのだ。ミシエルのうめき声に目覚めたアンヌは、ミシエルがひどく具合が悪いことに気づいた。

「お医者さんと呼ばいましょうか？」心配したアンヌがきいた。

「ぼくは医者だよ。ぼくに必要なのは休息と愛だよ」彼は付け加えた。ミシエルは、数日間床を離れることができなかった。アンヌは身重だったが、献身的に看病した。

気の休まる暇はひと時もないわ、ミシエルのためにゆで卵をむきながらアンヌはため息をついた。ミシエルをもっと好きにさせてあげなきゃいけないのね。

イースターに次いで盛大な祝日であるクリスマスのことであった。いまや子供五人の大所帯となったノストラダムス一家は、イエス・キリストの生誕を祝うサンローラン教会の礼拝に参列した。教会では、その年初めて、キリスト生誕のシーンを実寸大の像で再現し、だれもがそれを見るのを楽しみにしていた。子供たちは像に向かって走り出し、ポールとセザールは、キリストが眠る飼い葉桶のすぐ脇までいきついた。

「ママ、アンドレはキリスト様にそっくりだよ」ポールは生まれたばかりの弟がキリストに似ていることを指摘した。

「アンドレの方がかわいいわ」群衆の背後からアンヌが答えた。回りの人々は怪しむような目でアンヌを見た。

「なんて不謹慎な」群衆の一人がアンヌを責めたが、アンヌは気にもかけず、ミシエルとともにクリスマスの人形の見物続けた。少し先のマリアとヨセフそして羊飼いの人形は、人だかりも少なく、さらにその先の東方の三人の王はほとんど注目されていなかった。やがて、参列者は木製のベンチに着席を求められた。ミシエルは子供たちに、キリスト生誕シーンを再現する飾り付けを始めたアッジの聖フランシスコの話を手短にした。聖フランシスコは、文盲の人々にもクリスマスの謂れを伝えようとしたのである。しかし、子供たちは、魔法のように礼拝堂にきらめく何千もの灯りに心を奪われ、ミシエルの期待に反してその

話に感銘を受けた様子ではなかった。クリスマス劇の時がやってきた。アルルの歳老いた大司教は、劇を始めようとランタンを振っている。

「紳士、淑女のみなさん、クリスマスはイエス・キリストが我々にもたらした新しい生命の誓いです。そして今ここに、その美しいイエス・キリストの生誕シーンを再現します。どうぞ、お楽しみください」

役者たちが舞台に現れ、聴衆は熱心に身を乗り出した。いや、聴衆全員ではない、ミシェルはこのクリスマスの催しに少し懐疑的であった。プロテスタントが現れるまでは、こんなに美しいクリスマスの催しはなかったし、大司教がこんなに愛想がよく、説教を短く切り上げることもなかった。明らかに反改革派は民衆の心を取り戻そうとしているのだ。しかし、この教区の人々から非難の声があがることはないであろう。ミシエルの純真な子供たちも洗脳されつつあった。ミシエルは、反感を持って、このわざとらしい劇を見ていたが、聴衆の興奮と歓喜の様子に少し譲歩した。最後の場面は、飼い葉桶へと向かう羊飼いと三人の王の行進であった。教会の純粹とは言えない動機にもかかわらず、それは楽しい夕べであった。ノストラダムス一家は満足して家に帰った。その夜、アンヌは六人目の子供を身ごもった。

翻訳作業中 translation in progress